物を見るに。やり戸は蔀の間よりもあかし。天井のたかきは。冬さむく灯くらし。造作は用なき所ろをつくりたる見るもおもしろく萬の用にもたちてよしとぞ人のさだめあひ侍し。

とかきつけたり。大星好々見をはりて頂戴。大によろこびていへらく。前に寺岡平右衛門鎌倉に下り。敵地の光景をうかゞひて告知らせけるゆゑ。大抵これをさとすといへども。いまだ詳ならず。日夜此事のみうれひたるに。おもひかけず此圖本を得たると。大なる幸ひ。さもあれ何人の厚情によりて。此雪中にうづめおきけるやと。ひたすらあやしむ。本藏かたはらよりうかゞひ見て云。正是此書は兼好法師の字跡。曾て小人彼人に和歌を學びて。舊交の情ふかし。彼人前年武州金澤にすみたる刻み。師直かれに托して居館の繪圖をかゝしめたりときゝぬ。おそらくは此圖本。その時の草稿ならん。小人法師の主意をはかるに。説苑にいはゆる天地親みなし常に善人に與すといへる意にて。足下にこれをめぐみたるならん。さはいへいつのほど何人をして此雪佛のうちにはうづめおかしめけん。いぶかし〳〵と云ふ。大星きゝて。小人兼好師父の大名をきゝたると年あり。今已に同國に住といへども。緣なくしていまだまみえざるに。かやうの厚志にあづかることと感佩にたへず。正是我爲には。孫吳の書三畧六韜にもはるかに養たりと云て。ます〳〵よろこびけり。却此文匣はいつのほどたれをして。那里にうづめおきたるなれば。兼好昨夜戸難瀨母子にわかれてのち。倘彼等路中におきて。又土兵等がめにかゝり。落難せんことをおそれ。暗に彼命松にいひつけて。見えがくれにまたがはせけるが。その時彼文匣を把て命松にあたへ。まか〳〵せよといひつけけるほどに。命松うけたまはりて。戸難瀨等が跟に隨來り。此に到着たるを見とゞけてかへりゆく時。彼文匣を暗に雪佛のうちにうづめおきけるとなん。都て是兼好が厚志なりけり。扨戸難瀨は鎌倉にて獄につながれ。彼地をおひはなたれしとをはじめとして。道中におきて馬隷をころしたると。およひ兼好が菴に隱匿て。命松が好意にあづかりしこと。昨夜彼菴をはなれてこゝに來りしとまで。首尾をつばらに説ければ。大星父子も昨夜危急の難をのがれたるとを説て。一齊に恙なき出會をよろこびけり。本藏いへらく。大星兄の忠義感ずるにあまり有り。當初唐山の伍子胥吳王を諫勸て死したるは。いまだ忠義と稱するにたらず。昔者豫讓。今也大星。併て倭漢たゞ兩箇の名士なり。やよ小涙。かゝる忠義の大星兄を丈人となし。見の力彌を丈夫とするは。皇妃となるにもまさりたるぞ。嗚呼臣たるものゝ鏡なる哉といひて。ひたすら稱讃しけり。後人つらねたる詩あり。

説得て好
懷君執節辱ニ其躬一
還薄子書强諫功
殊賞大星兼ニ豫讓一
兩臣相列鑑ニ誠忠一

却大星本藏にむかひていへらく。加古川兄那雪中の竹を見玉へ。雪は和訓そゝぐと云文字ゑ。竹のすぐなる生れは恰足下の性質に似たり。權雪におそはれて身を屈め玉ふといへども。今已に昔日の耻をそゝぎ給へり。雪をはらへばかの竹もおもてをおこす時いたれり。恭喜々々といふ。本藏ます〳〵よろこびていへらく。小女が親事とゝのひ。一世的指望今日一度にとげ。百慮氷のごとく息みぬ。さはいへ足下の密事をきゝて。もらさじといふ誓ひには。小女の小涙。おもては新婦。うち〳〵のこゝろには質子ともおぼされてひとへにあはれみ給るべし。大星いへらく。新婦のことはいさゝかも怠慢すべからざれば。只心安くおぼされよ。本藏いへらく。多謝々々。足下の厚情いづれの日かむくひ申べき歸國にのぞみて心火急ばもはや告別申すゑといひて。戸難瀨もろとも立出んとす。小涙はさらゑ。大星親子唯是わかるゝにおのびず。涙をおさへて門おくりす。本藏夫妻は只依々戀々として出て行ぬ。此後いかなるとかある。且聽二下回分解一

忠臣水滸傳後編卷之三畢

忠臣水滸傳後編卷之四

東都　山東窟京傳著

第十回

島寺袖義士を眷戀す
天川屋屠兒を拳打す

話說塩冶の家士に。山背助宗村と做叫的ありしが。原來大力にして酒をこのみ。一分の酒を吃ときんば則ち一分的本事あり。十分の酒を吃ときんば則ち十分的氣力あり。弓馬鎗棒はさらなり。十八般の武藝盡く通曉し。忠義をたふとみ名利をいやしめ。柔をたすけ剛をくじく豪傑にして。人の危難を見てはかならずすくはずといふことなし。志かるにすぎつる建武の年間。故廷尉高貞公在世の刻み。かの宗村年廿一二歳の時にてありしが。主君の命により。事を管て大和國にいたり。旅店に數日をすごす。一日閑に乘じ獨歩してこゝかしこにいたり。山水を遊覽して一ッの街にいたりけるに。這處は是當國の要路なれば。人烟輳集。語話喧闐。士女老少道につらなりて。東にさり西にいたり。綿々絡繹として。ゆきゝまばらくもたえず。げに行川のながるゝに似たり。宗村なほ此邊を繞て見るに。こゝに一坐の拘欄あり。看的人きそひあつまり。

いとにぎはしかりければ。宗村これを一見して解悶せばやとおもひ。たゞちに欄のうちにいたりて看に。一個の舞妓臺の上にあり。いまだ舞をはじめずといへども。看的人臺の四方にあつまり。群をなし隊を曳てのぞみ見る。宗村諸人の叢裏に鑽入。前にすゝみ出てこまやかに見るに。かの白びやうし。年紀は十六七歳。衣服は故衣にして十分の美なしといへども。容貌はなはだ美麗にして。梨花雨を帶し。白玉香を生ずるがごとく。大に動人的顔色なり。見るがうち又一個の老翁臺の上に出て。諸人にむかひ禮をなしていへらく。小人們は這回他國より當所にいたりたる父子の者にて侍り。小人かく年老て零落し。なりはひなきゆゑに。只這女兒をよすがに今日をいとなみ侍り。伏てねがはくは。各位看官。一覽のゝちかならず賞錢をめぐみ玉ひて。小人們をたすけ玉へといひをはりて。樂器をうちならしければ。かの妓女衣服をかいつくろひ。扇を把て。ゆるやかに身をおこし。まづかにあゆみて。已に舞をはじむ翠帳紅閨萬事の禮法異りといへども。舟のうち波の上一生の歡會是おなじと唱ひ。柳腰たよ〳〵として。蓮歩かろくはこび。袖をひるがへし裙を曳て。鸞鳳のごとく舞ければ。見物の諸人咄と喝采聲。まばしがほどやまず。誠に是莫愁的歌。陽阿的舞を見きくこゝちせりとて。大に感嘆をもよほしけり。さて舞をはりてかの老翁賞錢をこひければ。もろ〳〵の見物。おのがまゞ錢をあたへておしあひて出ぬ。宗村も拘欄の外に出て。日色をあふぎ見るに。はや西山にかたむきしかば。

いそぎて旅舍にかへりぬ。又日ごろへて。宗村ふたゝび街にいたり。酒店の樓に上りて。酒肴をもとめ。みづから數杯をかたむけて大に興に入り。偶四邊をかへりみつるに。壁のうへに一首の詩あり

要レ拯ニ危難一應レ拯レ急　遷延轍鮒立地枯
眼邊一過無レ救レ難　失口不レ談ニ眞漢夫一

宗村此詩をよみをはりて打咲。這是かならず好事のものゝ戲書ならん。心にくき詩の意哉とうちひとりごちて。心中大に綽趣。また數盃をかたむけて爛醉しける折しも。間壁閣子に人ありて哽々咽々と哭聲ときりに聽かりき。宗村これをきゝて忽然として怒。碟兒盞兒を把。地上に丟在ていへらく。此家のともがら何奴才を紙門のうちにおき哭しめて我酒興を妨ぐるや。我今日此に來りて酒肴をもとむれば。是乃ち一個の主顧ならずや。さからば一點の興をもそゆべきを。さはなく烏晦氣哭聲をきかしめて。興をやぶるはいかなることわりぞと。たかやかに罵ければ。酒保これをきゝ。慌忙樓に上り來り。こしらへなごめんとしたる處に。やをら紙門をひらきて。一個の老兒一個のわかき女をひきて立出。うや〳〵しくひざまづき宗村にむかひていへらく。我輩貴客のこゝに居玉ふをさらず。心中辛苦あるまゝに。おぼえず哭て興をさまたげ侍り。露ばかりも此家の人等のまれるとに侍らず。ひとへに無禮の罪をゆるし玉へといふ。

宗村かの兩人を見るに。熟面的にてあれば。乃ちとひて曰。儞們は當地の拘欄におきて舞をなす者にあらずや。何のゆゑによりてさばかりうれふるぞ。老兒が曰。のたまふがごとく。我等父子は歌舞吹彈をなして世をいとなむ者に侍るが。這回ゆゝしき大事おこりたるによりて。志かかなしみ侍りぬといひさして。兩人ともに涙を撲籟々々とおとしければ。宗村つく〳〵兩人が光景を見て。たちまち憤怒の意をひるかへして。憐憫の心を生じ。ことばをやはらげて云。小生は是。權當地に足をとゞむる旅人なり。我性質人の危難を見て。むなしくすぐるとをはぢとす。儞兩人のおもてを見るに。恰も槁たる木のごとし。心中の苦辛猜せり。ゆゝしき大事とはいかなるとぞ。つゝまず來歷をかたれ。我ちかひて儞們をすくふべしといふ。かの老兒暗に宗村が撲樣を見るに。志氣堂々威風凜々として。よのつねの人物にあらず。さらに言語自然に誠あるをきゝて。すこしく力を得て曰。なさけふかきおふせにつきて事をつゝまずかたり侍らん。小人は原來越前の國の者にて。島寺内記といふ樂戸なり。これなる女兒はいとけなき時より歌舞をなし。つねに高貴の宴席にめされ。島寺の袖とよびぬ。前年新田羽林義貞公。金ケ崎におきて船あそびありし時。かしこくも春宮の御前にめされ。歌舞をなしてあまたかづけものたまはりしより。漸々に家榮てさきまで衣食とぼしからざりしが。賊のために家をやかれ財をうばゝれて。一時に零落し。せんすべもなければ。前月當國にいたり。當地の拘欄をかりて女

兒に歌舞をなさしめ。小錢を乞てわづかにいとなみとす。志かるに當國の屠者長。偶女兒を見てふかく愛慕し。志ひてめとらんことをもとむ。もしうけひかずんば。父子ともにとらへていたくうきめを見すべしとて。當鄕の出口〳〵に毎日に手下をつけおきて守らしむ。此ゆゑに我等圈のうちの羊のごとく。のがれいでんことあたはず。只心をくるしむるのみなり。此よしを官府に首告とおもひ侍れど。當地の人等は後日彼等に仇をかへされんことをおそれて。一個としてともなひいづる者なし。明日は好日なるよし。女兒をむかへとらんとつげおこし。事已にこゝにせまりぬ。屠兒を女婿となして姓名をけがさんよりは。寧索父子ともにくびれて死んに志かじと心をさだめ。親子は一世のちぎりとかきけば。泉下におきて再會のほどもはかりがたくおもひ。一杯をくみておや子今生のわかれをなさんとて。此酒樓にいたり。おぼえず哭て興をやぶり侍り。ひとへに罪をゆるし玉へと涙をのごひつゝ。つばらにかたりければ。宗村これをきゝ呵々と咲て曰。何等の大事かとおもひつるに。這是かやすき小事なり。那腌臜潑才良心をめとらんとのぞむは身のほどを志らぬ奴才也。我這拳那厮がかうべを打くだきて。おん身等のうれひをはらふべし。彼が家はいづれの處にありや。内記が曰。此所より五里ばかりをへだちて一座の高山あり。捉鬼山と稱す。かの山中に住とあり。宗村が云何にまれ此處は事を議するによからず。おん身はいづれの處に住や。内記が云。這街のうしろに一軒の空房あるをかり

て旅宿とし侍り。宗村が云。まからばおん身の旅宿にいたりて。事を議すべしといひて。やがて酒錢をつくのひ。つひに三人一齊に酒店を出てかしこへ行ぬ。さて宗村内記が旅宿にいたりて云。小生はやおん身等をすくふべき良計をおもひつきぬ。その計は如此々々這般々々といふ。父子これをきゝていまだ十分に心を安んぜずといへども。もし計まそんじなば。その時死すともおそかるまじ。とまれかくまれ這人の主意にまたがふべしと心をさだめて。只兩人三拜してふかく恩を謝しければ。宗村はわかれを告ておのが旅店にかへりぬ。かくて次の日黄昏絶。ふたゝび宗村島寺が旅宿にいたりけるに。今夜は屠兒が方より袖兒をむかへに來るべき約にてあれば。手下等を欵待べきまうけの酒肴など。父子てづからとゝのへたつるとて。はしりまはりて居けるが。宗村が來りしをよろこび。一間のうちに請じて且酒をすゝむ。宗村は曾て心中に計あれば。のどかに數盃をかたむけてまちけるに。二更のころほひにいたり。屠兒の手下ども十四五人。あやしげなる禮服を穿し。一乘の轎子を擡げ火把をふりてらしてすゝみ來り。白板盤子に。冐絮。素衣。帶等。婚儀の禮服を盛たるを把。一回的口稟をのべてこれを呈す。内記これをとりをさめ。酒肴を把て手下等にすゝめ。何くれとして時うつりければ。手下等まきりに催促す。袖兒おくの間に入てかの素衣を着かへ。冐絮を戴き。渾身白漫々地打扮て立出。父にたすけられて轎子にのりうつりければ。手下等これをかゝげ出し。一齊に恭喜々々

といひつゝ。いそぎ行けり。原來彼屠兒長は。捉鬼山に住て家大に富。大厦美麗を盡して恰も諸侯の第宅に似たり。まかるに此夜新娘をむかふるとて。前門に篝火をたき。廳々に燈燭をてらし。こゝかしこに蠟燈をたて。手下の男女あまたはしりまはり。いと美々しきまうけのさまなり。時に遠見の者走りきたりて。はや新娘の轎子來れりと報じければ。手下等前門に出て轎子をむかへ。みちびきて正廳に擡のぼせけるに。やがて彼長。異樣なる禮服を穿て立出ぬ。這屠者生得てはなはだ醜漢なり。但見

眉は濃して。蛣蟖のうごめき出たるがごとく。眼は圓して。銅鈴をかけならべたるに似たり。鼻低。頰高。耳小。口歪り。腮の邊に赤き鬍鬚ぞげり。黄なる牙齒なみわろくなぶ。若閻羅王。丐人に轉世たるにあらずんば。定是。生殺神。新婿に假扮したるならん

さて彼屠兒。立よりて轎子の戸をひらき。みづから新娘の手をとりてたすけ出さんとす。時にかの新娘。たちまち冐絮を把てなげすて。轎子ををどりいで。はやく一脚をとばせて屠兒を蹋倒。鐵石のごとき拳を提起て。呀といひて。鼻子上を打けるが。打得鮮血迸流。鼻半邊に歪て。恰も箇の醬油舖をひらきて。醎的。酸的。辣的。一發都滾出來に似たり。なほ眼眶の際。眉の稍に就て。連て二拳打ければ。可憐這屠者。眼やぶれ烏珠迸出て死しにけり。這新娘に假扮たるは乃ち是宗村なり。手下どもこれを見て。迷魂湯。新娘とおもひしは大ばけものにてあるぞ。

那厮のがすなといひて。七手八脚竹鎗を把て圍住。宗村衣服のすそをとりてたかく帶にかいはさみ。鐵燈檠を把て。ちかづく者十四五個打倒し。四面八方にめぐりてふりまはしければ。立地にうちころさるゝもの十餘人。疵をうけたるものは數を志るべうもあらず。宗村こゝちよくおもひ。なほ敵する者あらば打ころさんとためらひ居けるが。たけき勢ひにおそれたるにか。一個としてちかづく者なければ。つひに門外にはせ出ぬ。さて認得徑路といへども。月明に乘じ。道をもとめてはせかへり。たゞちに島寺が旅宿にいたりて。かのはたらきの始終をかたりければ。父子のものは只話をきくすら身うちわなゝきておそれぬ。宗村は手下ども此家にきたりて仇をかへすべきをおそれ。此夜急に父子をして家内をとりをさめしめ。行裝をさせ。圓金五塊あたへて盤纏となさしめ。おのれみづから父子のものにつきそひて。此處を立出。間道をよぎりて國境までおくりゆきぬ。島寺父子わかれにのぞみ涙をおとして曰。我們おもひかけず相公のたすけによりて。あやうきいのちをたもちぬ。委是重生父母也。もしゆくすゑつゝがなく今生にながらへなば。異日いさゝか大恩をむくゆべしといひて。地上にふして禮をなす。宗村曰。大丈夫の作事はかならず始ありて終りあり。此所までおくり來ればはやきづかはしきことなし。此にてわかれ申さん。緣あらば再會すべき時あらん。つゝがなくおはせといひて。つひに別を告ておのれが旅宿にかへりぬ。島寺父子はいづくをあてともなくはせ行けり。かく

てのち。宗村は主君の幹事とゝのひて。雲州にかへりけるが。彼屠兒等數人をうちころしたる一件。沸々揚々地。世上にうはさあり。宗村が所爲なりといふと。つひに高貞公の耳に入。已に罪せらるべきを。宗村が爲人をおしみ玉ひ。暗にめして事を囑付。金子一百兩あたへて府中を逃奔なさしめ玉ふ。かくて宗村は主君の仁慈によりて罪をまぬかれ。涙をおとして恩を謝し。夜に乘じて府中をのがれ出けるが。にはかに于隔澪となり。立よるべきかげもなくせんすべなければ。泉州にいさゝか所緣の者あるをこゝろざして。かしこにいたりぬ。さて泉州にいたりこゝかしこまよひありき。一所の十字街を過けるに。背後より恩人〳〵とよぶものあり。身をひるがへして見れば。乃ち是彼島寺内記なり。内記おもひかけぬ所におきて宗村にあひ。とに身上の摸樣まへとなるを見て大にいぶかり。恩人は何ゆゑにかゝるすがたになり玉ひて。當國にきたり玉ふぞといふ。宗村且心中によろこび。此におきてはからず足下にあひたるは。こよなき幸ひ也。事をつばらにかたるべし。權且かしこに來り玉へといひて。かたはらの茶坊裏にいたり。于隔澪となりしいはれをかたりければ。內記いとうれひて曰。恩人かく落魄玉ひしは都是我等父子が罪なり。恩人救を垂玉ひしゆゑに。我等父子身上つゝがなく。今當地にすみてすぎはひをなしぬ。活命の洪恩いかでかわすれ侍らん。小人等つねに恩人と再會せんとをねがひけるに。今日はからず此におきて出會せしは。誠に是皇天のひき合なり。且小人が宿所に

いたり玉へといひて。宗村をともなひいそぎて家にかへりぬ。かくて宗村島寺が家に權住して。身のをさまりをはかりけるが。内記父子の望みによりて。つひに袖見を妻とす。原來宗村は父母妻子なくその身于隔澪となりたれば。ふたゝび武夫に立かへることあたはず。もとより二君につかふる意なければ。當國沙界といふ所に一所の店をひらき。店名を天川屋と稱し。名を義平と叫。主君のたまはりたる一百兩の金子を本錢となし。走海販貨をなして營生とす。袖見も名を更て阿園と稱し。夫妻むつまじく過けるが。ほどなく一子を生。名を義松とよぶ。義平は今かく民間に下りけれども。武夫の志をわすれず。營生のひまには此地の後生等をあつめて。劍訣打拳等を教へ。もつぱら義をとふとみ利をいやしめ。かの宋代の豪傑九紋龍史太郎が爲人をおもひて。背上に雲龍の花繡を刺けるゆゑに。時の人皆彼が混名を黑雲龍義平と叫做。一個の好漢とたゞへて大にうやまひけり。さて内記は晩年の樂をきはめけるが。日月情なく年華かぎりありて。つひに病にそみて身故しとなん。事おげくわづらはしきはうちおきていはず。おかるに四年ばかりを過てのち。鹽冶侯師直がために無實の罪におち。一時にほろび玉ひしときき。義平且悲且怒。一命をすてゝ故君の讐を復し。いさゝか大恩にむくはんとおもひけるが。常言に孤掌不鳴といへるがごとく。一個の力をもて。豈彊威の權家をうかゝふことあたはんや。只いたづらに切齒咬牙いきどほりをおのびてぞ過了ける。不在話下。且說。石堂縫殿助といひ

て。高貞公の同胞の弟あり。石堂右馬丞義基の嗣子となり。京都に居住し玉ふ。高貞公うせ玉ひしのちは。貌好夫人小衙内とゝもに彼館にやしなはれておはしぬ。おかるに時光過やすく日月梭のごとくめぐりて。此年已に高貞公の大祥にあたりたれば。天龍寺におきて修設好事。且管領のきこえをはゞかり。且故廷尉の菩提のためとて。小衙内を出家なさしめんとなり。これによりて縫殿助。貌好。小衙内。おの〳〵禮服を穿し。從者をひきて天龍寺にいたり玉ひ。米錢を把てもろ〳〵の乞子に施行し。好事をはりてのち。小衙内剃度し玉ふとて。鴻鐘を鳴し法鼓を擊しめ。夢窓國師禪椅の上に坐し玉へば。一山の大衆ふたゝび法堂に會し。法坐の下にいたり。一齊に合掌して拜禮をおこなひ。わかれて作兩班たつ。貌好夫人小衙内をひきて法坐の下にいたり玉ひ。縫殿助そのかたはらにおはす。石堂の家人。僧朋。僧衣。袈裟。拜具等を臺にもり。さゝげ出て法坐の下におく。中央には一爐の信香をたき。香氣馥郁たり。堂中清淨なるといふべうもあらず。時に行童出て。小衙内の禿髮をわかちて九つに綰。淨髮人剃刀を把てかたはらにいたれば。嗚呼痛哉。年六歳の小衙内。掌を合て佛號をとなへ拜禮し玉ふ。その身宇多天皇の後佐々木の昆裔として。名家の子孫なるに。不幸にして父をさきだて。家をうしなひ。ながく浮圖の廢料となり玉ふ。豈をしまざらんや。その身はをさなくしてとをわきまへ玉はざれども。母夫人の心中いかにあらんと。涙をおとさぬ者もなし。時に國師。這兒のゆ

くすゑ禍福吉凶を考へ見るべしとの玉ひ。咒語をとなへ眼をとぢ。やゝひさしうして四句の偈をさづけ玉ふ。その偈に道

遇レ山而死　遇レ川而活
遇レ園而悲　遇レ岡而懌

國師偈をつけ玉ひ。此兒の禍福吉凶都て此偈のうちにあり。かならずわすれしめ玉ふなと。いひをはり玉へば。淨髮人若ぎみのうしろに立。已にみどりの髮を把りてなさけなく。只一剃刀にそりおとさんとしたる時しもあれ。石堂の家士急々忙々走りきたり。報じて曰。這回鎌倉より官使として。山名侯上京し玉ひ。今日着駕にて。只今たゞちに當寺にいたり玉ひ。管領の命を告玉ふとなり。速駕をむかへ玉へといひてきりぞきぬ。縫殿助大におどろき。はからざる官使の來駕。這是いかなるゆゑぞと眉頭を一從ければ。夢窓國師の曰。管領の命とあれば等閑のことにあらず。權剃度をとゞめ官使をむかへ玉へといひて。衆僧をひき法堂をきりぞき玉へば。夫人も若君をともなひ。あとにつきて去りぞき玉ふ。不多時。門前に人馬の足音ひゞきけるが。山名次郎右衛門馬上にあり。あまた引了從人きたり。樓門のまへにて馬を下り。從者は盡く此所におらしめ。ひとりみづから烏帽子をたゞし直垂をかいつくろひ。端々正々としてすゝみきたる。縫殿助いそぎまどひ。法堂を下りて地上に拜伏し。尊駕をむかふること大に遲々せり。

罪をゆるし玉へといひて。うや〳〵しく禮をおこなひ。みちびきて法堂の上にのぼり。山名を首席に請じ。はるかに下り平伏して曰。領了官使勞駕到此。且公命のむね謹　領。すみやかに告玉はるべしといふ。山名ころも手をかきあはせ。威儀を整頓て曰。公命のむね。非爲別事。壇冶の家士等。似丐人一般の身となり。餓鬼のごとくくるしむのあまり。黨をむすびて密計をくはだて。事を復讐に托して。執事をうしなひ。且高貞の惡意をつぎて。管領をおそひ奉らんとはかるよし。世こぞりて外議す。恰も夏虫火を撲焰を惹てみづから身を燒がごとく。到頭は彼等首をうしなふべきくはだてにして。ものゝ數ならずといへども。今已に南北兩朝にわかれ。新田和田楠等の一類諸州にかくれて。只時の變あらんとをまつ時節なれば。小事といへどもすておかれず。これによりて質子として。高貞が妻貌好ならびに兒子を鎌倉にゐて來れとの嚴旨也。去るに今日當寺におきて。彼兒子を剃度せしむるとか。途中におきてきゝつるゆゑ。足下の居宅にいたるべきを。枉て此にきたれり。速兩人をわたすべしといふ。縫殿助きゝて只胸つぶれかしらをたれていらへず。心中におもへらく。管領の命はおもしといへども。嫂々鎌倉にいたらば。かならず師直がためにはづかしめられ玉はん。さては泉下の阿兄に對して。何のかんばせかあらん。又公命をおかす時は。罪石堂の家に管り。嚴父に對して不孝となる。奈何せん〳〵と。とざまかうざまにおもひみだれけるが。漸々心をさだめ頓首して曰。公命のむ

ね恐入てうけ玉はり侍り。いかでかそむき侍らん。鍛冶の家人等隱謀のと。もとより虛說なりといへども。さばかり管領のうたがひ玉ふうへはせんすべなし。すみやかに質子をわたし侍らん。されど一個是女子一個是をさなきもの。とに鎌倉にいたるは長路にてあれば。路中のこゝろえなど申ふくめ。なごりをもをしみたくおもひ侍れば。萬乞一盞茶時ゆるし玉はるべし。權且公は方丈にいたり玉ひ。くつろぎて鞍馬のつかれをやすめたまへといふ。山名が曰。火急の命なれば。一時間ものべがたしといへども。枉て少刻がほどゆるすべし。かならず遲延するとなかれといひつゝ。瞿々と四邊をかへり見て。つひに方丈の裏にいたりぬ。縫殿助は手を叉き首を低て居けるが。心中におもへらく。事已に急にせまる。別に良計あるべからず。寧索我破肚をなし。管領のうたがひをとき怒をなだむるにしかじ。是了々々とおもひきはめて。やがて腰刀を拔はなち。衣服をくつろげて已に肚につきたてんとしたるをりしも。かたはらの簾中におきて。一聲撲地とひゞき。たちまち鮮血簾のひまよりはしり出しかば。縫殿助刀をすてゝはしりより。簾をひきちぎりて見るに。嗚呼哀哉。嗚呼痛哉。貌好夫人親手小衙內をさしころし。その刀をもておのれが吭につきたて。かさなりてふし玉ふ。縫殿助大におどろき扯起て見るに。はや兩人いきたえて死し玉ひぬ。まとにあはれの光景見る目もあてかねたり。時に山名欠し伸しつゝ。時刻うつりぬ。とく質子をわたせといひて出來りけるが。此光景を見て心中

におどろき。もし替身的かと立よりて。看一看。曾て好眼熟たるうへに。夫人は世にたぐひなき美女にてあれば。見たがふべうもあらず。肚裡的機關にたがひ。只是呆たるばかりなり。縫殿助大にかなしみて曰。貌好母子自殺をなしたるうへはせんすべなし。此とほり鎌倉にきこえつぎ玉はるべし。山名が曰。彼癡女ものにくるひやまつらん。管領の慈悲をかへり見ず。自殺をなしたるうへは。首級を接てかへるべし。皆是高貞が逆惡のむくいなり。こゝちよきかなといひて冷咲けるが。原來師直夫人をふかく愛慕し。管領の命といつはりて。質子に托し。夫人を鎌倉に引て。おのれがのぞみをとげんとはかり。山名を假官使をなして。奸計をおこなはしめたるなれば。山名くちには出かいへども。計をあやまりて夫人をころしたれば。師直のいかりをおそれ。却是心中には大にくるしみけり。常言に一枝を砍て百枝を損ずといふとあり。此たぐひなるべし。かくて山名兩人の首級をとりてかへりければ。縫殿助ひとり法堂にあり。ふたゝび刀を把りて肚をかきやぶらんとしたる所に。やよはやまり玉ふなと聲かけて。一個の漢子法堂の上にのぼり。はるかに下りて匾々的伏。縫殿助見やりて曰。儞は何者なれば我破肚をとゞむるぞ。我儞を識認ず。那漢子が曰。相公はいときなき時石堂家の嗣子となり玉ひ。彼家におきて生長し玉ひたれば。小人を見しり玉はざるもうべなり。小人はこれおん家士山背助宗村といひし者也。前年故ありて雲州を逃奔し。于隔潺となり。今は商人となり下りて。店名

を天川屋と稱し。名を義平とよび侍り。夫人若ぎみともにつゝがなくおはすに。なぜ自殺し玉ふぞ。縫殿助曰。呀。儞は宗村にてあるか。夫人母子眼前に死し玉ひ。いまだ屍をとりをさめず那里にあり。いかでかつゝがなからんや。義平曰。おかの玉ふもうべなり。那里にて死したる母子兩人は。小人が妻阿園。兒子義松にて侍り。縫殿助大に怪て曰。儞何事をかいふ。夫人母子は我家にやしなひて。我常に貼身ざるにいかでか見たがふべき。ことに山名は曾て嫂々のおもてをよく見おりぬ。豈好替身をもてあざむき得べけんや。義平曰。山名眼をうばゝれしもとわりなり。相公すらなほ見たがへ玉ふ。且小人が身のうへをつばらにかたり侍らんとて。和州におきて屠兒を打ころしたる一條。主君の慈悲によりて罪をのがれ雲州を逃奔したる一條。および泉州にいたり。島寺父子と緣をむすびたる事まで。有枝有葉的細說了けるが。替身の計策をかたり侍らんとて又曰。這回妻子を引て當地にいたりたるゆゑは。いかにもして娘々に拜謁し。昔日の罪を貼。身をきよくしてのち大星が夥にくはゝり。故君の仇をむくはんとおもひ侍りてなり。おかるにけふしも。當寺におきて故君の追薦をいとなみ玉ふときゝ。恰好と此にいたり。食堂にありてをりを見あはせ。夫人小衙内また相公にも拜謁し奉らんとおもひけるに。豈はからんや。官使來駕ありて。一場の禍夫人等のおん身に及び。相公のおん身もあやうし。此こそいさゝか洪恩をむくゆる時節なれ。さいはい妻夫人の容貌によく似たれば。妻子をもて

質子の替身とし。官使をあざむかんとおもひけるが。さてはのちに事ほころびなん。寧索自殺させてあざむくにおかじと。かれらにいひふくめ。暗に國師につげ。御母子の衣服をこひてかれらに穿しめ。髮をつかねたるさまゝでこまやかに假扮て。かくはえからひぬ。妻は原舞妓にてありしゆゑ。最好打扮得たり。おかのみならず。國師道家の變身術をおこなひ玉ひしゆゑ。相公すらなほ實とし玉ひぬ。豈山名をあざむき得ざらんや。これを小人が微功となし玉ひ。故君にかはりて昔日の罪をゆるし玉ひてよ。さあらば妻子等も泉下におきてよろこぶべし。此事ひとへにねぎ奉るなりとて。涙を撲簌々々とおとしければ。縫殿助奇異の思ひをなし。彼が忠義を感じ。阿園等母子が忠死をあはれみ玉ひ。悲歎にせまり玉ひけるが。貌好夫人も小衙内を引て出來り玉ひ。阿園等が屍首にとりすがりて。はてしなきくりとの玉ひつゝ。むせかへりてぞ哭玉ふ。かゝるをりしも。又一個の漢子はしりきたりて。法堂の下にひざまづくを。縫殿助見玉へば。是乃ち寺岡平右衛門之。寺岡やがてふところをさぐり。文匣をとり出して呈上す。縫殿助接て匣をひらき見玉ふに。是大星が書簡にて。密事またくとゝのひ。ちかき日發足し。鎌倉にいたりて仇家をうたんと云一條をおるし。おのれら死後の事までをこまやかにかきつけたり。縫殿助夫人とゝもにこれをよみをはり玉ひ。一頭にはよろこび。一頭にはかなしみ。悲喜交集。さて縫殿助が曰。我國師のおめされし偈の意をつら〳〵かんがふるに。遇山而死と

いふは山名が事に應ず。遇川而活といふは天川屋が事に應ず。遇園而悲と云は阿園がとに應ず。遇岡而懌と云は寺岡がとに應ず。都是後來の事にあらず。今日眼前の吉凶をさめされし也。凡慮のおよぶ所にあらず。奇哉妙哉といひて感嘆轉やまざりけるが。又義平にむかひて曰。我儞が意下を見ぬきたれば。一箇の大事を命ん。是別事ならず。山名を十分にあざむき得たりといへども。もし後に事やぶれなば。その罪最もおもし。これによりて我心を安んぜず。權且夫人等の身をかくし。のちに良計をなして無事をはかるべし。夫人等のかくれ家は民間にさくべからず。權夫人母子を儞にあづくるあひだ。心をもちゐてかしづけよと命じ玉ひ。さかく〳〵して去と指揮し玉へば。義平かしこみて奉はり。一合の長韓櫃を把りてうちに夫人小衙内をかくし入。擔子の摸樣に裝做。石堂の家士兩個を脚夫のさまに打扮せて。おのれみづから監押のさまに打扮て。一齊にまかり出んとしたる所に。忽法堂の床の下より。一個の敎化的あらはれ出。彼擔子を欄住て曰。我那裡にかくれ居て儞們が密話をつばらかにきゝぬ。這櫃のうちには高貞が妻子をかくせり。引出して山名侯にわたすべし。はしることなかれといふ。義平すこしも不慌。彼がくびすぢをとらへ。地上に撲地なげつけて。寺岡に睃眼す。寺岡その意を曉り。手ばやく腰刀をぬき。とびかゝりて那厮が胸の上をさしとほしければ。只一聲阿と叫て死にけり。義平これを見て呵々と打咲。好軍神の血まつりかなといひつゝ。はしり行ぬ。かの

敎化的は乃是隱寶刀了竹也。此日山名がために間者となり。施行をうゝる乞人にまぎれ入て此所に來りかくれ居たるなり。却阿園義松が屍は天龍寺に葬り。爲に修設好事てその靈魂をあつくまつり玉ひけるとなんきこえし。且說天川屋義平はかの櫃をまもり。泉州沙界をのぞみていそぎ行けるが。半途におきて日くれければ夜どほしにゆかんとてみづから灯籠を把。前にすゝみて一味地にはしり。一坐の松林にそひて亂草迷離たる所をすぎけるに。泥水の邊に蛙見なき。遠寺の鐘聲かすかにひゞきていとものさみしく。時は三更のころほひ也義平櫃を挑ひたる兩人の者にかたりて曰。這林のうちにおきては剪徑に撞見財をうばゝれ命をうしなひたるものおほしときゝぬ。我輩兩君を守護し身に大事を管りたれば。いさゝかも心をゆるしがたし足下等もその心がまへして行玉へと。いまだいひもをはらざるに。遠々地火把の光りあらはれ出。漸々にちかづき來る。義平おもへらく果して彼等は賊ならん。さもあらばあれ平常の本事をあらはし立地に打殺べしと。こぶしをにぎりてまちけるに。彼等は賊にあらずかへりて是七八人の土兵にて。已に此にいたり。義平等が摸樣を見てあやしみ。前後をかこみていへらく。我們は知縣の命をうけて賊をとらふるもの也。儞等が摸樣いとあやし。その擔子はかならず贓物ならん。速にいましめをうけよ。知縣廳前に。ゐてゆかんといふ。義平腰ををりて曰。見玉ふがごとく小人等は商人なり。這擔子は京都にて買とりたる貨物にて侍り。あやしみ玉ふことなか

れ。土兵等曰。曾て謊賊等さま〳〵に容を變へこのあたりに徘徊して。もつはら旅客を害し錢財をうばふよしをきゝぬ。儞いつはるともいかでかまことゝすべきはやく手をつかねよ。義平曰。實に小人等は商人也。すみやかに道をひらきてとほし玉へ。いなとほすまじ。いなとほし玉へといひて。互にあらそひけるが。土兵等ます〳〵あやしみ。大ぬす人めさばかり抵賴ば擔子をひらきて點檢すべしと云て。手をくださんとす。義平は是火性短氣の生れにてあれば。忽一發の怒り心上よりおこり。立かゝりたる土兵を蹋退。おのれが身を把りて擔子の上におほひ。大に吼て曰。儞們清淨の營生をする我輩をとらへて賊なりといひ。擔子に手をくださんとなすは。却是儞們こそ賊ならめ。我をたれとかおもふ。我は是泉州沙界に住て天川屋義平といふ好漢なり。おひて擔子に手をくださば立地に蹋殺べし。これを見よといひて兩袒。白漫々地肥て銀板のごとき背上に刺し。雲龍の花繡をあらはして見せけるに。土兵等は皆是虛心病的にてあれば。これを見て大におそれ。一言半句をいはずいちあし出してにげさりけり。かくて義平つゝがなく泉州にかへり。夫人小衙内をふかく隱匿おき。朝夕心をもちゐてかしづきけるとなん。義平は妻子をころして主君の恩にむくい。阿園はおのれ死し見をころして丈夫の恩にむくゆ。彼は忠士これは貞婦。ともに千歲の美談となれり。都是人の臣たるもの人の妻たるものゝ鑑なり。後人義平を讃したる詩あり證とす

多年運蹇市塵沈　舊習不忘義膽深
蓮葉生泥金混土　他時現出本來心

後來如何ことかある。且下回に分解を聽

忠臣水滸傳後編卷之四畢

忠臣水滸傳後編卷之五

東都　山東窟京傳著

第十一回

大星琵琶湖にて大に義を聚　兼好國見山にて夢に石を降

話説大星由良は。弱の强に勝。柔の剛に勝といへる。老聃の言。柔能剛を制し。弱能强を制すといへる。軍識の語を以て意とし。命をかろんじ義をおもんずる鐵石の士をあつめ。粉骨碎身千辛萬苦して事まつたくとゝのひ。已に時節到來したるにより。ちかき日鎌倉に發足すとて。一夜暗に近江國石山寺におきて。同盟の士をあつむ。一來是肅隊をなし軍令をさだむべきため。二來是一杯をくみて箇々今生のわかれをつげんためなり。原來當山の寺主は。大星が親眷にて腹心の人にてあれば。衆人心を安んじ。三人五人づゝうちつれて漸々につどひきたる。抑石山寺は石光山と號し。天平勝寶六年の草創なり。聖武帝の朝。僧正良辨。如意輪觀自在丈六の像を安置す。一千有餘年を經たる靈場にして。誠是好一坐の大刹。清淨活佛の寶地なり。佛殿はたかく嵒上にそびえ。週遭は都て巖石漸々とそばだち。樹木陰々とおげる。鐘樓よ

月窟と相連り。經閣は峯巒と對立。巖前の花木春風に舞て暗に清香を吐。洞口の藤蘿宿雨を披て倒て嫩線を懸る。比良神は石上に釣をたれて靈跡をおもし。紫式部は堂中に書をつゞりて玉硯をとゞむ。絶頂を片履岡と稱じ。東寺夕崎。螢谷等有名の地おるしつくすべうもあらず。後は連峯峩々として。嵒間笠取醍醐につらなり。前は勢田川のながれ淼々として。湖水につゞく。げに此地の月を賞じて八景の一勝とせるもうべなり。相國寺林長老一首の詩あり。説得好

秋風蕭颯一天涯　霜滿二四山一不レ帶レ霞
古來回岩寒月影　吟殘葉々霧中花

さるほどに大星をはじめとして。諸士ことゝく當山にあつまり。佛殿の正面に三ッの胡床をまうけ。大星由良第一の胡床に坐す。破浪鄉右衛門第二の胡床に坐す。大星力彌第三の胡床に坐す。その餘の輩は左右にわかれて居ならびたり。おの〳〵裝束をあらため。頭に鐵巾をいたゞき。身に罩甲を穿。腰に兩刀を跨。都ておなじさまに打扮。手には角弓寢槍柳槌のたぐひ。心えたる所の軍器を把て。殺氣人を侵し威儀嚴重に見えたり。大星やがて身をおこし胡床を下りて中央にすゑおきたる香卓のもとにいたり。一炷の香を拈りつゝしみて天地を拜しければ。忽然として法坐のうしろに。金磬を鳴し法鼓を擊こゑ大にひゞく。這是密議を外へもらすまじきため。寺主のかくものし玉へるなり。大星天地を拜し。伏て願は神明我輩が志をあはれ

み給ひ。這回の大事勝利を得。故主の仇をむくはしめ給へと。ふかく觀念しければ。皆一齊に拜禮してこれを祈りけり。さて大星依舊胡床に坐し。衆人に示していへらく。我輩仇家を打つは。夜に乘じて襲んにしかじ。夜打にはかならず暗號をもちうべし。天武紀を見つるに。田邊の小隅倉歷に詣夜營中に入る。己が卒と足麻侶が衆と。わかちがたきをおそれ。毎人に金といはしむ。金といはざるは乃ち斬と見えたり。是乃ち本朝暗號のはじめなり。唐山におきては。經國雄略。堯山堂外記等に。暗號のことをのせ。又名山兵制記に答號あり。紀効新書に暗令あり。都て是夜軍に暗號をもちゐたるためしなり。本朝暗號のはじめなれば。ふるきをたふとみて我輩彼金といへることばをもちうべし。如此々々這般々々すべしと。つばらにしめし。此令にたがふ者は不忠たるべし。よく〳〵心得給へといひければ。皆一齊に心え侍りとこたふ。さて大星令をつげをはり。身をおこして欄檻のほとりに立出。四方をのぞみ見るに。此時已に九月のなかばなりしが。天に一朶の雲もなく一輪の明月皎々とかゝやき。恰も白日のごとく。琵琶湖を眼下に見くだして。えもいはれざる好景なり。時に數行の賓雁嘹喨として空中をとびきたる大星これをゆびさしていへらく。各位彼を見玉へ。彼はすなはち八箇の陣制にいはゆる雁行の陣なり。我輩彼雁のごとく隊をつられぬ群をすゝめ。首尾を正して進退心を一つになす時は。豈勝利を得ざらんや。たとひ師直嚴中に避鐵洞に躲るとも。かれが首級は我たなごゝ

ろのうちにあり。首途の吉凶此うへかあるといひてよろこびければ。皆一齊に雀躍してひひに佛殿をまゐりぞき。方丈に宴席をまうけて。大に飲酌をなし。三更のころほひにいたりてわかれをつげ。おの〳〵宿處にかへりぬ。說分兩頭。且說。山名次郎右衛門は。前に天龍寺におきて僞級を接たることをゆめにだもしらず。計をあやまちて實に貌好夫人をころしたりとおもひ。師直のいからんことをおそれて。鎌倉にかへらず權身をかくして居けるが。別に一功をなして師直の心をなだめんとおもひ。這夜大星等石山寺に會せることをつゆばかりもしらず。密計を商議せんとて。鷺坂伴内をいざなひて琵琶湖に船をうかめ。腹心の者に櫓をとらせ。月明に乘じてはるかに漕いだし。湖心にいたりて四方をかへり見るに。渺々たる大湖中に只一隻の船も見えず。をりこそよけれと伴内に說ていへらく。小人計をあやまち貌好をころしたれば。執事のいかり給はんこと必定なり。これによりて鎌倉にかへることあたはず。恰も沒脚蟹のごとし。此うへは別に一計をほどこし大星父子をうしなひ。草を斬て根を除一功をなして罪を賠んとおもひ。密事を議するには船中にしかざればかくはからひつ。伴内がいふ。小人も又大星父子をうしなはんとおもひ。前に一計をほどこしけるが。彼等運つよくして計にあたらず。むなしく相公の用金をつひやしたれば。鎌倉にかへりて相公にまみゆるにかんばせなし。公の良計につきて彼等をうしなはゝ。誠是相公の病根をたつ道理にて。もつとも大功なり。速計

を志めし給へ。山名が云。這回はよのつねの計策はもちゐがたし。苦計にあらずんばあたるべからず。我計は如此々々這般々々とかたりければ。伴内掌をうちて大によろこび。妙計々々速かにその計をおこなふべし。那們かゝる良計ありてあすの命のあやうきはまらず。枕をたかくふしぬらん。愚哉々々といひてあたりをはゞかる事もなければ。大に口をひらきて呵々と咲ける時しも。遠々地蘆葦深處より。あまたの水鳥翻々と羽だゝきしてとびさりけるが。忽ち櫓の音ひゞきて擅に漁歌を唱。その曲兒に道

網底難レ逃這賊孩
義士趁レ讐啓レ行日
一刀成レ鱠代レ魚來
餐レ之且飲髑髏杯

兩人原是虛心病的にてあれば。這曲兒をきゝて喫一驚。たちまち船をひるがへし西岸をのぞみてはしりけるが。彼蘆のうちより一隻の漁船を漕いだし。簑笠をきたる一個の漢子艢にたちて。一張の角弓一枝の箭をとりて打搭滿月のごとく拽煞て弦音たかく飄とはなつ。その箭あやまたず山名が船の櫓を把たる者くびすぢを射ぬかれ。たちまち翻筋斗て水中におちたり。山名驚坂これを見てはす〳〵おどろき。伴内みづから櫓を把て飛也似に逃去たるが。をりしもあれ一陣の西風吹來り水を捲浪を起し船風にさからひてうごかず。とゝろのなしにかあとへひきもどさるゝがごとし。伴内こは何とせん〳〵と云つゝ。命をきはに力をきはめて漕ゆきけるに。

又むかひの蘆のうちより一隻の漁船あらはれ出。簑笠をきたる漢子一條の寢槍を提て艢にたちたるが。やがて鈎索をなげて山名が船を搭住。身を把て閃一閃と飛うつり。鎗を撚て山名にかかる。山名やむことをえず腰刀をぬきてこれをうけとめ。いまだ六七合もたゝかはざるにはや敵するとあたはず。艙のうちに逃入る所を。彼鎗はやく閃きたりて山名が吭を搠とほし。只一鎗につきころしぬ。伴内驚得て大に迷ひ。慌々衣服をぬぎすてゝ水中にとび入。うきつまづみつからうじて對岸にいたり。石籠の上にはひのぼりけるが。ながく犢鼻褌を曳て恰も蛙兒に尾のあるが似し。さて爛泥のうちをはひめぐり。やう〳〵高埠に上り得て息を吻と續けるところに。おもはざりき背後に又。簑笠をきたる大漢手に榔槌を提たるが仁王立にたち。驚坂を瞇て大喝一聲。我老早此所にありて儞等がまよひ來るを俟わびたり。みじろきもすなとよばふ。伴内これをきゝて魂魄九霄の雲外にとび。腰ぬけてはしるとあたはず。只掌をすりてたすけ給へすくひ給へとわなゝき〳〵つゝいふ。那漢子呵々と咲儞無益のことをいはず。只速に極樂往生せよ。いで儞がために引導すべし。如是畜生發菩提心とたはふれて。榔槌をとりなほし。伴内が頭をのぞみ腦漿もいでよと勢に就て打ければ。可憐かうべ胴にめりこみて死にけり。かくて那漢子身邊をさぐりて號笛をとり出し吹たてければ。前の二艘の漁船此所に漕來り。彼輩にたちたる兩人の漢子。おの〳〵手に鮮血淋々たる首級を提て。櫓をとりたる者とゝもに

屋に上り來る。となたの大漢は腰刀をぬき伴内がかうべを刎て手裏に在。都て五人立あつまり何ごとにかあらんさゝめき。かの三ッの首級の髪頭を將むすびて一處と做。鎗上にくゝりつけとれを把て五人一齊に立去けり。此時いまだ四更にすぎず。さて彼五人は何人ぞなれば。角弓を把たるは河背勇太なり。寢槍を把たるは大星西平なり。梛槌を把たるは雄鷲文太なり。櫓を把たるは腹心の家僕等なり。此夜大星石山寺に會せるにより。若密事をうかゝふものあらんとをおそれ。前に寺岡に命じこの邊をまもらしめけるが。山名鷲坂が來れるを見つけて大星に告たるゆゑ。大星三人の士をもちゐ。師直が羽翼たる兩人をころしてひごろのいきどほりをはらひ。且軍神をまつりて首途をいはひけるとぞ。かくて大星等事まつたくとゝのひたれば。已に吉日をえらひ。行裝をなしおもひ〳〵に容を變て。鎌倉にぞ下りける。原來是天地間は。一坐の大戲場なり。善の擺劃。悪の脚色。ともに天地神明の看官。善悪邪正をわかちて。禍福をむくい給ふ。たとひたくみに機關をもちうるとも。到底は都て徒然。豈夫益あらんや。山名鷲坂が徒。乃ち是好榜樣なり。好事先生のつらねたる個勸世の詩あり。說得好

當場扮作丑生姿　悪貌美心相見知
天地從來如雜劇一　世營一齣介無私

閒話休題。且說。兼好法師は。前に洛東の吉田に住けるが。那里は大都會闤闠の地にして。

つねに靜かならず。おのづから世の塵にけがれて。德をそこなひ行を濁すことおほく。心清からざれば。つひにかの地を避て。伊賀の國にいたり。國見山の麓田井莊に草菴をいとなみ。紙被。麻衣。一鉢の貯蓄美に足ことを知り。好みてつねに古文を愛し見ぬ世の人を友として。只閑靜をたのしみてくらしけるが。一夜ともし火のもとに晉書をひらきて見居たるに。猛然として眠を生じ。おぼえず机に倚て眼をあはせけるをりしも柴門をひらきて來たるものあり。兼好かうべをかへしてこれを看るにみづらゆふたる兩個の童子。たゞちに書几の前にいたり。兼好に對していへらく。我等今娘々の命を奉りて。儞をむかへんがため此所に來れり。儞とく〳〵我にまたがひて歩を移すべしといふ。兼好兩童子の言をきくに。鶯の聲燕の語にして。男子の音聲にあらず。頭をかゝげて熟看に。果して兩人ともに女童なれば兼好大にあやしみ問て曰。女童等はいづくより來り玉ふおんかたなるぞ。女童が曰。我等は娘々の命を奉りて。儞を宮中にむかふる者なり。事はのちに曉すべし。唯宜速にきたるべしといひて。手をあげて天をさしまねきければ。忽然として天上より一朶の白雲下り。變じて一條の梯子となる已にして兩女童兼好が手をとりていざなひ。梯子に上りて半天の裡にいたりけるに。空中に一つの牆門あり兼好みちびかれて門内に入。私に此所を見るに。別に一ッの世界ありて。星月明朗として香風馥郁たり。なほ百歩ばかりすぎて此邊を見るに。左右に大なる松樹數株ありて。枝

葉交りて稠密たり。中央に一條の大路あり。前面には潺々と澗泉ひゝきて。青石の大橋あり。兩邊は都て朱欄杆なり。岸の上には奇花異草萋々として。佳色一輪の月に映じ。清香一陣の風に寄。茂竹翠柳おのづから凡ならず。偏是人間のうちとは見えず。兼好ます〳〵あやしみ。げに稀有の光景哉。必然仙人の住處ならめと讃美して。つひに宮門のうちに入けるに。此に玉樓金闕たちならびて。その美麗なること叙つくすべうもあらず。兼好已に玉殿の塔の前にいたりける所に。數個の侍女いでむかひ。すなはちひきて玉殿の上にのぼらしむ。兼好おぼえず身うち戰慄て。毛髮倒にたちぬ。時に侍女玉簾をとりてたかく捲けるゆゑ。ひそかに頭を擡て簾中をのぞみ見るに。七寶九龍床の上に。一個の娘々坐し玉ふ。頭には九龍飛鳳の髻を結び。身には金縷絳綃の衣を穿。藍田の玉帶長裙を曳。白玉の圭璋彩紬を擊げ。顏は蓮蕚のごとくにして。天然の眉目雲環を映かし。唇は櫻桃に似て。自在の規摸雪體を端す。誠是凡女とは見えざりけり。這娘々をいかなる神女とたづぬるに乃是九天玄女なり。兼好は只地上に拜伏し。頭を低てつゝしみ居たるに。娘々玉音をひらきてのたまはく。這回天帝のみことのりをかうふりて。爾を天上に宣こと別事にあらず。前に五星ならびに數箇の客星盈宿位をうしなひて。魔心斷ず。道行完からざるがゆゑに。天帝權彼等を罰して其の精を下界に下し。假に下濁の凡身となし。日本國に生れしめ玉ふ。すなはち歳星を降て雲州の刺史塩冶廷尉

高貞が臣。大星由貞と叫做的に生れしめ。熒惑星を降して。泉州沙界の賈人。天川屋義平が兒子義松といふ的に生れしめ。塡星を降して。山州乙訓郡山崎の究人。與乙兵衛といふ的。又速野韓平が老婆阿輕といふ的に生れしむ。太白星を降して。塩冶の家士速野韓平といふ的に生れしめ。落魄せしめて山崎の麓にをらしむ。又辰星を降して。鹽冶高貞が妻貌好。大星由貞が妻阿石。桃井の家士加古川本藏が妻戸難瀨。女兒小浪。天川屋義平が妻阿園等。五箇の人と生れしむ。別に數箇の客星を降して大星以下いくばくの義臣に生れしめ。人間吉凶の應其衆にまたがひて天上に告しめ。奸臣佞者を誅戮せしめ。天にかはりて道をおこなはしめ給ふ。まかるに彼等今天數已につきて。天上に歸すべき時いたれるによりて。天帝天書をくだして。彼等を天上にかへらしめ給ふ。此ゆゑに兩童をつかはして爾を此にむかへたり。彼天書を爾にかゝまめんがためなり。とく〳〵これをかくべしとのたまふ。兼好再拜して曰。小生が凡筆をもつていかでか能く天書を寫べけんや。こはひとへにゆるし給へ。娘々のたまはく。何ぞかならずしも謙退におよばんや。爾は原來廉潔にして。行きよく心濁ず。名利をもとめず。曾て皇天を感ぜしむるの德者なり。已に天書を寫べき者爾に應ぜり。すみやかにかくべしとのたまひて左右をかへりみ給へば。侍女等やかて筆硯を携へいでゝ。兼好にあたふ。また屏風の背後より。兩個の黃巾の神。大なる青石を擡起て出來り。兼好がまへにすゑおく。兼好辭することあたはず。つ

ひに筆をとりければ。娘々天書の文を告玉ひ。かの石上に寫しめ玉ふ。さて兼好つゝしみてこれを寫罷ければ。娘々大によろこび給ひ。侍女をめし。儞等且彼に酒を酌しむべしとのたまひければ。一人の侍女玉盃に酒を醼て兼好にあたふ。兼好うや〳〵しく玉盃を接てこれを飲けるに。香馥郁として味ひ甘露の如し。又一人の侍女一盤の仙棗を捧て兼好にすゝめ。酒已に數巡におよびしかば。娘々兼好にのたまはく。天凡相へだゝればひさしく儞をとゞめがたし。すみやかにかへるべし。兼好かしこみて拜謝す。娘々又黄巾の神に對してのたまはく。儞們は此青石の天書を下界になげくだすべし。かならず遲延することなかれと命じ給ひ。侍女等にたすけられて玉簾ふかく入給ひけるが。忽然として。そのあとに五色の雲を生ず。兩個の黄巾の神は命にまたがひ。彼青石をとりて雲中になげ入けるに。恰も霹靂のごとくひゞきて。そのまゝ下界におちたり。兼好此ひゞきにおどろき。おぼえず眼をひらく時。依然として書几に倚て燈下にあり。是乃ち南柯の一夢なり。兼好ゆめさめて奇異のおもひをなし。只惘然として居たる所に。欻一陣の風起りて梢をふるひ草をうごかし机の上を三匝て。よみさしおきたる晉書五行志の卷を。撲籟々々と吹轉して風をさまりぬ。兼行晴をさだめてかの書を見るに。風來りてひらきたる張に。五星のことをまるして數言の語あり。その語にいへらく

凡五星盈縮失レ位。其精降二于地一爲レ人。歲星降爲二貴臣。熒惑降爲二貴

兒。歌謠嬉戲。塡星降爲二老人婦女一。太白降爲二壯夫一。處二於林麓一。辰星降爲二婦人一。吉凶之應隨二其衆一告。

兼好これを讀完て想道。此語はすなはちこれ。夢中に九天玄女の告玉へる所と。符節をあはせたるがごとし。熟〻想に史記の天官にも。星墜て地にいたるときは則石也とまるして。原來星の石に變ずること。天地自然の理なり。故に青石の天書をくだし玉ひて。大星等故主の仇をむくい。天に歸すべき時いたれるを示し給ふものならめ。奇哉妙哉。這五行志の語。那天官書の說。曾て虛誕妖妄のことにあらずとうちひとりごちて。感嘆轉やまざりけり。さて次の日にいたり。兼好街にいでゝあそびけるに。こゝかしこに人こぞりて。このごろ鹽冶の家士大星由良が徒。故君の讐敵高階師直をうちたり。その始末は如此々々這般々々とかたり。傳說沸々揚々地して。諸人彼等が忠義を賞讃しければ。兼好此外議をきゝ。嗚呼昨夜の夢果して正夢なり。大星が徒都て凡身にあらずと。ます〻奇異のおもひをなし。奸臣忠士のためにほろび。一旦雲ひらけて天日の面を見るに一般。泰平の時已にいたれりとつぶやき。心中大に歡喜して菴にかへりぬ。げに兼好がことばのごとく。奸臣師直が一族ほろびてより。南朝北朝のあひだおのづから和し。つひに兩朝和睦をなし給ひければ。諸州の鬪戰忽をさまり。國土安穩。五穀豐登。路遺を拾はず。戶夜閉ず。萬民枕を泰山の安きにおき。泰平無事をたのしみけると

なん。誠是大星が大功なり。詩あり證とす

衆木常時相與同　蒼松貞操見霜風
一治一亂都天道　或死或生是地工
乍起數雄討積惡　能令萬世鑑純忠
更爲國土泰平日　盡屬陰陽造化功

忠臣水滸傳後編卷之五全

答恩忠悃貌貅士。敵愾雄謀社禝
臣。饒他紀跡眞兼假。畢竟箴頑假
是眞。

南華題

水滸著書淩極力。力高罪惡能傾
國。君看四十六忠臣。難比梁山百
八賊。
一聲大喝擘領棒。喫着人々始豁
如。要換之年百頓苦。早看醒世老
人書。

一杖閑客題

記得忠臣千古情。一編新著學羅
生。曾知才思先生好。重見今番紙
貴爭。

題

醒世老人忠臣水滸傳後

董堂敬義

造物弄奇賽本中檀場雲外藻林風。莫題園裏一枝鳥閑擁筆煙書啞童。

題家兄編忠臣水滸傳

鑾山外史

優曇華物語自序

夫好古愛玩其物者。固余之一癖。苟得其物。則祛利達奔競之情。猶隱士之於煙霞泉石也。遂同癖相憐者。與之團欒盤礴。居常以論奇。鎭日莫逆乎心矣。頃日一友過東叡山麓。歸途經淺草文庫之舊踪。街頭有一箇骨董舖。萬種品擔其物。探之得枕屏六牒。所襍貼之古書畫。有一二可珍玩者。經歲月之久。煤塵醃醃。唯釆可愛者。其餘將投爛紙籠中。而紙面抹水。待浸潤徐剝之。而得蠅頭之書數紙。依余之好古。盡以見貽。乃熨縮皺。理前後。照鬚鏸讀之。記人行敗常。天道降罰。如影響之事。於其教誨。實童蒙蠢戇之論語也。然其書上世之書。而其文混用和漢。故今換尋常易讀之文。以便乎展讀其原本字行。蠹魚饑嚙。或腐爛糢糊。以臆補之。按勘

已成。擴諸世。不空友生之貽。則有益於童蒙庶幾乎禦未至之不善哉

文化紀元甲子春三月

江戸　醒々齋識

野猪婆
穩婆妻蓬髮
隻眼蠢蠻心
不識天羅網
姦宄分外深
天留居士題

健助妻
為養良人出業國事生方
幽魂將不死寃恨告良人
琴柯子画

優曇華物語總目錄

卷之一

第一段　鍛冶橘内鷲に兒を捉るゝ事
第二段　石の窒堵婆に血つくる事

卷之二

第三段　望月鮫二郎雨宿して美女に遇事
第四段　近江國雨鉦塚の事

卷之三

第五段　渥美高敎蚺蛇に遇事
第六段　弓兒流沈て岐蘇の雪路に苦む事

卷之四上

第七段　荒熊弓兒が死をかへて生とする事
第八段　扇にかきつけたる歌紅絲をひく事

同　下

第九段　野猪婆腹籠の兒をとる事
第十段　黒髪山佛法僧の事

卷之五上

第十一段　皎二郎弓兒盂蘭盆の燈籠を見る事
第十二段　眞袖の幽靈夫に告て仇を報しむる事

同　下

第十三段　金鈴道人因緣を說事

第十四段　鍛冶橘内再女兒に遇事
第十五段　橘内の母年賀を祝ふ事

以上十五回全部七册

總目錄終

優曇華物語卷之一

江戸　山東軒主人編

第一段　鍛冶橘内驚に兒を捉るゝ事

人皇百一代の帝。後小松院の御宇。應永の頃は。南帝の聖運やゝおとろへ。足利の武德日々に盛にして。權五畿内は。無爲に屬すといへども。遠きそれがしの國かれがしの鄕には。とかく戰やまず。小を責大を拒。渠を亡しおのれたゝんことをおもひて。互に鄰境をあらそひければ。其虛に乘じて。諸國に强賊おほく。萬民の心十分に安からず。其頃近江國。滋賀の山里に。鍛冶の橘内といふ者ありけり。老母妻子あつて。都て四口のくらしこゝ。彼よく家業をつとめ。片時もおこたらずといへども。其身薄命にして家貧く朝夕の烟もたえ〳〵なり。老母は年八十にちかく兩眼ともひて見ることあたはず。小兒はことし四歲の女子にて。生れ付きよらこゝ。妻はのちぞひにて名を小雪といふ。前の妻は彼女子をうみて。ほどなく身まかりければ。おのれひとつにて。母につかふる事のゆきとゞかざるを愁ひ。今の妻志の勝たるを以て。急に娶るなりけり。されば夫婦ともに世にまれなる孝順の者にて。曾て老母酒を好みければ。おのれ等夫

婦の食を減じて。毎日美酒をすゝめ。一日もこれをおこたる事なし。此一事を以て其孝のいたれるを知るべし。妻はかゝるわびしきくらしを。露ばかりも恨とせず。姑によく仕ふるのみならず。かの女子をふかくめでいつくしみて。我實の子のごとくよろづに心をもちゐて育けり。志かるにことし神無月のすゑつかた。橘内持病をなやみ。三十餘日打ふして。なりはひをせざりければ。炊てくらふ米もたえ。烟をたつる薪もつき素あまりの貯なき身なれば。せんすべもなく。折からの寒さを防夜の物は更こ。いさゝか殘せし雜具のたぐひまで。皆代なして。老母にすゝむる酒代となし。かゝる貧苦のなかにも。その事は一日もおこたらざれど。はや家内に塵ばかりの物もなく。今日にいたりては。酒をもとむべき便盡たれば。橘内はふかくこれを愁ひ。只打志ほれて居たるを。妻見かねて。おのが肌かくせし。ときわけを脫て。ふたのばかりに成り寒さに身うちいらゝぎて打ふるふをこらへ。ことしの冬はなどてかく暖なるぞ。汗がたるはとつぶやきつゝ出ゆきて。かのときわけを錢百文に代なし。八十文にて酒を買ひ。兒にあたふべき爲。殘りの錢にて餅をとゝのへて歸り。母にこゝろよく酒をすゝめけるに。小兒小雪が姿を見て。母さまは裸でおはすといふをいそがはしく。口に手をあてゝ。いはせまじとせしが。老母はやくさとり。蘆蔭屏風をゐざりいでゝ。小雪が身を探見んとす。小雪手ばやく。夫か着たる襤褸を脫しめて。我身に打かけ。此寒さにいかでか。裸にて居らるべきととひもせぬ事い

ひつゝ。身をよせて探らしめけるが。老母なほ疑て。橘内がさきほどさゝめきたる聲のはづれが。氣にかゝりておぼつかなし。橘内こちへとよばるゝ時。小雪又いそがはしくつゞれをぬぎ。夫が身に打きせて居らしむ。母探り見て。これも裸では居らぬと。いぶかしき顔して。今一度小雪も一所にこちへといはれて。此度はせんすべなくたゆたひけるが。橘内目を以てをしへ。つゞれの肩をぬぎて。妻に片袖をとほさせ。ひとつのきる物を。ふたりしてかた身づゝ着て。間に合せぬ。老母涙をはら〳〵とおとして。我酒をのむ事。けふを限りとしてとまるべし。かならずしも明日よりは。酒をすゝむることなかれといふ。夫婦打聞て。口をひとしうして云。何ゆゑさはのたまふぞ。このごろすゝめまゐらする酒。味ひにてもあしくて。志かの玉ふか。老母涙をのごひて云。我いかなるあしき宿世にや。年老て盲となり。孫の顔だに見る事あたはず。萬につけておん身等に。苦勞をかくるのみならず。毎日百文にちかき錢を費して。酒をのむ事。思へば分に過たる事ゝ。貧中より今日まで。おこたらずすゝめし酒は。其方等夫婦が身の膏なる事。けふといふけふ思ひ志りたるぞや。もはや酒も浮世も望にあらず。なか〳〵に長生して。其方等にからきめ見せんより。片時もはやく往生の素懷をとげて。無量壽國の。盡ぬたのしみをきはめんにはしかじ。嗚呼阿彌陀佛〳〵といひて。嘆息しければ。橘内これを聞。胸ふたがりて。涙のおつるをこらへ。呵々と打笑ていふやう。母人のたまふ所は。みな思ひ

過しの甚だしきといふべし。それがし貧しけれども。手におぼえたる業あり。母人に酒まゐらするほどのあまりなからめや。さばかりそれがしを。たのみなき者とおぼし給ふか。小雪はやく錢をならして聞せまし。母人の心をやすめよと。めくばしすれば。妻心得て。頃日打おきの鏁子を。二つかみ三つかみ。老母の耳ちかくふりならして。如此錢を貯おきぬれば。露ばかりも氣づかひなく。酒をもちゐ給へ。いかでか親子の間に。いつはりかざる事のあるべきや。酒の爛なほしてまゐらせんか。妾もけふは一ッたべ申さんなどいひて。すゝむるにぞ。老母やうやく心を安んじて。又ひきうくる盃に。夜半の夢をむすびぬ。誠に是。陳氏再醮を肯ず。劉氏股肉を斬て。姑につかへたるにも相似たる。孝婦なりとて。聞人哀を催しけり。かくて後一日。橘内は大津に行て家にあらず。軒下の日あたりよき處に。筵を志きて。小兒を遊せおき。小雪は裏にありて。老母の肩をさすり居たる折しも。後山の樹林。籟々とひゞく音すさまじく聞ゆ。小雪あやしみ。山下風の暴風かあはやと顧ば。年舊大鷲翼をならし。勢猛おろし來て。かの小兒をかいつかみ。雲井遙に飛上る。小雪これを見て魂を失ひ。あわてまどひて走り出。手をのべ足をつまだてゝ。跳上り飛上り。空をのぞみて身をもだへ。あれよ〳〵とさけべども。素隣家なきはなれ家なれば。出てたすくる人もなく。身に翼をもたざれば。いかんともする事あたはず。唯小兒のさけぶ聲かすかにきこゆるのみ。夕霧ふかくたちかくして。行がた

知れず成にけり。小雪はなほ空にむかひ。拳を揑牙を咬て。かへせもどせとよばゝりけるが。悲歎にせまりて氣を絶し。其儘そこに倒伏。老母は眼見えざれば。何事も知らず。只小雪がさけぶ聲に驚きて。そこら探りつゝ。よろめき出けるが。これも物につまづきて。のけさまに倒ぬ。此時橘内何心なくたちかへりて。母も妻もたふれ居たるを見つけ。いそがはしくよりて。まづ母をいだきおこして見るに恙なし。扨妻をひきおこして見るに。息絶てありければ。大に驚き。孝子の常として。貧きなかにも貯おきたる。醒藥をとり。口中にそゝぎ入て介抱せしかば。ほどなくありて甦醒。夫の顔を見るよりも。聲をはなちて號哭。嗚呼おん身の歸り。今一脚おそかりし。我子は驚につかまれて。ゆくへなく成侍り。生れつきもきよらにて。年に似合ぬかしこさを。日ごろから悅て。はへばあゆめと思ひ子の。せたけののびるを樂に。月日のたつを指折つゝ。夢と過ゆく光陰の。すみやかなるも待侘て。おのれが年のつもるも知らず。いくつにならばとしてかくしてと。おひたつさきの事までも。心にはかり是迄は育つるに。思ひかけざる災難にて。玉の樣なる稚子を。惡鳥の餌食となすは。いかなる前世の報ぞや。おなじ別といひながら。病て死ぬるかなしみは。世界に例もある事ゝ。皰瘡痲疹もかるうして。心をやすめしかひもなく。非命に死すは何事ぞ。あれ見玉へ今まで。かしこの筵のうへに。餘念なく遊び居て。笑し顔が目に殘り。おぼろげに見ゆるぞかし。再彼をとりもどす。仕かたはなきか我

夫と。かへらぬくり言いゝつゞけて。天に號地に哭。目もあてられぬ光景なり。橘内は子細を聞。恩愛切なるかなしみに。身をきざまるゝおもひをなし。あつき涙をおとしつゝ。聲をもなさで居たりけり。老母は始終の樣子を聞。朱來を急ぐ老の身は。なか〳〵にながらへて。千歲とおもふ稚子は思ひかけずも非命に死す。かの惡鳥さばかりに。人肉をのぞむならば。此婆々が肉を。孫のかはりにあたへんものを。かへらぬ事のくちをしや。世界の因果が身ひとつに。あつまり來しかかなしやといひて。聲かるゝばかりに號哭。涙もつきて血をいだすべうぞおもはれける。親夫の歎を聞。小雪はいとゞおのびかねて。つと立あがり。かたはらなる。ふる井のうちに飛いらんとす。橘内いそがはしくおしとゞめ。汝何ゆゑ死んとするぞ。物にくるひやしつる。心をつけよと勵しいふ。小雪苦き息をつき。物にくるひはせざれども。死なねばならぬ理ゝ。おん身のるすに義理ある兒を。惡鳥にうばゝれて。何といひわけあるべきぞ。過ゆきし實の母。草葉の蔭とやらいふ處にて。さぞかし妾をうらみ玉はん。妾もともに冥途に去。賽川原に塔をくむ。陪してなりとせめて其。いひわけをなし侍らん。まうしおくこと是のみぞ。いとまたまへと云捨て。再井に立よるを。橘内ゝかと抱とめ。其方がいふ處理なきにはあらざれども。遠き慮なきに似たり。權且心をゝづめて。我いふ所を聞よかし。唐の孝子は。母を養ふ其爲に。子を土中にうづめんとて。かへりて寶を得たりと聞。いづれの國も人の親の心は

おなじ心なり。不便にはおもへども。母人の爲に。一口を減ぜしと思ひとれば。志かばかり歎べきにあらず。汝もし死うせなば。なりはひにいとまなき。我身のみにて。母の介抱。いかでか心のとゞくべき。そこに心はつかざるか。汝死すとも子はもどらず。母人に對しては。これいみじき不孝ぞかし。こゝをよくわきまへよ。心得しかいかにとて。ことを盡してきこゆるにぞ。小雪はやうやく死をとゞまり。涙にむせびて打伏ぬ。夫婦ふたりが心のうち。おもひやられて哀へ。かくて次の日。橘内。惡鳥のすみかをたづね。せめて小見の生死を見といけんと。朝まだきに家を出て。あたり近き山に上り。普探索れども。ゆくへ知れず。なほ日々に出てほど遠き山〳〵まで。たづぬる事已に五日。比良嶽の奥ふかくわけ入けるが。鹿の通ふ徑路をみつけ。たゞ走りにはしりて。とある谷間にめぐり出。偶谷底を見れば。皓々たる白氣たちのぼりて。こゝかしこに光りあり。あやしみつゝ。巖にとりつきて彼處に下り。よく〳〵見れば。かの光りは是水晶石英のたぐひにて。志かもよのつねの物にあらず。琢磨をへたる玉の如し。橘内おもへらく。我貧うして母を養ふに事たらず。志かるに今こゝに迷ひ來て。此玉石を見出したるは。正是皇天のたまものゝ。これをとらば好價を得べしと。よろこびつゝ。天をあふぎて九拜し。路〳〵まじるしの枝折をなしおきて。家に歸り。おのが業なれば。おもふまゝに。玉石をとる鐵器を造りて。再又那裡にいたり。彼物をきりとりて。市にはこびて賣ければ。そこばくの價を得たり。此日を始として。折〳〵これをとつて賣けるにぞ。心のまゝに母を養ひ。夫婦よろこぶ事限りなし。さて其頃堅田に。内海鰻庵といひて。眼療に妙を得たる醫師ありけるが。家に種々の奇方を傳へ。能五輪八廓を論じて。療治を施すに。目疾内外の障七十二症は更ゝ。いかなる難症といへども。治する事速ゝ。志かりといへども。彼生得不仁にして。貪欲をほしいまゝにし。謝物の金銀をむさぼる事。分に過。いかほどにもとむるとも。貧人には藥をあたへず。かるがゆゑに。これを憎み譏る人もおほかりけり。されど其術におきては。實に奇妙の驗あれば。謝物に乏からぬ輩は。尊敬せずといふことなし。橘内日ごろ。彼に母の眼療をこはんとおもひ居つるが。彼貧家には藥をあたへざるゆゑに。これまではむなしく過ぬ。志かるに頃日玉石を得て。謝物とゝのひたれば。此時こそと。且謝物を前に贈て。療治を乞つるに。果して驗あり。三十餘日を過て。双眼まつたくあきらかに成り。雨過雲散て。皎々たる明月の。あらはれ出たるごとくになりければ。ます〳〵よろこびにたへざりけり。誠に是橘内夫婦が孝順。天に通じて。此福をあたへ玉ふものなるべしと。こゝろある人はうらやみけるとぞ

第二段　石の窖堤婆に血つくる事

去程に時光流水のごとく。金烏玉兎の足はやくはしりて。已に九年を過。永亨五年にぞいたり

ける。爰に又肥後國球磨郡に。市ノ頭といふ處ありけり。此地は是海にちかく。前には球磨川といふ大河あり。後には重山ならび立て。屏風をひきめぐらしたるごとく。其裏につゝまれたる平地にて。別の一世界なり。抑球磨川は。九州第一の大河にして。其源遠く。那須。椎葉山。五箇村邊より出て。球磨郡の眞中をつらぬき。四十里ばかり流れて。すゑは海におち。世に希有の急流なり。市ノ頭は。東西の兩村合せて。家數千軒もあるべし。農家漁家軒をまじへ。盡く河にそひて家をつくる。此地京城をはなるゝこと遠く。ことに其頃は諸國おだやかならざる時なれば。おのづから王化のおよぶことまれにして。村中の人民志正しからず。惡人はおほく善人はまれなり。さかるに此東村に。只一個善を好む百姓ありて。其名を網干兵衛と云。山林田庄あまたもちて。家頗る富ぬ。此人常に慈悲をもつはらとして。人の危難を救。貧苦をたすくるに。財寶をおしまず。あけくれ陰德をつむ事をたのしみとす。妻も又生れ付温柔にして。夫とともによく善をおこなふ。兵衛已に年七十に近しといへども。只一個の男子あるのみ。名を皎二郎とよびて。ことし十六歳にぞいたりける。世にまれなる。美少年なるのみにあらず。聰明伶俐人に越。富家に養るゝといへども。露ばかりも驕奢心なく。朝夕よく父母に仕へて。孝を盡しぬれば。兩親めでいつくしむ事限りなく。掌上の珠よりもなほまされりとす。召仕ふ男女もおほかりけるが。兵衛夫婦。よく內外をおさむるゆゑに。平日すこしの爭もある事な

し。此網干は原よしある武夫のすゑなるゆゑに。今農民なりといへども。常に兩刀を帶し。弓箭槍棒をおきて。賊をふせぐのそなへとす。扨一日行脚の僧網干が門にたちて。拙僧はこれ諸國遍參の沙門なるが。頃日當國にいたり。普此近鄕を勸化す。さかるに此家のあるじ。善を好み布施をなし。よく佛を敬ひ玉ふと聞。相まみえんため。わざ〳〵まうで來つ。此よしきこえつぎたまはれと云。家僕これを聞て裏にいり。あるじにさか〳〵と告ければ。兵衛いそがはしく出來り。且一禮をのべて。彼僧の摸樣を見るに。眉には八字の霜をおき。雪をあざむく髭。長くたれ。顏はつやゝかに光りて。童の面の如く。童顏鶴髮といへるたぐひなり。鈍色の麻の破れたる衣を着し。おなじ色のきたなげなる袈裟をかけて。錫杖鍵鐺をとり。款然として立たり。仙風道骨自然の姿。凡僧とは見えざりけり。兵衛大に尊敬して。乃ちみちびきて座敷に通し。上座にすゑて恭いひけるは。上人かゝる草屋をいとひ玉はず。わざ〳〵訪玉ふに。小人これを知らずして。出てむかへ申さず。甚だ敬心を失ひ侍り。ねがはくは罪をゆるさせ玉へ。彼僧云。拙僧禮儀を知らず。卒爾に來りて相見を乞つるに。かへりてねんごろなる言葉にあづかるは。誠に是のぞみに過たりといひて。少しも心へだつるけはひなければ。兵衛大によろとび。やがて家僕に命じて。ゆたかに齋をまうけ。心を盡したるもてなしゝ。齋をはりて彼僧いひけるは。拙僧おん身の淺からぬ供養をうけて、悅びにたへず。福田は海のごとく。恩德は天

とひとしかるべし。けふしもこゝに來つるは。一鉢の齋を乞んためとはいひながら。一ッにはとれ。一ふしの事を告んとおもふがゆゑ。兵衛云。上人何事か告玉ふ。もし布施をもとめ。齋糧を乞玉ふとも。あへていなび申すまじ。何にもあれ。心をおかず命られ候へ。彼僧云。おん身の好心を見るにたれり。拙僧が告んとおもふ事。布施齋糧のたぐひにあらず。只おん身の心得べき事ゝ。其一事と云は。餘の儀にあらず。遠からずして當村に。洪水の災あり。いそぎ舩をそなへ置て。走路の用意し玉へ。拙僧實は此事を告知らさんを。もつぱらに。來つるといふ。兵衛これを聞て大に驚き。露ばかりも疑はず。其洪水いづれの時にかいたり申さんや。とてもの事にくはしくおもし玉へといふ。彼僧云。西村のはづれに建る。石の大窣堵婆に。血を流す事あらば。其時かならず洪水あらん。よく〳〵心をつけて。見はづし玉ふ事なかれ。兵衛ます〳〵驚て云。上人のおもしよく心に記しておこたり申すまじ。ねがはくはその災を村中に徇きかせて。とゝに難をのがれたくおもひ候。小人が家内のみ災をさけて。村中の者を見殺しにいたすは。無慈悲の事に候はずや。彼僧頭をふりて云。其儀はよろしからず。此村中の人民は。都て罪惡の輩なるゆゑに。皇天此災をくだし玉ひて。惡民を亡し玉ふ。たとひ又彼等に此事を徇つぐるとも。疑ひおほき輩なれば。かならず信ずべからず。かへりて天機をもらして。天罰をかうふるべし。おん身は日ごろ陰德をつむ善人にて。正直の人なれば。よく拙僧がことばを信じ玉ふ。災をまぬかれん事疑ひなし。拙僧今四句の偈を寫てあたふべし。此偈をよく心に銘じて。忘れ玉ふ事なかれ。もしいさゝかもたがふ時は。後日に大災を負べし。必忘却すべからずといひて。乃ち筆硯を乞てこれを寫。其偈に曰

天行洪水浪滔々　遇物相援報亦饒
只有人來休顧問　夙恩到底敵讐招

かきをはりてあたふ。兵衛これを讀といへども。その意を解せず。彼僧。時いたらばおのづから知るべしといひて。子細をいはず。兵衛これをおさめて云。上人を見奉るに。髭は白しといへども。面は童子の如し。御年はいくばくにて。いづれの鄕に住玉ひ。御名は何とまうし候や。彼僧云。いたづらに年老ぬれども。齡のいくばくなるを知らず。うかべる雲。ながるゝ水。いづくにかとゞまらん。大道は强て名づくべからず。名だになき道心なりと答へければ。兵衛これを聞。果して是有德の聖僧なりと。敬心いやまさり。餞磨の搗染二端。高津木綿三端。白銀五枚をとり出して。布施とし。恭さゝげて恩を謝す。彼僧莞爾と打ゑみて。今もいふごとく。一所不住の身なれば。たとひ是等の物ありとも。かくしおくべき所なし。厚志のほどは。まうしうけたるにおなじといひて。かたく辭してうけず。はやいとま申すべしといひつゝ。つひに袖を拂ひて出去けり。かくて兵衛は。俄に船番匠をやとひ。夜を日に續て五艘の船をつくらし

む。人皆その意を志らず。何の爲にいそがはしく。船をつくるやといぶかりければ。船番匠等かたりて云。頃日ひとりの遍參の僧。此家に來り。近日當地に洪水の災あるよしを告しゆゑに。此家のぬし。その難を遁んため。かやうに夜をかけて船をつくらすなりといふ。これを聞者。兵衛は賣僧の誣言を信じて。不用の船をつくり。おほくの金銀を失ふ。愚なる者かなといひて。譏笑ざるはなかりけり。兵衛また。庖廚にて召仕ふ老嫗をよび出して。汝は別事を顧ず。毎日西村にゆき。石の窄堵婆をうかゞひ見て。もし血のいづる事あらば。はやく告知らすべし。必ずおこたる事なかれといひつくる。老嫗はこれより。その事をおのれがやくにして。毎日西村にいたりて窄堵婆をうかゞふ。かくしつゝも數日を過ければ。かの老嫗がふるまひを見て。あやしむものおほかりけり。扨その西村のはづれに。又六といふ猶戸住けるが。一日かの老嫗杖にすがりて例のごとく。窄堵婆のもとに來り。をがむかと見ればさはなくして。唯うちめぐりて子細にうかゞひ。すなはち歸らんとするを。又六ひきとゞめて。おん身こゝに來り。只窄堵婆を見めぐるをことにして歸るは。あやしき業なれ。そのゆゑ知らせ候へといふ。老嫗云。我あるじ人に語るなといはれしが。おん身にのみひそかに語るべし。此窄堵婆に血のながるゝ時。洪水の災あるべしと。前日遍參の僧。我主人に告られしにより。毎日これをうかゞひ。もし血をながさば。はやく水難をのがれんと。主人おのれに申付て。かくはものし侍るゑ。あな

かしこ人にかたり玉ふなといひて。歸りければ。又六おぼえず呵々と打笑。今の世にもなほかくのごとき痴人あり。頃日旱する事數日。何の洪水かあらん。又石の窄堵婆。いかでか血を出す道理あらんや。我彼奴をあざむきて。一場の大笑をもよほすべしとひとゝ居ぢ。次の日朝まだきに。野猪の血をとりて。窄堵婆の正面にそゝぎおき。老嫗が來るを待居たり。此日又老嫗來り。窄堵婆に血のながれたるを。一目見るよりも。忽ち色を變じ。たふれまどひつゝ走歸りぬ。又六はかたはらにかくれ居てこれを窺。手を打てゞ笑ける。兵衛は老嫗が色をかへて歸るを見て。汝かくあわてゝ歸りたるは。窄堵婆に血ながれ出たるやといふ。老嫗息もつきあへず。主人はやく走り玉へ。窄堵婆に血をながしぬ。その災急ならんといひて。そこら立まどひければ。兵衛とるものもとりあへず。あわてふためきつゝ。彼五艘の船に家財を殘らずはこびのせ。一家の男女をたづさへて乘うつり。すはといはゞのがれゆかんと心をくばりて待にけり。此時はこれ六月の天氣にて。太陽人を蒸がごとくなれば。洪水はさておき。一點の雨氣もなかりけるに。その日の午過る頃。乾の方に扇ばかりの黑雲出ると見へしが。忽四方にまきみちて。墨をぬりたるやうになりて。大雨車軸を流して。一晝夜やまず。東まらむ頃。河水大に溢て。村中につき入しかば。後山にのがれ行べきいとまもなく。手をひるがへす間に。東西兩村の人民居屋。盡く流れ失ぬ。此災にあふもの。親の行方もまらず。子をもうしなひ。家の雜具

もあらずなどして。おめきさけびわふ聲。五逆の亡者葬頭河に溺。十悪の罪人奈河津に苦にひとしく。叫喚大叫喚の光景。目の前にあるが如し。高波大山のくづるゝが如く溢て。なりどよむ音雷にひとしく。天地も此時にほろぶるかと。魂きゆるばかりゝ。山を包陵に襄。蕩々とし。て四方一面にあらみわたり。海の面とことなる事なし。かゝるなかにもわきて哀にきこえしは。稚子を懐にいだきたる女。水にすこしあらはれたる。樹木の梢にとりつき居たるが。蛇いくつとなく流れよりて。木にはひのぼりまとひつくを。女かた手してはらひのけつゝ。懐の子をいとひて。くるしげにうめく。それが夫は。家のふき板をかきあげてむねにのぼり。彼方を見やるに。今も流さるゝかと危けれど。遙なればかしこに行て救べき便なく。只こなたより聲かけて。其枝はなす事なかれ。おかととりつき居よとよばゝる間もなく。大波ひとつうちかけて。人も木も流れうせぬ。かの夫が心のうち。いかばかりかかなしからん。やがて水に飛入て。これもともに失たりとぞ。又ある家にて。日もおほきに。此災あらん日死したる人あり。棺にをさめて。あすは野邊のおくりせんと。親族ともつどひて悲み居たる折しも。此災あり。こはいかゞせんといふほどこそあれ。水たゞまさりにまさりて。天井までつきぬ。家内あるかぎり天井にのぼり。桁梁にとりつきてさけぶ。かゝるほどに。此家ゆる〳〵とゆるぎて。つひに柱の根ぬけて。おしながされ。棺も人もゆくかたをおちすとぞ。此たぐひの哀なる事。おるし

つくすべうもあらず。扨此時兵衞が船どもは。水にまたがひてとほく流れ。すこしよどみある所に出けるが。山きしのくづれたる下に。一隻の猿子猿をいだきながら。水に溺て流れけるを。兵衞見つけて家僕に命じ。竹の竿を以て猿をとりつかしめ。船にむかへて食をあたへ。山の上にはなしければ。子猿を背におひて。うれしげににげ行けり。又まばらく船をやる所に。一株の柳枝ながらぬけて流れ來る。そのうへに鴉の巣ありて。あらたに兒を育たるが。みな水に羽毛をぬらし。敢て飛ことあたはず。兵衞又家童に命て。鴉を盡く捉へしめ。船におきて羽を乾し。餌をあたへたりければ。皆よく飛て失にけり。かゝる時しも。一個の若男。柚の木にとりつきて。身上を棘にやぶられ。朱になりて木とゝもに流れ來り。此船を見つけて。一命を救給へとよばゝりければ。兵衞いそがはしく。家僕に命て。救あげんとす。妻おしとゞめて。我夫かの道人のさづけ玉ひし。偈とやらんをはや忘れ給ふか。人に遇とも顧問ことなかれとまめし玉はずやといふ。兵衞云。我今鳥獸をすらすくひたるに。いかでか同體の人をたすけざらん。すこしく偈の意にそむくといへども。人の危難をすくひて。あしきことはよもあらじ。汝おほくいふことなかれといひて。つひに此人をたすけあげ。乾たる衣服を着せかへ。藥をあたへなどしていたわりけり。次の日にいたりて。洪水やうやくをさまりければ。兵衞船を濱のかたへやりて見るに。目もあてられず。波に打破れたる家ども。算を打ちらせるがごとく。汀にうち

よせられたる。男女牛馬のたぐひ數もしらず。其うちには日ごろまたしく交りたる者もあまたあれば。胸ふたがり涙に目もくれながら。陸に上りて見れば。一面の白河原になりて。あとだになし。おほかりし在家。貯おきたる物。ときのまにうせて。塵ばかりの物も殘らず。あはれはかなき光景ゝ。只兵衞が家のみ。永にひたりて所々損じたりといへども。流れずしてありければ。大によろこび。いそぎ番匠をやとひて。修理をくはへ。もとのごとくにすまひけり。此災によりて溺死る者。五千餘人。命を全して歸る者。わづかに十が一二ときこゆ。是此村中の人民。日ごろ惡を好しゆゑに。天此災を下して。盡くほろぼし玉ふものゝ歟。窒堵婆に血をそゝぎたるは。原又六がたはふれといへども。乃ち是天數のきはまりならん。彼窒堵婆は。往古當國八代の産。舍利尼といふ有德の尼公。みづから經文をまるして。こゝに建おかれたる物なるが。村民これまでなほざりに見しを。此度の洪水。ちびきのいわほもおしながすばかりの勢ひなるに。彼窒堵婆のみ依然として殘りたれば。皆人おどろき。奇異のおもひをなして。これより血つきの窒堵婆となづけて。大に尊敬しけるとぞ。かくて兵衞は。かのすくひたる所の若人にむかひ。我いまだ汝を見まらず。さだめて西村の者ならん。何者ぞくはしく告よ。ゆくべき所あらばおくりつかはさんといふ。かの者いふやう。小生は西村のはづれに住。猶戸又六といふ者の子にて。名を犬太郎とまうす。父母は目の前に溺死し。家も流れうせたれば。かへ

るべき所なしといふ。兵衛不便におもひ。人を西村につかはして見せしむるに。あとだになし。兵衛犬太郎が年齢をとふに。十九歳とこたふ。兵衛かさねて云ふ。父母にはなれ家を失ひて。立よるかげなき若者を。いかでか情なくおひやるべき。汝心をかたむけて我にまたがはい。ゆくすゑよくはからひてん。氣づかふ事なかれといひて。つひに家にとゝめて居らしめけり。後に人の語るをきけば。播州書寫山の山ふかく。童顔鶴髪の道人あり。折〳〵金鈴をならして。峯より峰にうつる。柴刈翁落葉掻童など。まれに遇事あり。能過去の因果を示し。未前の禍福を知る。これを聞傳る人。道人をおがまんとて。書寫山にのぼる者おほし。人其名をまらざれば。唯金鈴道人とよぶ。彼水難を告し聖僧は。此道人なるべしといふ。其頃此噂遠近に傳へて。まばらくもやまざりけり。かくて其年もほどなく暮行て。新年をむかへけるが。一日。兵衛。彼犬太郎をそばちかくよびていふやう。聞説一子出家すれば。九族天堂にいたるとか。我年ごろ佛に奉りて。一子を出家いたさすべき。願望ありといへども。子といふは唯。皎二郎ひとりあるのみなれば。彼を出家せしむれば。先祖の血脈を失ひ。かへりて不孝となる。今ひとり男子をまうけなば。必ず出家さすべしとおもひつゝ。これまではすごしつるが。我已に七十にちかければ。別子をまうくべきいはれなし。唯是を生涯のうらみとす。まかるにおもひがけず。汝を得たるはさいはひなり。汝もし出家の志あらば。我望をとぐべし。汝が父は世にある時。よからぬなりはひをして。あまた鳥獣の命をとり。罪業をつむ事。常の人にまされり。まかのみならず。非命の溺死をなしたれば。冥途の苦患も。さぞとおもひやらるゝぞかし。汝もし出家とならば。父母の追福此うへかある。且は俗家にありて。からき世につかはれんよりのち〳〵一寺のぬしともなり。生涯を安くをはらんにはまかじ。我宿願をとぐるのみならず。汝が爲にもまた良計ならずやと。こまやかにまめしければ。犬太郎これを聞て。とにもかくにも。よきかたにはからひ玉はれかしと。いと安くうけがひければ。兵衛大に喜。汝速に心を決しぬるは。偏是佛縁のふかきゆゑ。いさぎよし〳〵といひて。俄に人を市に走らせ。まづ。僧鞋。僧衣。僧帽。袈裟。拜具のたぐひをとゝのへしむ。扨八代の井手の里なる。拈華寺といふ寺につかはし。吉日をえらびて。髪をおろさせければ。和尚かれに玄海といふ法名をあたへ。寺中に住しめて。おこたらず沙彌の作業を教られけり。此時彼が年已に二十歳ゑ。彼を出家せしむる費おほしといへども。兵衛すこしもこれをおしまず。此後も折〳〵雜費銀をおくり。暑寒の衣服に心をつけて。いさゝか麁畧はなかりけり。誠に是犬太郎が爲には。天地とひとしき恩人ゑ。

優曇華物語卷之一　終

優曇華物語卷之二

江戸　山東軒主人編

第三段　望月皎二郎雨を避て美女に遇事

抑彼網干兵衛が父は。望月六郎といひ。脇屋右衞門佐義治公に仕へて。烈々たる武夫之。去る應安元年三月。上野國沼田の戰に。脇屋の軍利を失ひ。義治公出羽國へおち玉ふ。望月は亂軍のうちに敵あまたうちとり。花〻しく討死をなして。武勇のほまれを殘したり。兵衛は其刻年わづかに五歲。母もほどなく身まかりて誰養ふものなかりしが。情ある人に育てられて。民間に人となり。つひに此處にうつり住て農夫となり。本姓をかくして網干兵衛と名告。漸々に家富けるが。父母追福の爲め。常に佛を供養し。慈悲ある人に育てられたるを忘れず。おのれも又人を救事を好みけるとぞ。扨兵衛日ごろおもひけるは。今諸國播亂の時に乘じ。武勇才智ある者は匹夫よりおこりて。國郡の主となれるすらあり。況我家は累世武勇のほまれあり。我一代は民間にくちはつるとも。せめて兒子は世に出し。よき君に仕へさせて。再び家名をあらはさばやと。これも又日ごろの宿願にて。其心支度をなし。熊本に通はせて。武藝文學を

學せけるが。いまだよき師を得ず。ひさしくこれを愁ひ。京にのぼせてよき師をえらびて。學せんとおもひつゝも。幼年なれば。これまではむなしく過ぬ。志かるにことしはや十七歲になりぬれば。志きりに心いそがはしくなりて。妻にも皎二郎にも其志を談。急に元服させ。京上りさせんとて。かたはらには元服の儀式をまうけ。かたはらには行裝をとゝのへしめ。吉日をえらびて。門出の祝酒を酌ければ。家内こぞりて悅あへり。時に兵衛皎二郎を持佛堂にともなひ。先祖の位牌をおがましめ。一腰の刀をとり出していふやう。是は先祖傳來の寶刀なり。彼基經が靈劍に比して。壺斬となづく。父六郎殿討死せられし刻。かたみに殘されし一腰なるが。今汝につかはす間。これをおびて發足すべし。よろづの事よく務よ。必ず怠るべからずと。こまやかに志めして刀をあたへければ。皎二郎おしいたゞき。親人のおふせよく心に銘じて忘れ候まじ。それがしが事は露ばかりも氣づかひ給はず。只よく御老躰を養て。恙なくおはせなどいひて。親子ともすゞろに心ぼそくおぼえて。涙ざしぐみけり。これぞ一世のわかれとはいかでかおもひはかるべき。彼刀もつひには留遺物となれり。かくて皎二郎は家僕一人をぐし。故鄕の雲を腦後にかへりみ。客路の霧を眼前にのぞみて。路をいそぐほどに。日あらずして京都にいたり志るべのかたに寄宿して。よき師をたづねけるに。幸其頃武藝の達人とよばれたる。滑良兵庫助。志ばらく京にあり。又文學にほまれ高き。官務惟治。いまだ周防にう

つらざる前なれば。此兩人を師として。もつぱら文武を學びけり。それは扨をき。彼犬太郎は。法名を玄海と稱し。拈華寺に住て。半年ばかりは讀經念佛して。出家の業をつとめけるが。生得の惡性漸々にあらはれて。氣づまりなる作業をきらひ。近き村〳〵の惡輩等とまじはり。ほしいまゝに遊興して酒肉を貪り。又は袁彥道がひとゝなりをまたひ。やゝもすれば爭論をひき出して。打合こと度〳〵なり。彼幼より獵戸の業を學び。箭をはなち。檜をつかひ。險阻をはしり。猛獸を手どりにするのたぐひ。無双の大力にて。身材人にすぐれて高く。大膽不敵の者なれば。惡輩等もおそれずといふことなし。師の坊さま〳〵異見をくはふるといへども。もちゐず。惡業日々にまさりければ。やむことを得ず。網干が方へもどさんとおもはれけるを。彼はやく曉しけるにや。一夜寺をぬけいでゝ。いづくともなく逃失けり。兵衛此よしを聞、彼奴が惡性を知らず出家させしは。我一生の誤なりとて。大に後悔す。玄海寺にある事わづかに兩年。出奔して後はいづくにありや。その噂もきかずとなん。かくて時光過やすく。日月梭の如くにめぐり。皎二郎京都を出てより。夢の間にはや三年を經て。ことし二十歳にぞいたりける。彼素心思靈巧うへに。精力を盡して藝術を學びければ。わづかの間に熟練し。誰ならぶものもなかりけり。さるに皎二郎ことしの水無月。鞍馬の竹切をがまんとて。朝まだきに家を出。獨歩してかしこに去。法會の儀式を能みて後。山中の風景を遊覽して。權麟結をな

ぐさめぬ。深山おろしの夢さめてとよみ給ひし。涙の瀧をくみて。折からの暑を忘れ。ちかくてとほきものにかぞへたる。九折を過て。汗に衣をうるほす。傳へきく女鬼を殺して。左義長谷の恆例を殘し。兩蛇を伏して。闍伽井の水の奇特をあらはすとか。空也の御所壇は。本堂の乾にあり。在衡が進士間は。佛殿の巽にあり。由木の社。八所明神。藥師堂。觀音院。車坂。眷較石。僧正谷は。牛若丸劍法琢磨の所なり。すべて此邊は岩洞よのつねならず。石面劍を瀆て斬が如く。其うちに。挑石。陰石。摑石。足駄石。水入石等の奇石あり。皎二郎殘りなく一覽し。それより木船の社にまうでゝ。龍王の瀧のほとりに立やすらひける折しも。青天俄にかきくもり。雷とゞろき。涙雨さとふりかゝりければ。傍なる小社に入て雨やどりす。時しもあでやかなる上臈。袖がきおほひ。裙かゝげてはしり來しが。電曜々と光。雷崇々とひゞくにおそれて。身をちゞめつゝ。こなたの社にはしり入。はぢも人目もいとはず。皎二郎が膝にひしととりつきて。打わなゝきつゝ伏たり。其あとより。腰元とおぼしき女兩人はしり來て。彼上臈にむかひ。おそる〳〵守り居たり。かくてしばらく時うつり。雷をさまり雨はれて。青天になりければ。彼上臈やうやく人ごゝちつきたるにやふと邊なる皎二郎を見たるが。忽おもてをさとあかめてかたはらにのき。長袂を顏におほひてはぢらひたる姿。此世の人とはおもはれず。年のころほひは。二八ばかりとおぼしく。芙蓉の瞻。楊柳の貌。たをやかにして。かつ

らの眉。みどりの髪。あざやかなり。名もしらぬ織物の。蟬の羽のやうなる薄衣に。とめきのかほれるも又たぐひなし。皎二郎これを見て。これはそも。天津乙女のあまくだりて。人間にあそぶにや。龍の宮の乙姫の海底よりいでゝなぐさむにや。誠に人の種ならずとおぼえて。魂とび心うかれ。自おさへとゞむべきおもひなくめでまどひぬ。上臈も目に秋の波をたゝへて。ひそかに皎二郎を見やるに。皎二郎は原。きれたる涙や衣なるらんとよみし。裸島の汐風あらきわたりに育たる。田舎人なれど。志ばらく京に住て。都人のみやびを見ならひ。驕奢は好ずといへども。おのづから都の風俗にうつりて。花車風流なるうへに。生れつきて又なき美男なれば。世にはかゝる人もありけるよとあからめもせず。魂身をあくがれ出て。こゝの御手洗川の螢ともなりなんとゝちす。互にいひ出すべきことの葉もなくためらひけるが。皎二郎いふやう。見奉れば並こならぬ御方とおぼえ侍り。今の雷鳴にさぞかしなやみ給ひつらん。おんこゝちはあしからずやなど情ある詞に。上臈嬉げに打ゑみて。何時かは志り侍らねど。御蔭にて心づよくおぼえ侍り。あまりのことはさに何事もわきまへず。さきほどよりの無禮の罪。ゆるさせ給へといとはづかしげにいふ。皎二郎打聞て。あつきことばをおさむるにゆゑなし。一樹のかげ一河のながれも他生の縁とかまうせば。何かはくるしかるべき。心ゆりて志ばらく憩給へといひて。胸のうちの思ひの波はあふるゝばかりなれど。さすがいづくの人ともとひかねて。ことばすげ

なし。腰元兩人も皎二郎に一禮のべて。扨もおそろしき雷にてありし。姫さまつかへなどおこり給はずやといひて。來しかたを見やりて。人まちげなる折しも。六十ばかりの侍。守役の從者とおぼしきが。轎子かゝせてはしり來り。上臈にむかひ腰かゞめて云。かしこの社家にて。雨やどりさせまうさんと存ぜしうち。やがていづくへか走り給ひしゆゑ。こゝかしこをたづねまどひぬ。日ごろ雷をきらひ給へば。ふかく氣づかひ侍りし。御こゝちはあしからずやいかにといふ。腰元ども皎二郎を指さして。此御方を力に雨やどりして。姫さまも心づよくおぼせしにや。御持病にもさはり給はず。氣づかひ志給ふな。そこのめしがへこちへといへば。老人こゝろえて。轎子のうちより。摺箔の單衣とり出してまゐらす。上臈半蔀のかげに入て。ぬれ衣にかへて着たりければ。老人は皎二郎にあつく禮をのべ。轎子をかたはらにすゑて上臈にむかひ。はやく暮にちかければ。いそぎ立せ給ひ。はやとく〳〵ともよほされて。上臈はのこりおほげに。皎二郎が方を見やりつゝ。たゆたひてわかれがたきを。腰元どもさしよりて轎子にたすけのせ。足ばやに走り行ぬ。皎二郎もわかれををしみ。依々戀々としてのび上り。かげの見えざるまで見おくりて。唯惘然として醉人のごとく。佇め息つきて居たるが。かたはらを見れば。さゝやかなる扇あり。これはかの上臈の忘れおきたるならん。追かけてもどさんにも。はやおそしとひとりごちて。ひらき見れば。こむらさきの地に。つたなからぬ筆にて

志なのなるあひそめ川のはたにこそすくせむすびの神はまします

といふ古歌をかきたるも又心にくし。かの人の手やふれけんとおもふにぞ。うちもおかれねば。せめてのおもかげと懐にして。扨四方を顧れば。暑にいたみたる木草ども。雨をおびて生かへり。夕虹東にひきて紅絹のごとく。涼風衣をとほし。鐘聲耳にひゝきて。はや暮になん〳〵とす。皎二郎打驚て。家にかへらんといそがはしくすゝみ行て。二三町ばかり過ける所に。木だち志げりたるうちに。鴉あまたむらがりて。哇々となく。皎二郎これを見ておもひけるは。今諸鳥ねぐらをもとむるころなるに。彼鴉どもねぐらにもつかで。かなしげになくはあやしむべし。志ばらく古郷の便をきかざるが。かはりたる事もなきや。氣づかはしき事なりと思ひつゝ。又二三町すぎ行折しも。はるかむかふより。旅人と見ゆる男。空中を飛がごとくにはしり來皎二郎ちか〴〵とすゝみゆくに。かの旅人それと見るより地にひざまづきて。あせも志とゝに息もつきゝ〳〵ぬさまえ。皎二郎あやしみ眼をさだめてよく〳〵見れば。これは古郷の家に日ごろいでいりとせ。父兵衛の目をかくる者なれば。いといぶかりて。汝何ゆゑかくいそがはしくこゝに來つるやといふ。かの男汗をのごひため息つきて。此度お家にゆゝしき大事ありしゆゑに。御むかゐの爲夜を日につぎて走上り。たゞちに御旅宿にまゐりしが。けふしも鞍馬へおはせしと聞。片時ものべがたき事なれば。おん跡をまたひこゝまでまゐりつといふ。

皎二郎これを聞て打驚き。大事とは何事ぞ。とく告よ。いかに〳〵と氣をせきて催せば。かの男唾をのみこみていふやう。當月某の夜子の時過る頃。御主人御夫婦の聲して。盗人いりたるぞおきよ〳〵と。あはだゝしくよばひ給ふに驚て。御家僕盡く目を醒し。おの〳〵得物をおつとり。松ともして走り出。そこら見れば。覆面頭巾におもてをつゝみたるくせ者。鮮血淋る刀をさげて黒闇裏にあり。みな〳〵すやつのがすなとよばひつゝ。ばら〳〵ととりかこみて。命を際にたゝかひけるが。かの賊勢猛長剣をうちふりて。飛鳥のごとくはたらきければ。敵することあたはず。御家僕のうち。即死の者五人。深手をおひし者三人。殘る者も力盡て。志ゆるみたるひまに。かの賊後口より走り出。築墻をのり越て逃去んとしつるを。それがしかれがしこれを追ゆきて。築墻の上にある賊の脚を。兩人してとらへひきおろさんとす。此時に乘じて。賊の頭巾樹木の枝にひきかゝりて。おもてあらはに見えぬ。月の光りによく見れば。豈はからんやかの賊は。まがふべうもあらぬ玄海なり。兩人は只あきれつゝ。なほ力をきはめてひきおろさんとしつるに。彼奴樹木にとり付。一脚をあげて兩人を地上に蹋倒。つひに墻をとゞり越て逃去ぬ。兩人の者は氣絶して。志ばらく死入けるが。やうやく命をまつたうし。玄海なることを見とゞけたるのみ。少しの幸之。つゞきておひてをかけたれども。行方志れず。嗚呼哀哉。御父は手槍をもちながら。土庫の前に斬れて死し玉ふ。御母人もおなじ所にころさ

れ給ひぬ。御家内をあらため見しに。塵ばかりの物もうせず。彼奴曾御家の樣子をよく知たれば。餘の處に目をかけず。只土庫にぞのぞいらんとしつるを。御主人常に目さとければ。物音をきゝつけて立出給ひ。聲たて給ひしゆゑに。彼奴事をとげず。だしぬきに斬まうせしならん。御母人もともに聲たてゝ。ころされ給ひつらん。翌日もなほ四方に手わけをなし。日向の嘉久藤口。球磨川の舟路。山路の嶮岨にいたるまで。多勢の追人をくばり。普たづねけれども。いづくよりのがれ出けん。行方ぞれず。おもふに彼奴幼より獨戸の業をなし。よく山中の案内を知りたれば。人のぞらざる徑を逃去しとおぼえ候。はやく御歸國ありて。事をはからひ給へと。息もつきあへずかたるにぞ。皎二郎これを聞とひとしく。天に號地に哭て。涙血を出だしけるが。やうやく心をぞづめていふやう。彼畜生元來惡性にて出家をとげず。拈華寺を出奔していづくにありや。其後は噂もきかざりしよし。親人の書簡にて聞しが。ぞかばかり災害をなさん者とはおもはざりき。再生の父母救命の恩人を殺害なす事。天魔波旬といへどもたとへがたし。誠に希代の惡業哉。たとひ彼天に路ありて上り。地に門ありてかくるゝとも。我速に探り出して。臊子にきざみ。肉醬となして。父母の怨魂を慰すべしとて。むなしき空をにらみて牙をならし。身をふるはしてもだへけるが。とにかくに御歸國をいそぎ給へとひきたてられて。ついに旅宿にかへりぬ。さて旅のよそほひそこ〳〵になして。其夜たゞちに發足し。夜どほし

早馬をはせて古鄕にかへり。父母のなきからを見て。哀愁に堪ざりけるが。かくてあるべき事ならねば。野邊に送りてむなしき烟となしはてぬ。家僕等屍は。父母の塚のかたはらに埋。あまたの僧を供養して。累七の佛事をなし。あつく其追薦をいとなみけり。おもふに彼玄海。恩人を殺せる罪。五逆十惡に過たり。たとひいづくにかくるゝとも。つひには必ず報あらん。皇天の羅網。閻羅の簿秩。暴惡を脫ことなし。いかでかひさしく無事をたもたんや。かくて皎二郎はふかく喪にこもりて。つゝぞみ居たるが。父母の身につけたる衣服。手にふれたる調度など見るにつけて。綠衣の袖のかはくいとまもなく。共に天を戴ざるの語をおもひ。仇を報る志ぞきりにて。百箇日の過るを待。家僕の內老實の者兩人をえらびて家事をあづけ。旅よそほひを調じて。ひとりみづから古鄕をはなれ。いづれの國を心あてとし。いづれの日を限りとせず雲をにざり水をつかむおもひをなして。百折千磨の辛苦をいとはず。仇人玄海がゆくへ草をわかちてたづねけり

第四段　近江國雨鉦の事

爰に又美濃國に。渥美左衛門高敦といふ鄕士ありけり。美濃助高房の子孫にて。名家の末なるが。ひさしく民間にまじはりて仕へをせざれども。たえずして君に仕へんとよみし。關の藤川

のほとりに住なれて。あまたの山林田地をもてり。なかばは武備を以て一鄕の非常を守り。なかばは農業をなして家大に富ぬれば。里人等渥美長者と稱じて。たふとみ敬ことかぎりなし。其妻は前にうせて。只ひとりの養女あり。名を弓兒といひて。ことし十六歳にぞいたりける。容貌世にたぐひなく。巫女廟の花の夢裏にのこれるがごとく。昭君村の柳も雨外に疎なるに似たり。志かのみならず。心ばへやさしくかしこければ。歌の道糸竹の事にも暗からず。えかき花むすびのたぐひまで。曉ずといふことなし。前の日木船にて雨やどりせし上臈は乃ち是此女子なりけり。又彼守役の老人は。來海衛守といひて。譜代の家士なり。弓兒都一見のため京上りするに。衛守老實にして物なれたる者なれば。えらばれてつきそひのぼれるなりけり。さるほどに弓兒は。權京都に逗留して。神社佛閣名所古跡を遊覽し。おぼえず日數つもりぬれば。はや古鄕にかへらんとて。つひに京都を發足し。近江路にさしかゝりて。小野の宿を過ける時。あまたの男女うちむれて。かしこをさしてはしりゆく。衛守これを見ていぶかり。何事ありて彼者どもは。いそがはしくかしこに走りゆくやと人に問けるに。答ていひけるは。近年世こぞりてその德をかたり。諸人渴仰の思ひをなす。播州書寫山の金鈴道人。おもひかけずこのごろ當國にいたり給ひ。當所不知也川の。文殊白椎寺といふ寺に止宿し給ひけるが。鳥籠の山を見給ひ。風水能勝地。清淨の靈山なりとて。けふしも彼山に入定し給ふ。此事國中にかくれなくあのごとく。諸人群集してかの山にいたり。入定をおがみ奉るなり。そのゆゑに見給ふごとく。此驛中の者も。家內あるかぎりかしこにゆきて。ひとりも殘れる者なしとかたる。弓兒轎子のうちにありて此事を聞き。衛守にいひけるは。金鈴道人とやらんは。活佛にておはしますよし。人のかたるをきゝおよびぬ。けふしも幸の時に當所を過て。此事をきくは。佛緣のふかきにあらずや。妾もかしこにゆきて結緣の爲入定を拜たく思ふなりといふにぞ。衛守打聞きて。うべなるおふせなり。さらば少しもはやく御供し侍らんとて。轎子をいそがせゆき。

ほどなくかしこにいたりて。轎子を麓におき。步行して山にのぼり。その所にいたりて見るに。たかきいやしき老若男女。蟻のごとくにつどひ蜂のごとくにむらがり。所せきまで居ならびて。こちおしあちおしひしめきあひたり。弓兒は衛守にたすけられて。腰元等とゝもに。諸人の前にすゝみ出てこれを見るに。木がくれて鶴の林のこゝちする松林のもとに。ひとつの假家をたつる。竹を以て柱とし。茅を以ておほひとし。志ろき布の幕をはり。其うちにたかく床をまうけてうへに新薦を志き。白木の經厨をすゑて。一兩軸の經をのせつ。すべてのさま甚清淨ゑ。道人こゝに端座しておはします。其姿を見奉るに。童顏鶴髮。自然の妙旨あり。雪を欺く鬚ながくたれて膝をすぐ。身には白紙の衣を着し。紙の袈裟をかけて。手に手爐をとり給ひ。香氣馥郁として。午頭旃檀のかほり。風に志たがひて空にのぼり。兜卒天宮にもいたるかとう

たがふ。目はねふり目にほそくひらき給ひ。口のうちに何やらんとなへ給ふとおぼえて。脣のうごくを見るのみなり。その左右に白椎寺の和尚。徒弟をつれて立ちならび。中音に讀經す。參詣の諸人はとふとさに涙をおとして。念珠すりならし。異口同音に念佛をとなふる聲。いとも哀なしく。げにこれ世尊涅槃の時にあひ。天人大會五十二類。沙羅雙樹の下につどひて。かなしむさまを。まのあたり見るがごとし。又かたはらを見れば。武具。馬具。衣服。雜器。錦繡。絹布。金銀。米穀のたぐひ。それ〳〵の分に應じて。これを供養し。山のごとくにつみあげて。佛果菩提の結緣とす。そのかみ高野大師入定の時。金剛峯寺いまだならず。眞然法師に遺訓して。成就せしむるとかや。さる例もありとて。かの布施物を盡く。白椎寺におくらせて。ながく佛殿修理の料にあてしむ。此日の雜費も又それ〳〵の施主ありて。すべて供養しけるとぞ。弓兒も旅中たづさへたる。一面の鏡をとり出し。白銀五枚をそへて供養しけり。さるほどに道人。參詣の諸人にむかひて。十念をさづけ給ひ。志ばらく時うつりて。さだめの時刻にいたりければ。ゆるやかに身を起して棺槨のうちにうつり給ふ。鉦と鐘木を把てともにそのうちにをさめ。すなはちこれをかきあげて。龍頭の天蓋をさしかざし。紗灯をてらし。好香をたき。大寶花をふりちらし。涅槃經の無常の偈をかきつけたる。氏幡子を把。衆僧。金鐃を鳴し。法鼓を擊。讀經しつゝ志づかにねり出して。山のいたゞきにのぼり。前にうがちおきたる穴の

ほとりにかきすゑたり。參詣の諸人も。そのあとにつきてなく〳〵かしこにいたる。扨棺槨につなをかけて。深き穴のうちにくりおろし。つひに土をかけて埋ければ。見るうち忽一塊の新塚となれり。諸人これを見て聲をはなちてなきさけび。且念佛をたかやかにとなへて志ばらくやまず。殘りおほくして去かねけるが。日色西にかたむくを見て。やうやく山を下り。おのが家〳〵立さりけり。弓兒も涙をおさへて。諸人とゝもに山をくだり其夜は小野の宿にやどりけるが。それより道をいそぎて。ほどなく古鄕にかへりつきぬ。此後も道人入定の時にあはざるは。せめて塚をおがまんとてかの山にのぼる者おほし。息だしの竹に耳をつけてきけば。鉦の音かすかにきこえて。百餘日たえず。げにこれ凡人にあらざる志るしなりとて。ます〳〵尊敬す。雨ふりて志づかなる日は。鉦の聲ことによくすみてきこえけるよし。これを近江の雨鉦とて。のち〳〵までも奇特のことにいひ傳へけるとなん。さるほどに弓兒は。旅中恙なく家にかへりければ。家内よろこぶ事かぎりなし。此後は無事にして志るすべきことなし。扨又時光速かにうつりゆきて。一夢の間に二年を過。ことし永亨十年にぞいたりける。このころ鎌倉の管領は。足利左兵衛督持氏公にておはしけるが。初京都將軍義持公。持氏公を以て家督とせんこゝろざしありしが。果さずして薨じ給ひ。義敎公將軍に補せらるゝにおよびて。持氏公喜ばず。京都に叛の心あり。執權憲實屢これを諫れども聽ず。もつはら其企ありけるが。

此事につきて持氏公。彼渥美左衛門が豪農なることを聞召れ。京都に攻のぼらん時。兵粮米を仕おくるべきむね。密に使者を以て命ぜられければ。渥美左衛門大によろこび。數代民間にうづもれたる先祖の家名。再びかゝやかすは此時なりと速かにうけがひまうして。密使をおもくもてなして鎌倉にかへし。おのれ管領を拜謁せんため。吉日をえらびて旅のよそほひをとゝのへ。進御の禮物として。おりのべ絹千匹。中折紙三千束。瀬戸の磁器。蜂谷の釣栁のたぐひ。當國の名產を調じて。五合の長櫃にをさめ。五荷の擔子につくりて。すくよかなる脚夫に挑せ。十餘人の從者を領しおごそかに用意して。みづから信濃だちのたくましき馬をえらびて打乘。鎌倉をのぞみてはせ下りぬ。これ吉に似て凶をまねくの徵なる事。後にぞおもひ知られける

優曇華物語卷之二終

優曇華物語卷之三

江戸　山東軒主人編

第五段　渥美高敦蚺蛇に遇事

去程に渥美左衛門は。尾張路を過。東海道にかゝりて。ひたすら道を急ぎければ。程なく相摸路につき。行暮て一夜宿かるとよみし。竹の下道にいたり。はや鎌倉に近しといへども。脚夫等は禮物の重荷をになひて。數日の遠路を來たる事にてあれば。身上つかれ足なへぎて。すゝみがたし。おかのみならず。午時もやゝかたふきて。飢にさへのぞみ。食をもとめんと志たれども。此邊はそのかみ。新田羽林勅を奉して。鎌倉の討手に下り。合戰ありし處にて。其刻兵火の爲に。燒れたる跡なれば。村野の百姓盡く離散して。一路の人煙なく。食を索べき便なければ。みな〳〵力をおとし。疲に志たがひ。ます〳〵擔子をおもくおぼえて。歩詫つゝ。又二三里行て。一つの九折をのぼり。秋霧のたなびくひまに。ほの見れば。はるかむかひの。疎林深處より。一張の烟たちのぼりぬ。渥美馬上より指さして。見よ〳〵。かしこに烟のたつは。必人家あるべし。いそげや者どもと下知して。馬をはやめていそぎ行。ちかくいたりて見

るに。果して林の裏に一ッの草屋あり。清流家をめぐりて。うしろに數十株の雞頭樹あり。時しもすゑの秋なれば。今をもなかに葉を染て。唐錦をおりはへたるごとく。日色にかゝやきあひて。見る目もあやなり。風のまに〳〵。水のうへに散みだるゝさま。えもいはれねど。かゝる好景にも眼とまらず。渥美等數人。飢たる腹をかゝへ。門口にいたりて見れば。窓のほとりに。蘆の簾をなのめにたれ。外の方の丸木の柱に。一ッの方燈をかけ。はりたる紙に。一膳飯あり。温飩蕎麥あり。酒あり。種々の魚ありとかきつけつ。これは火をともすのみにあらず。晝もかけおきて。ゆきゝの旅人に志めす看板なり。裏には太布といふものを着たる。畸の老嫗。たけながき白髪をふり亂したるが。庭竈の前に圓座敷て。火を燒てゞ居たる。そのかたはらに。ひとりの小厮酒食の器をそゝぎ居たり。渥美等數人。かの看板を見ていきかへりたるこゝちをなし。馬を門口につなぎ。擔子をおろして。ひとしくうちにいり。竟に尻かけて。飯をくらふ者あり。蕎麥をのぞむ者あり。酒肴をもとむる者あり。おのがさま〳〵乞とりて。飽までのみくひし。やう〳〵飢を忘れて。十分に氣力を養ひ。志ばし息らひける折しも。むかひの田道の方より。六十六部の妙典をおさむる。回國の修行者笈をせおひ。拄杖をつき。鉦を打ならしてあゆみ來つ。こなたの門口に笈をおろし。かたはらの樹の根に尻かけて。蕎麥を買くひなどして。憩けるが。渥美が從者等にむかひ。見まうせば。なみ〳〵ならぬ御方とおぼえ侍り。い

づくへ赴むき給ふとて。かく寒空にむかひて。旅は志給ふぞ。日みじかの頃の旅は。心いそがしきものに侍り。擔子もおもげに見ゆるに。さぞつかれ給ひつらんといふ。從者等いふやう。それがし等はみな。此度初て此邊を過れば。道の樣を知らず。足柄越は險阻なるよしを聞しが。實にやといふ。修行者いはく。それがし今已に。彼所を越てきつるが。さばかりの難所にあらず。いづれも健なる若人たちなれば。重荷をおひ給ふとも。心やすかるべしと。二言三語話けるうち。ひとりが。偶。修行者の手くびに。ものあるを見つけ。怪て。そは何ぞと問。修行者答て。これにつきてはなが〳〵しき。因果物語あり。懺悔の爲に語てきかせまうすべしといふに。腹みちて榮耀心いでたる者ども。こぞりて耳をそばだてければ。修行者かたりていふやう。それがしは原土佐國の百姓なるが。隣家にひとりの老女ありて。年ごろ着るべき物も着ず。喰べき物も喰はず。ためおきたる金十兩あまり侍りき。志かるに老女。死なんずる時にのぞみて。かの金に深くおもひを殘し。劑符にいれたるまゝ。これを握て死しけるが。息絶て後も。かたく握てはなさゞれば。みな人おそろしがりて。かくばかり執念の殘りたる金なれば。亡者の心にまかすに志くべからずとて。其儘に屍を埋葬し侍りき。それがし其場にありてこれを見。世の寶を土中に埋て失ふは。惜むべき事とおもひつゝ。家に歸りしが。其夜俄に惡念おこり。暗夜を幸ひ。鍬と鎌とをたづさへて。墓原にいたり。老女の屍をほり出して鎌にて劑符の尻をき

り。金をうばひとりて。もとのごとく屍を埋んとしつる時。怪哉屍むく〳〵とうごくと見えしが。忽ち氷のごとくひやゝかなる手をさしのべて。それがしが手くびをまかと握りぬ。おそろしさ。いふべうもあらず。とかくして。もぎはなさんとせしに。なほつよく握りて。萬力などいふものにて。まきまむるやうに。痛堪がたく。ことに曉ちかくなりければ。せんすべなく。鎌にて其手くびをかきゝり。いそがはしく屍をもとのごとくに埋て。逃歸り。さま〳〵にしてこれをとりすてんとせしに。ます〳〵はなれず。其指我手くびにくびりこみ。肉ひとつに癒合て。死せる手くびに血氣通じ。脈のさしひきありて我身躰とひとつになりぬれば。斬すてべきやうもなし。こゝにいたりて大に後悔し。人の執念のおそろしき事を知り。前日の悪念をひるがへして。菩提の心を起し。罪障消滅の爲。六十六部の大乘妙典を。供養し奉らんとおもひたち。三年前に國を出て。普諸國をめぐり。頃日當國にいたりぬ。懺悔に罪を滅すとかきけば。みづから此事を語て。唯來世の苦患を脱れんとのみねがひ候。げに〳〵人の執念はおそろしきものにて侍り。因果覿面のことわり。あらそひがたし。あさましきかたちを。見せまうさんといひつゝ。手くびにまきたる布をとりて見せければ。こなたの人〳〵立よりて見るに。彼がいふにたがはず。色青くほそりたる手くび。握りつきてあれば。みな〳〵身の毛聳て。おそろしうおぼえぬ。あるじの老嫗これを見やりて。我等がごとく。一錢のたくはへなき身は。執念の

殘るべき氣づかひなくて。心安しと打笑つゝいふ。渥美も彼がものがたりを聞て。かゝる奇怪も。昔語にはまゝ云傳ふる事にて。實しき事ともおもはざりしが。かく目前に見れば。虚言のみにはあらず。げに貪欲の心ほど。おそるべきはなしと。奇異のおもひをなし且憐愍の心をおこして。從者に命じ。錢三串ばかりとらせければ。修行者かたく辭してうけず。山野にふして夜をあかし。流水を汲て咽をうるほす。一所不住の身なれば。過分の布施物をまうしうくるに益なし。御志のほどは。これにて足まうすなりといひて。只一錢をとゞめて。其餘はみなもどしければ。渥美これを見て。世の常言に悪つよき者は善にも又つよしといふ彼がたぐひならめと。心のうちひそかに感じけり。修行者は。笑をせおひて立あがり。はやいとままうすべしといひて。鉦打ならし。念佛數遍唱へて出行ぬ。渥美は修行者の長物語に。おもひかけず時をうつしければ。はやまかり出んとおもひ。あるじの老嫗にむかひ。足柄までではいかばかりの路あるやと問に。二里少し餘ありと答。日あるうち越るべきやと又問に。老嫗老眼をまぼりつゝ。日ざしをあふぎ見て。小厮にむかひ。今やうやく未の下りにもあらんかといふ。小厮うなづきて。門の木蔭髣にかたふきて見ゆれば。いかにもそのころなり。いかほど遂て行給ふとも。日くれぬさきにとく越給ふべしと。心安げにいひければ。腹みちて勢ひ付たる者ども。まからば片時もはやく立出給へと催して。いそがはしく酒飯の代をつくのひ。一齊に立出ていそぎ行ぬ。

扨二里ばかりは一飛と。かろくこゝろえて走りけるに。ゆけども〳〵山にちかづかず。四方を顧れば。草茫々として。かぎりもなきぬ野原也。こは道をふみたがへしかと。あやしみて。人にとはんとおもへども。旅衣露を殘して長月や。末野の尾花うらかるゝ頃なれば。往來の旅人もなく。雲のはたてに。雁金の鳴わたるのみ。まれにも人にあはず。かの酒屋の者どもが。二里餘もあらんといひしは。いつはりかといぶかりつゝ。頽風だちて俄に寒き夕ぐれを。たどるたどる。四五里も過たらんとおもふ頃。やうやく足柄の麓につきぬ。さらぬだに日みじかき頃なれば。はや紅日西に落て。天色已に晩なんとす。渥美衆人に下知し。かくては山中にて日くれぬべし。案内さらぬ險道をゆくに。日暮ては十分の難儀なり。少しも日の光りあらんうち。急ぎて山を越よと。自馬を眞先にすゝめて。はせのぼりけるが。道せまくしてゆきがたく。萬株の樹木頂の上におほひかゝりて。老龍の雲をいづるがごとく。千嶂の巖石脚の下に立ならびて。猛虎の風にうそぶくに似たり。徑路盤曲にして。高きに上り低きに下り。聞しにまさる險阻也。脚夫等はくるしげにうめき。馬は白盤をふきてすゝみかねしが。からうじて半山を過。やうやく蛤坂の峠にぞいたりける。此所はすべて平地なれば。暫らく擔子をおろし。清水を掬して咽をうるほし。馬にも水かひなどして。箇々息を休て居たる折しも。前面の樹林のうちに。籟々となる音あり。みな〳〵此音を聞。こは怪しやと頭をあげて見れば。夕霧ふかくたち

とめたるうちより。吊桶のおほきさなる蚺蛇。半身をあらはし。双眼に金光を出し。巨口をひらき。火のごとき舌頭を吐。頭を左右にうちふりて。只一呑に呑らん勢ひをなす。おそろしなどもおろか也。みな〳〵これを見て。面色土のごとくに變り。身の毛聳。魂天に飛。擔子を其儘すておきて。麓をさして逃去けり。渥美は巖のかげに身をかくし。馬上にたづさへたる。半弓をとりて箭をつがへ。滿月のごとくにひきたもちて弦音たかく飄とはなつ。其箭あやまたず。蚺蛇の頭にはつしとたちぬ。蚺蛇これにおそれやしけん。もとの霧深きうちに。こそ〳〵とかくれいりければ。渥美やうやく心を安んじ。從者等の立かへるをまちける所に。忽ち樹林のうちより。あらはれ出たる人ありこれを見れば。かの酒屋にて遇たる修行者也。怪哉こなたのやうすをうかゞうさまにて。去きりに鉦を打ならしけるが。やがて十四五人の盗人林のうちより走り出。かの五荷の擔子をうばひとり。もとのところに逃いりぬ渥美大に驚き。馬を飛せて追行けるが。此時已に日は入果て。宵闇の夜のいとくらくまのあたりだにわかたねば。盗人のゆくへを見失ひ。心狼狽して。馬の足をふみはづし。深き谷底におちいりぬ。馬は巖石に足を打をりて死す。渥美は鞍の前輪に去かとをりつき居たれば。幸にして一命は恙なしといへども。渾身つかれて。重風麻木ごとく。兩腿をそこなひて。鬪敗公雞に異ならず。こゝかしこに疵をうけ鮮血滾々ながれて。痛堪がたく。息もたゆげに打伏て。去ばしは起もあがらず。禮物

を奪れては。鎌倉にも行がたしと。あきれにあきれて。思案にくれたりけるが。漸々心をおづめておもひけるは。今おもへば。かの修行者も酒屋の老嫗も。盗人の夥也。我輩をいつはり。日くれに山中をゆかしめたるは。擔子を奪ん奸計にてありしものを。それと知らず。彼奴等にあざむかれたるは。我慮の淺きゆゑなり。今は後悔するに益なし。去かしながら。蚺蛇の口をのがれ。かゝる谷におちて一命をうしなはざるは。いまだ運のつたなからざる所ゑ。とても案内知らぬ山中にて。急に賊を捉んことあたはじ。ことに夜中かゝる幽谷のうちにあらば。必ず猛獸の餌となるべし。速此所を逃出。人家あるかたをたづねて。一夜をあかし。明朝にいたりて。家人等がおとづれを聞。且かの酒屋の老嫗を捉へせめとひて。賊の在所をたづね。此仇を報べしと。思案をさだめけるが。かゝる難儀の折なるに。時雨さへそゝぎて益々暗。東西をだにわかねば。松の枯枝枯草のたぐひをとり。腰におびたる火打袋をとりて。火を打出し。かりの火把をとゝのへ。斃馬はそのまゝすておきて。東の方に草のかたふくばかりの徑路あるを幸に。はせゆきけるが。およそ半時ばかり走りて。道なき所にいたり。萩紫苑女郎花尾花葛花のたぐひ。人の丈より高くおひのびたるが。殘る色なく霜がれたるなかを。押分つゝ。こゝかしこ道をたづねて。やう〳〵道はゞひろき所に出ぬ。これは必ず麓に通ふ道なるべしと。心うれしくおもふ折しも。ふりみふらずみ。さだめなき空とて。去ばしのほどに雨やみて。月の

夜にあらたまり。影玲瓏としていたらぬ隈もなし。これに力を得て。むかひの方を見やれば。松林のうちに一宇の寺あり。これ幸かしこにゆきて一宿を乞ばやと走り行て見るに。山門くづれて扉左右にたふれ。あはれにさびしう荒まどひたる舊寺ゝ。月の光りあかく。晝のごとくなれば。うちに入りてこまやかに見るに。一箇の人も住ず。鐘樓は荆棘おひかゝり。經閣もむなしく苔蒸ぬ。蜘網をむすびて諸佛を繫ぎ。燕子の糞護摩の牀をうづむ。方丈廊房。壁おち床ぬけて。葎むすぼふれ。落葉高くつもりたるなかに。狐兎の蹤あるのみ。一連の地。草蔓々と生茂りて。荒野のごとくなるに。大きなる松の吹たふれたるぞ物凄。渥美おもひけるは。あてなく尋る事なれば。いづくに人家ありやおぼつかなし。ことに腿酸脚軟て。一歩もはこぶに堪ざれば。枉て此所に一夜をあかすに志かじ。野宿するにはすこしくましならめと。心をさだめ。佛殿の上に座して。心氣をやすめけるが。松吹風谷の水音。耳にひゞくひま〳〵。霜夜によわる虫の聲。いとほそくきこえて。殊にかなし。時にむかひのかたを遠く見やれば。毬ほどなる火の光り。四ツ五ツ亂飛ぬ。狐のともす火かと怪みおもひつゝ。やゝ近くなるを見れば。十四五人の者。火把を揮照して。此寺にすゝみ來る也。渥美仔細ぞあらん。身をかくして樣子を見るべしと。蔀のやぶれに足ふみかけて。梁にのぼり。息をつめてうかゞひ見れば。かの者ども は以前の盜人にて。かの五荷の擔子をになひ來て。佛殿の上にかきすゑ。車座に居ならびて。

息をやすむる樣也。別に又怪むべきは。兩人の賊。蚺蛇をくゝりて。になひ來ぬ。渥美梁の上より。軒もる月あかりによく見れば。是實の蚺蛇にあらず。其形を似せつくりたる物なれば。これにも又あざむかれぬるかと。憤をかさぬ。扨おもへらく。我はからずも此所に迷ひ來て。彼奴等に出合しこそ幸なれ。日ごろ學び得たる武藝は。此時こそもちうべけれ。汝等見よ〳〵。刃鐵のつゞくたけは斬盡すべしと。目釘をぬらし袖をまきあげて。車座の眞中へ撲地飛下りければ。盜人どもはおもひかけぬ事にて。大に驚き。四方にさとひらきて。箇々平廣をぬきはなち。渥美を眞中にとりかこみて。前後一度に斬かくる。渥美は元來兩刀の達人なれば。双手に刀を打ふりて。劍法の秘術を盡し。身を閃て踢倒し。雪の瓊花を撒がごとく。はたらきて。前にすゝみたる兩賊を斬伏。四五人に深手をおはせ。なほ勢ひ猛く戰ければ。數人の盜人ども。氣おくれして尻ごみし。ほど〳〵敵しがたく見えたる折しも。床の板をはねのけて。一個の大漢をどりいで。明晃々たる。廣刃の斧をひつさげて。渥美がうしろにたちまはり。斧の光りひらめくと見えしが。忽渥美は兩段にわかれて。地上に撲地と倒たり。嗚呼憐むべし。名家の子孫。累代の舊家にして。一鄕の長者とうやまはれ。富貴威權共に保。一點の不足なき身なるに。はからずも賊寨に陷。四十二歳を一期として。草葉の露ときえうせぬ。正に是。萬里の黄泉旅店なく。三魂今夜誰が家にか落るゝ。いへるたぐひ

にて。哀はかなき身の終也。床の下より出たる大漢は。別の人にあらず。乃ち是犬太郎玄海也。かれ網干夫婦を殺して後。髪をたてゝ。みづから大蛇太郎と稱じ。賊首となりて。あまたの小賊をあつめ。擅に旅人を劫して。金銀財貨を奪とり。人を殺す事麻を刈がごとく。暴惡やゝつのりけり。このごろ當國にいたり。彼舊寺の床の下に。ぬけ穴をほりおきて住家となし。時〳〵回國の修行者に身を扮して。近國を徘徊し。蠟をねりて手くびをつくり。因果物語をなして。諸人をまどはし。人家の案内をうかゞひて。賊をなすたよりとす。或は又。此山中雲霧のふかきを幸ひ。蛇皮を以て蚺蛇のかたちをつくり。これを霧の裏にはたらかしめて。往來の旅人を嚇し。其虚に乘じて。擔子を奪ふ。又かの酒屋の老嫗も。同夥の者なれば。那裡に店をひらかせ。一箇の小賊をつけおきて。もつぱら往來の旅人をうかゞはしむ。若擔子おほき旅人のよぎる時は。彼等則ち山中に告て。これを奪はしめけるとぞ。扨渥美幽谷に陷てより。舊寺にいたるまでの仔細。かたはらに人もなきに。何を以てこれを知ると。うたがふべきが。これは後に其時の趣を考へ。かくもありけめと。推量をもて語傳へしならめ。此たぐひの事昔物語に例おほし。已に謝肇淛も此事を論じおきぬ。理を以てせむる人。かならずしもあやしみおもふことなかれ

第六段　弓兒流沈て岐蘇の雪路に苦む事

夫は扨おき爰に又。渥美が從者等は。蚺蛇をおそれて逃まどひけるが。主人の安否を氣づかひ。殊に擔子をすておきたれば。やむことを得ず。おそる〳〵かしこに歸りて見るに。主人いまさず。擔子も失たれば。大に驚き。箇々商議して。山中を普尋けるが。さらにゆくへ知れざれば。尋詫て其夜は麓に下りてあかし。翌朝又山にいたりて尋けるに。とある谷陰にて。かの斃馬を見つけて。益々驚き。扨は主人蚺蛇にのまれ給ふか。さるにても擔子の失ぬるはいぶかし。おそらくは山どもりの盜人等に奪れたるならん。志かるときは主人も賊の爲に害せられ玉ひしも知るべからず。何にまれ我輩。主人の生死を見とゞけぬのみならず。鎌倉にさゝぐる大切の禮物を失ひたれば。此儘國に歸らば必ず罪せらるべし。寧いづくへも逃行に志かじとて。おひ〳〵逃去者おほし。げに不忠の輩之。脚夫等は素やとはれの者なれば。さきだちて逃うせぬ。又たとひ罪せらるゝとも。國にかへりて此仔細を告。そのうへにていかにもなり果んと心をさだめて。國に歸る者もありけり。かくてかの者ども國にかへりて。事の始末をつぶさに告ければ。弓兒はさらゝ。一家の者どもすべて。夢にゆめ見しこゝちをなし。歎悲こと限りもなく。筆に記し盡すべうもあらず。家士ども議しけるは。主人蚺蛇に害せられ給ひしか。賊に殺され

給ひしか。此兩樣に必定せりといへども。萬に一ッ恙なくおはさんも量がたし。何にまれ。人をえらびて彼所につかはし。生死のほどをたゞし。其上にて仔細を鎌倉にうつたふるにたくべからずと。一決して。おもだちたる家の子。兩人を旅だゝせければ。兩人は道を急ぎて彼所に至り。よく山中の案内をたゞりたる者をやとひて。隅〳〵を殘りなく尋ければ。つひにかの舊寺にて。渥美が屍を尋ね出し。賊の所爲に決しぬれば。たゞちに鎌倉にいたり。事の始末をつぶさにうつたへ。渥美が屍をとりてかへりぬ。管領持氏公いからせ給ひ。やがて捕盜官に命じ給へば。あまたの收兵をゐて。足柄に至り。あまぬくもとむるといへども。賊どもはかの擔子を常の擔子とおもひ。ひらき見て。はじめて管領にさゝぐる禮物なることを知り。且目錄書を見て。渥美が住所姓名を知り。かくては後〳〵僉議きびしかるべしとおもひ。殘らず逃去たる跡なれば。手をむなしうし。唯彼舊寺を燒亡して歸りけるとぞ。去程に渥美が家にては。主人を失ひて。暗夜にともし火のきえたるおもひをなし。只追福の佛事にのみ日をおくりて。いたづらに此年もくれ果て。うせぬる人はかへらねど。あら玉の年は已に立かへりて。永亨十一年にぞいたりける。爰に又。鎌倉の執權憲實は。管領持氏公の隱謀をひたすら諫といへども。もちゐ給はされば。此よしを京都に通じ。武田朝倉の諸軍勢とゝもに。持氏公を擊。持氏公運つたなくして。此年の二月。永安寺に於て。自害し給ふ。京都の御憤つよく。持氏公の隱謀に一

味したる輩は盡く九族をたゝれけるが。渥美も一旦此事にくはゝりたる事。京都にきこえて。田地家財を沒收せられ。一家の男女盡く追はらはれければ。日ごろの洪恩を顧ざる者ども。あはてふためき。我さきと遁まどひて失ぬれば。犬も途を失ひ。雞もなきまどひ。目もあてられぬ光景なり。弓兒はさる騷動のうちに。兵どもに捉はれ。已に京都へ送れんとして。ほと〳〵危かりしを。家の子來海衞守。此時病後にてありしが。一命をなげうちて救出し。いづくへも志のばせまゐらせんとおもひけるが。とても親族のかたゝ京都のきこえをおそれて。ちかづけまじとおもへば。前に渡なく後に途を失ひ。とかく迷ひ居て。追人にとらはれんも又氣づかはしく。とやせまじかくやすべきと。思案にくれたりけるが。ひとりの弟。前にゆゑありて勘當し。年ひさしくおとづれはせされど。信濃國に住よしを聞。かゝる急難の時なれば。權且彼が方へおちゆかんと。心を定めて旅立す。弓兒は市女笠を深くかづきて。面をかくし。絹の衣のうへに。浴衣をつぼ折て着。行纏をまとひ。草鞋を穿て。賤女の姿に扮作。衞守は兩刀を藁苞のうちにかくし。包とゝもにせおひ。太布の上着して。青頭巾ひきこみ。數珠つまぐり杖つきて。田舍翁の善光寺詣するが。孫女をともなひたるさまに扮てぞ打連ける。弓兒は涙にむせびかくかさなれる禍にあひて。おもひがけずも。住なれし故鄕をはなれ。ゆくへおぼつかなき。旅路に赴こと。いかなるあしき報ぞやといひて。うち歎ば。衞守もひたすら悲て。一歩もすゝ

まざりしが。かくてはかひなしとおもひかへて。自己志を勵し。弓兒をこしらへなぐさめて。岐蘇の棧たえ〳〵に。ゆくすゑふかき白雲をわけつゝ。彼陳忠が落馬したる。御坂の難所にさしかゝり。をさゝ原わけ行袖の露ぬきうへに涙のあとづくおきそへて。身の憂ことやいくら山。いくらともなき山坂を越ゆけば。胞衣ケ嶽。乘鞍ケ岳。御嶽。駒ケ嶽なんど。遠望峯〳〵。宿雪にうづもれて見るにさへ寒けく。雨を含孤村の樹。夕を送る遠寺の鐘。いづれか哀を催す媒にあらざらん。殊更おちうどのならひとて。山おろしの梢をならし宿鳥の月夜にさわぐまで。追人かと驚て。膽をけし胸をひやす。よろづに心をおけば。旅人の通ふ道をゆかず。こゝの山かしこの谷づたひして。間道をゆけば。さばかり遠からぬ道も。とかくしてはかどらず。弓兒は常に深窓のうちに養れて。あまたの侍女にかしづかれ。歌の道糸竹の業にのみあかしくらし。花にめで月にあくがれ。紅葉の秋雪の夕。折にふれ事にのぞみ。みやびたる事にのみ心をゆだねて。襲衣のおもきすら。身上にたへざる手弱女なるが。はからずも不祥の時にあひ。穿も慣ざる草鞋を踏て。かゝる險路をたどるなれば。忽ち脚破鮮血淋々ながれて。道のべの草を紅に染なし。彼に跌此に倒。風にちる白梅にひとしく。嵐にいたむ女郎子にたぐひすめり。只籠をはなれたる鳥の翼をやぶり。網をもれたる魚の。鰭をそこなひたる風情して。志らぬ里に宿をとひ。なれぬ人に身を寄れば。ねざめの床の草枕。かたしきの衣手さむく。岐岨川の岩にせ

かるゝ水音高くひゞきて。紅の淺葉の野良に刈草の。束の間もねられねば。夢だにむすびかぬつ。有明山にたつ雲の。ゆく〳〵さだめぬ身を悲て。知倶麻の河伯の細石。ちゞにくだくるおもひにたへず。袖のひまよりもる涙は。信濃野の。木蔭にみがく白露の玉にまがひ。保屋の溝の芽出さへ。足をつらぬくこゝちして。ゆきわべらひぬ。素危急のうちを。いそがはしく脱出たる事なれば。身にそへたるたくはへもかろく。こゝまでこそは凌ぎ來つれ。今は一飯のたすけを得べき手段も盡ぬ。衛守は年老たるうへに。病後の旅なれば。苦しさたへがたく。折ふしつよき餘寒にさへなやめられ。身去びれ足なへぎて。歩べき力盡たれば。山中の清水ある所を尋ね。咽をうるほさんとするに。時は衣更着のすゑなれど。名におへる寒國なれば。他鄕の嚴冬の時にもまさり。野鶯生ふ岩間にむすぶ氷は。劍を植たるやうにて。風の祝も心せず。風越の山おろし肌を斬がごとく。衛守は身上いらゝぎ。寒氣骨にとほりて。面草のいろにかばり。打ふるひつゝかしこに倒て。息もたゆげにうめく。にはかに旅立ぬれば。藥もたくはへず。人里に遠ければ。何せんもかひなし。弓兒はこゝちまどひて。衛守が頭を抱き。こは何となりゆく因果ぞと。泣聲だに出やらず。はや晩ちかくなりぬれば。ことに陡くらく。谷幽にして。心ぼそさ消もいるべきこゝちす。此折しも。一むらかゝる雲につれて降來雪。紛々揚々として。柳絮を飛すがごとく。鵝毛の舞に似たり。見る〳〵高くつもりて。滿地玉を志けるかとうたがはる。

兩人は雪水に衣をぬらし。吹雪に面をうたれてたへがたく。手凍足屈て。いかにともすべきかたなければ。弓兒かよわき力に。衛守を抱扶て。すこしあげりたる松が根に打伏せ。あたりの枯枝をひろひあつめて。火をたきつけ。雨衣さへなければ。只一包たづさへたる。著かへの小袖を打きせ。わづかにたくはへたる餉をいだして。雪水にうるほし。衛守が頭をなでつゝ。泣〳〵いひけるは。いかに衛守。其方を力にこそ年ゆかぬ女の身の。かゝる難所を過て。こゝまでは來つれ。もはや是よりさきは。ゆく道もたいらにて。心安しと聞つるに。などいひがひなくつかれたるぞ。などかくまでによばりたるぞ。氣分はいかに。あばしの飢をたすけよ。火にもあたりて。身をあたゝめよといへば。衛守やう〳〵頭をあげ。涙をはら〳〵とおとして。あまたの家士のうちにも。主從の御緣よく〳〵ふかければこそ。やつがれ一個これまでも。つきそひ申つるに。おのれ已に齡かたふきたるうへに。老病をうけたれば。ながくかしづきまゐらせん事たのみなし。況此寒氣にあたり。飢渴にせまり。險路になやめば。とてもいきながらふべきことかなふまじ。ともに全からんとすれば。二つながら失ふと申すことの侍るぞ。ねがはくはやつがれが。一重の衣を御身に襲て。寒をいとひ。我身一朝の糧を合せて。飢をあのぎ玉ひ。片時もはやくこゝを去り。弟が住家を尋給ひて。御身をやすんずる。良計をなし給へ。とてもたすかりがたき。老が身の介抱に。大事の御身をあやまち給ふなといふも。息のあたなり。

弓兒打聞て。それおもひもよらず。とまれかくまれ。ひとつにこそなり果め。たとひわらはのみ命たすかるとも。いかでか其方を見すてゝおち行べきと。泣〳〵いふにぞ。衛守かさねていひけるは。かゝる危急にのぞみて。など此老が身をさばかりかばひ給ふぞや。此大雪にとかくしてこゝにいまさば。必凍て死し給はん。おん身死し給ふとも。我身たすかるべきいはれなし。日晩ぬうちにはやとく〳〵。おちさせ給へといひて。苦き身を起なほり。帶ひきとき著物を脱て。弓兒が膝におしやれば。弓兒はなほもうち著せて。更に行べきいろなければ。衛守氣を焦燥。閑わけあしき御方ぞ。とても死ぬべき此身なるを。伺罪つくりに苦みをかさぬべきとて。赤裸になりて雪の裏にのたり伏。弓兒はかなしく。燒火をつくろひ。著物かき抱て。又も立寄。雪打はらひて抱おこせば。はや舌こはり眼とぢて。たのみすけなく見えけるにぞ。あまりのかなしさに聲だにたゝず。おつる涙をのごひつゝ。我身のぬくもりに。肌あたゝめなどして。介抱ど。今はとやかなひがたく。糸のやうなる息ひきとりて。黄泉の鬼となりはてぬ。弓兒はすべきやうもなく。只死骸に取つきて。かぎりなきくり言いひつゝも。悲歎の涙にむせかへり。哀なりなどもおろかゝ。あばしきて涙をおさへ。妾が身ほど薄命なるは。世に又たぐひあるべからず。父は非命に死し給ひ。家は不慮に滅亡し。あまた召仕し者どもにさへすてられて。立よるべき蔭もなく。住なれし故郷を追れて。あらぬ國をさまよひありき。只一個を杖柱とたの

みつる。衛守さへうせぬるは。いかなる宿世の報ぞや。年ゆかぬ女の身にて。いかでかひとり旅路をたどるべき。人買などに出合て。もし此身を奪れなば。ながき苦患をするのみならず。過行給ふ父母に。汚名をおはす不孝の罪。何といひわけあるべきぞ。とても不運の此身なれば。いさぎよく自害して。衛守があとをまたひ行。死出葬途を打連て。父母のおはします。草葉の蔭とやらんいふ所にゆき。ともにかしづき奉らん。そふじや〳〵と覺悟をきはめ。南無阿彌陀佛。日ごろ念ずる谷汲の觀世音親子は一世のちぎりときけど。佛菩薩の慈悲心にて。父母の蓮座にみちびき給へと念じつゝ。西にむかひてふしをがみ。おくれはせじと氣を勵し。苞にかくせし刀をぬき。雪に映じてきらめくを。やがて吭につきたてんとしたる折しも。背後の方の巖の上に。籟々といふ音ひゞく。此音は何等の音ぞ。後の物語を待得て志るべし

優曇華物語卷之三終

優曇華物語卷之四上

江戸　山東軒主人編

第七段　荒熊弓兒が死をかへて生となす事

其時弓兒。巖の上の物音を聞つけ。人の來るにやあらん。折あしゝと。手をとゞめて。背後の方をあふぎ見れば。一隻の荒熊。前の爪後の脚玉塵を蹋起し。樹根岩稜をふみ越て。はるかに高き所より。坂おとしに跳下りければ。今死んと覺悟きはめたる身ながらも。さすがめなれぬ猛獸の勢ひにおそれ。志ばしかたはらの。木蔭に立かくれける折しも。岨づたひに一個の旅客。笠をいたゞき。雨衣を披。雨刀をおび。雪はなほ降亂て。木蔭さへうち埋るを。笠にふせぎ。眞袖にはらひてすゝみ來しが。彼あら熊の跳くるにゆきあひ。大に驚き急に身を避んとするに。路せまくしてのがるべきかたなければ。せんすべなく。肩にかけたる。包をとりて木の枝にうちかけ笠をとりて脊におひ。志るしの竿の類にて。雪の深淺をはかる爲にやあらん檀のなま木を七尺ばかりにきりて道のかたはらに立おきたるを幸ひにひきぬきて小脇にかい挾み。身を巖に倚て。相待ける間もあらせず。荒熊走り來て。いつさんに飛かゝる。旅人これを見て。いそ

がはしく身を閃し。熊の背後にめぐり出けるが。熊は忽身をひるがへし。はあんと吼る聲。雷のごとく。猛勢ひをなして。再又飛かゝる。旅人は一身かろくして。右にあるかと見れば左に避。左りにあるかと見れば右りにひらき。前にあらはれ。後にかくれて。雲間にひらめく電光のごとく。高波に飛かふ燕子にとひしく身をなして。額よりたかくかの榾の棒をさしかざし。畜生脚を見すまして。なぎ倒んと相うかがふ。凡熊は。火性短氣の獸なれば。再三旅人に欺かれて大に怒をなし。鼻をならし牙をかみ。眼をいからし腰をひねり。只一掴ど飛びかゝる。旅人あくまで熊を怒して疲れしめ。折こそよけれと。二歩ほど後に下りて。かの棒をとりのべ。空高くふりあげて。熊の頭をのぞみ。微塵になれとうちけるが。熊も又眼あきらかにして。忽身を躍てこれを避。棒にあかとくひつき。前脚の爪をたてゝかなぐりすてんとす。旅人はこれをとられじと力をきはめて。あばし引あひけるが。熊の力やまさりけんつひに棒を奪ひとり。おのが力あまりてのけさまに倒れたり。そのひまに旅人手早く刀をぬき。乘かゝりて月の輪のあたりを。あたゝかにさしとぼしければ。さばかり勢ひ猛き荒熊。四足をちゞめ身をふるはせ。たかく一聲くるしげに吼て。只一刀に息絶たり。これ名劍の威德なるべし。さて熊の死しをはるを見とゞけ。刀の血をのごひて鞘にをさめ。なほよく見れば。全身の毛は鐵の針をうゑたるがごとく。四足の爪は銀の戟をうち曲たるにひとしく。小牛のおほきさありて。

世に希有の老熊なり。疵口より鮮血わきながれて。白雪を紅に染かへぬ。旅人はさき程よりのたゝかひに。氣力疲れ。手足軟てたへがたく。雪をふくみて咽をうるほし。雨衣の袖をしぼりつゝ。すがのあら野に住熊の。おそろしきまでゝひとりごち。さばしやすらひてぞ居たりける。弓兒はこなたの木蔭に身をひそめて。忙怕旅人のはたらきの始終を見居たりけるが。おもふ旨やあらん。自害をとゞまり。刀を鞘にをさめて立出。旅人にちかづきていひけるは。おん身は。三年前の水無月廿日。木船の社にかさやどりせし時。妾を介抱給はりし。郎にてはおはさずやといふ。此旅人心におぼえある事なれば。あやしみつゝ。雪あかりに弓兒が顏を見るに。彼時まみえし。上臈にまぎれなく見ゆれど。おもひかけざる所にて。かはりし姿の出會なれば。且驚き且いぶかりて。返答もせず。只顏をつれ〴〵打まもりて。あきれたるさまなり。弓兒かされていはく。かゝる山中にてゆくりなく。ゆきあひまゐらせしことなれば。あやしみ給ふはうべ也。妾ことは。美濃國關の藤川のほとりに。年ひさしく住ぬる鄕士。渥美左衛門高敦と申す者のむすめにて。名を弓兒と申し侍り。ゆゑありて父をうしなひ。家をほろぼされ。岸うつ波のよるべもなく。松にはふ葛のたのみもたえて。かくあらぬ國にさまひ來し。身の上のはかなき物語は。一席にかたり盡しがたし。郎は又いづくの御方にて。何等の事ありて。獨旅はゝ給ふぞ。旅人いはく。やつがれは肥後國球磨川のほとりに住。望月鮫二郎と申す者なり。

前の年おん身にあひし頃は。物學の爲。志ばらく京都に寓居せし折ゝ。やつがれがかく獨旅するも。いはれのあることにて。途中にて語盡しがたし。おん身を見れば。從者などもなし。女のひとり身にて。これまでの旅路を。いかにして來給ひしぞ。弓見いはく。召仕し男女もおほく侍りしが。みなちり〳〵に逃失て。只彼本船詣のふしも。召連たる家士。來海衛守といふ者を。ひとり具して。これまではまゐりしが老年といひ病後といひ。身躰衰へたるうへに。此大雪の寒氣にあたり。今少し前はかなくなり。屍をとりをさむる便もなければ。其儘かしこにありといひて。松蔭につれゆきて見せければ。憐むべし衛守が屍は。雪にうづもれてよこたはりぬ。皎二郎雪打はらひて見るに。いかにも死顔ながら。見おぼえある老人なれば。胸ふさがり。人の哀もおのが身の。薄命にうちくらべ。只さきだつは涙ゝ。弓見も泣聲になりて。見給ふごとく。只ひとりを杖柱とたのみつる。老人にさへはなれ。妾ひとりの身となりぬれば。進退ともに途を失なひて。いかにともすべきかたなく。已にさき程。自害して果んとおもひつめて。ものしける折しも。彼熊におどろかされて。志ばし手をとゞめたるうちに。郎を見つけたれば。甦醒たるこゝちして。こゝまでは立出つ。熊をたゝかひ給ふを。かしこより見て。あやまちあらんかと氣づかひまゐらせしが。郎は風流士なるのみにあらず。力もつよく。武夫の道に達し給ひぬる。猛き健男なり。卒爾なるねがひごとには侍れど。かくおもひかけざる所にて。

めぐりあひしも。知倶麻の川の。ふかきえにしとおぼし給ひ。妾をいづくへも。ともなひて給はらんや。ふつゝかなる身をいとひ給はずば。たとひ煮飯使女となりても。かしづきまゐらせん。岐嵎の麻衣あさき心とな。おぼし給ひぞ。是非にたのみ侍ると。危急の時にのぞみては。はづかしさも打わすれて。わりなくきこゆるを。皎二郎打聞て。志ばし答ず。心のうちにおもひけるは。我木船にてはじめて。此婦人を見し時は。ふかく愛慕つるが。今は其時とおなじからず。共に天を戴ざる大事を身におひたれば。何のたのしき事ありてか。婦人をたづさふべき。志かりといへども。かゝる山中にて。女の身のひとりさまよふを。見捨て行も又志のびされば。ちかきにこゝろざして。行所あらば。そこまでは送りとゞけて得さすべしと。心をさだめていひけるは。おん身これまでたゞり來給ひしも。心ざす所あるならん。そはいづくにて侍るや。弓見いはく。心ざす所と申すは。かの衛守が弟に。健助といふ者あり。善光寺とやらん。近きあたりに往よしを聞しが。衛守身まかりしうへは。詳に志れがたしといふ。皎二郎いはく。何にまれ。日もはやくれ果たれば。片時もはやく麓に下り。人里あるかたを尋ね。宿を索て。ゆる〳〵ものかたるべし。さるにても老人の屍は。せめて土中にかくさんとて。松蔭の雪かきわけて土をうがち。屍を埋め。松の下枝をきり。其上にさしてかりの志るしとす。弓見は涙ながらに。衛守が殘せし念珠とりて。掌のうちにすりならし。南無阿彌陀佛。新靈頓證。佛果

菩提。父母もろとも。おなじ蓮に導給へ。わきてまうさんは。父上の靈魂。衛守が此世の忠義を憐み給ひ。冥途に到らば。御稱美の御詞を給はれかしと。念じければ。皎二郎も。念佛數遍を手向て。いざすこしもはやく。麓にくだらんといひつゝ。衛守が殘せる兩刀。幷に包をとり。おのが包にくゝり合せて肩にかけ。弓兒を扶て。走りゆかんとしたる折しも。雪頽の音雷のごとくひゞき。雪卷風さと吹きおろして。忽眼くらみ。ほと〳〵吹倒れんばかりなれば。いそがはしく弓兒が手をとりて。巖の蔭に身をかゞめ。風の過るをまちける所に。かなたの木蔭より。あやしげなる荒男。兩人あらはれ出て。こなたをうかゞふさまにて。ちか〳〵とあゆみ來。其扮作いかにとなれば。峯萊もて編る。雪帽子をかふり。蓑を著。蒲擘手をかけ。岳菅の脛巾をまとひ。蕓縅をむすび樵をはき。山刀をおび。一箇は矛をとり。一箇は鐇をさげたり。皎二郎雪あかりにすかし見て。大にあやしみ。弓兒を背後にかこひ。聲あらゝかにいひけるは。此山中には盜人おほく住て。志ば〳〵人を害するよし。曾て聞およびぬ。汝等がありさまを見るに。山籠の盜人にまぎれなし。我をよのつねの旅人とおもひて。剝とらんずるか。かしこを見よ。手負の荒熊をすら。唯一刀に志をとめたる。武夫なるぞ。もし汝等が頸の皮は。熊の皮よりもあつきや。速かに逃去ずんば。悔後せんずといひて。刀の尻そらざまにかへし。鞘をにぎり。彼等もしはたらかば。只一打と眼をくばりてひかへたり。彼者ども身をかゞめ。腰をりて。

旅人必ずはやまり給ふな。我輩は。山賊のたぐひにあらず。此山の麓に住。獵戸なり。前程此峯にて。穴熊を追出し。槍を突損じて取にがしたれば。そのあとをまたひ來て。こゝかしこを尋ねつるが。今ゆゑん身黑き雨衣を著て。巖の蔭にかゞまり居給ひしを。熊と見たがへて。かくうかゞひよりしなり。かならずあやしみ給ふことなかれ。今うけ給はれば。熊をまとめしとの給ひしが。そは實にて侍るやといふ。皎二郎これを聞きて。やう〳〵心を安んじ。其方等が尋る熊にてあらん。我今かしこにてまとめたり。かれ見よとて。石群の間を指さしければ。獵戸等信せずながら。かしこを見るに。其言にたがはず。大熊倒れ死してありければ。兩人舌をふるひて驚き。皎二郎をつれ〴〵打まもり。旅人の姿を見申せば。よわ〳〵しう。たをやぎたる若人なるが。何等の術ありて。手負の荒熊をかく安々とまとめ給ひしぞ。年ひさしく。熊とりをなりはひとする。我輩だに。手にあまりたる老熊なるを。只一人の力を以て。殺し給ふ事。よも凡人にてはおはさじ。山の神我等が苦辛を憐み給ひて。權に姿を現し。熊を殺し給ふならめと。鬚をすゝりつゝいひ。額を雪におしうづめて禮をなし。掌を合せておがみなどすれば。皎二郎はおかしさをまのび。我は山の神にあらず。遠國より來つる旅人なり。案内まらぬ山路にふみまよひ。夜に入たるうへに。雪深く。殊更足弱をともなひたれば。ほと〳〵艱苦にせまりて。せんすべなし。もし我等を導て麓に下り。一宿すべき家をもとめて得させなば。

勞賚には彼熊をあたふべきが。いかにといふ。獦戸等これを聞て。大によろこび。もし熊をたまはらば。我輩のおほいなる福なり。今命られしことは。いと安しといひて號示にやあらん。緒をつけて襟にくゝりさげたる。小笛をとりて。吹ならしければこゝかしこより。おなじさまなる獦戸三人。火把をふりてらしてはせあつまりぬ。始めの兩人彼等にむかひて。志かゝのよしをかたりければ。此者どもゝ大によろこび身をかゞめて。皎二郎にあつく禮をなし。いざたまへ。案内しまゐらせんとて。一箇は火把をとりて前にたち。一箇は弓兒を脊に負。一箇は皎二郎に擺をはかゝめ。行李をとりてせおふ。殘れる者は。藤葛を以て。熊の四足をくゝり。皎二郎が熊をたゝかひたる。かの檀の棒をひろひとりて。權の摠擔とし。兩人して熊をになひて後につき。皆一同に。麓をさして急ぎ行ぬ。扨皎二郎。荒熊を志とめたるは。力量のすぐれ。武藝の達したるのみにあらず。熊を殺したる刀は則彼壺斬の寶刀なれば。劍の威德によりて。さばかりの猛獸を。安〳〵と志とめ。危き一命をまぬかれたるならん。實東海の黄公が。虎を厭したる金刀。吉備の縣守が。虹を斬し靈劍にも。をさ〳〵おとるべからずと。のち〳〵これを聞人感じあへり

第八段　扇にかきつけたる歌紅糸をひく事

かくて皎二郎は。獦戸等に導れ。碎瓊亂玉をふみ分て。道をいそぎけるがかの獦戸等は皆髭黑に血眼にて。山猿のごとき荒男なれども。志はかへりて老實にて。皎二郎等兩人を深くいたはり。道すがら熊をもらひたることを。あまたゝびいひ出して喜び。小女を見申すに。山路に足をいため給ひしと見えていと難爲なり。女子の身にて。かゝる雪國の旅を志給ふは。いとをしきことにこそ。おん身も又熊をたゝかひ給ひて。さぞ疲れ給ひつらん。小女はおん身の妻にておはすや。妹にておはすや。善光寺詣や志給ふ。年若き人〳〵には奇特のことに侍りなど。いひもてゆくに。二里ばかりも過しとおぼえて。やう〳〵麓につきぬ。雪はます〳〵つよくふりみだれければ。獦戸等田家ある方に走り行雪車を二ツかり來て。兩人を乘せ。聲をそろへて雪車歌をうたひつゝ。ひきゆく其歌は

深山清水は底からすむが君のこゝろもそこからか
山で小柴を志むるがごとくこよひそさまと志めあかそ

とだみたる聲してうたふもをかし。かくて又。一里ばかりも過たらんとおもふ頃。やう〳〵一簇の人家ある處にいたりぬ。皎二郎此あたりを見るに。家はおほくあれど。旅店とおぼしきは一軒もなく。皆うちよろぼひたる小家にて。深く雪にうづもれぬ。いづれの家に案内してやどすかと。いぶかりおもひけるに。なかに年のころ五十ばかりの獦戸。ことによくいたはりける

が。立とゝまりていふはみなの衆何とおもふぞ。我〳〵がわばら家は。せまきうへに風とほして寒く。此客官等をやどすべき便なし。上の村の醫者殿の空坐敷をかりて。客官等をやどし申さんとおもふが。いかにといへば。一箇が答て。かの醫者めは。おのれ獨富にほこりて。人には物をしみする奴なれば。心よくうけがへばよきがといふ。そは氣づかひすな。彼は欲深きものなれば。其報に熊の肉を贈といはゞ。速かにうけひくべし。ことに家をかるのみなり夜具などはせんすべなしといへば。みな〳〵それにきはめよ。よからんといひつゝ。又雪車をひきて。をよそ十町ばかり行長屋門をかまへたる。大家の前にとゝまりてかの五十ばかりの猟戸。まづ内にいりとばかりありて出來り。よし〳〵。我富婁那尊者の舌をたゝきて。速かにうけがはせぬ。熊は源二が所にあづけよ。雪車は平五が所におけといひて。皎二郎等兩人を雪車より おろし。いざたまへといへば殘りの者どもは包をとりてわたし。客官我等はみな。こゝにていとま申すぞゆるゝかにやすませ。藤一老父よく案内してあげませたのみ申すぞといひて。わかれ去りぬ。皎二郎等導れて裏にいり。こなたかなたを顧るに。よほどの豪家と見えて。蘢ぶきながら。棟高き大家立ならび。土庫も二ツ三ツ見ゆ。牛馬もあまたやしなふさまえ。志ばしたゝずむうち。家僕とおぼしきが。ともし火をとり鑠子をならしつゝ出來て。はなれたる空家の戸樞をひらき。火をともし。扨猟戸にむかひて。我等はもはや管まじ。おん身にまかすといひてゆく。皎二郎等兩人は。身上の雪を打はらひ。脛巾草鞋をとく間に。猟戸一盥の湯をとり來て足をそゝがしめなどして。坐敷にとほし。薬柴とり來て。圍爐裏にたき火志てあたらす。皎二郎は淺からぬ志を感じてあつく謝禮をのべ。濡衣を火にかはかしなどす。弓兒はみだれたる髪とりあげなどして。やう〳〵心やすまりぬ。猟戸又。腰につけたる網の袋をとりていふは。さだめて飢にのぞみ給ひつらんが雪夜のことなれば。急にとゝのへまゐらせがたし。こは我等が山かせぎの糧にて侍り。客官等の。食し給ふべき物にはあらねど。清ことはきよし。志ばしの飢を志のぎたまへといひて。さし出し。酒はいかにぞ。すこしもちゐて。寒氣をはらひ給はずや。此村するに。濁酒のあるを。もとめ來てまゐらせんといふ。皎二郎いはく。我酒はつねに一滴ものまず。かならずしも心をつひやしたまふな。猟戸いはく。夜具なくて。さぞさむけくおぼされん。此家のあるじは。おほく寶をもちて。よろづに不足はなけれど。人の難儀をすくふことをこのまざれば。物を借んも便なし。明なば又まゐりて。道案内ながらに。送りまゐらせん。空を見るに。雪もやがてぞやみなん。はやくやすみ給へといひて。戸をひきたて行しが。又立もどりて。たき火をよくけし給へと。念入て出行ぬ。皎二郎は益彼が情深き志を感じ。かの網の袋をひらき見れば。木の皮もてつくれる。樏子めく器に。稗の團子をいれおきぬ。飢に堪かぬる折なれば。やむことを得ず。これをうちくひて。弓兒にもあたへけるが。

めなれぬくひ物なれば氣味よからずとてくはず。餉の殘りたるをすこしくひて飢をおのぎぬ。扨弓兒。皎二郎がそばちかくよりていひけるは。前の年木船にて始てまみえし時は。郎のみやびたる姿にめでゝ。心をなやましぬるが。今日は又。あら熊とたゝかひ給ひしを見て。猛き健男なるにめでまどひぬ。前の年の心は。化心なり。今の心は眞心なり。其ゆゑいかにとなればゝ。長〳〵しけれど。きゝて給はれかしとて。聲をひそめ。父左衛門。管領持氏公の隱謀にくみし。足柄山にて賊の爲に殺れ。家を沒收せられしより。さすらひて旅に赴きしまでの始終。衛守が忠義の志身まかりし事まで。こまやかにかたり。いかにもして彼賊を尋ね出し。父の仇を報んものと。心はやたけにおもひ侍れど。女の身のかなしさは。力およばず。くちをしうも。かひなし。なか〳〵にいきながらへて。ものをおもはんより。自害して死んと覺悟をきはめたる折しも。ゆくりなく郎にめぐりあひ。荒熊を殺し給ひし手なみを見て。たのもゝう嬉しさにたへず。自害をとゞまりて。ともにこれまでまゐりつ。これも深きえにしとおぼし給ひて。妾を妻となし給ひ。父の敵を尋出し。仇を報て給はれかし。慈悲ぞ情ぞ。あながちに願奉ると。膝の上にまろびおつる涙をのごひつゝいへば。皎二郎は。只さしうつむきて。ものいはず。答もせざりけるが。やゝありていへるは。げに途中の行合にも。たのむとあれば。兩刀をおぶる者の。ひくべき道はあらねど。一ッには其賊を尋出さんこと。雲をにぎるがごとし。二ッには

勝負は時の運なれば。利の劍ながら。又かへり打にあはんもはかりがたるべからず。やつがれ命を捨る事。人にすぐれてきらひなり。わりなきたのみを。なげやるにはあらねど。危きことはけしてゝがたし。命にかゝはらぬことにてあらば。何にまれたのまるべしと。思ひの外に臆したる答を聞きて。弓兒與醜顏になり。卑怯至極の答かな。おん身兩刀をおぶるからは。すこしは武夫の道をも。わきまへつらん。事によりては。百姓商人すら。命をすつるは。男のまけじ魂ならずや。武士をまねびながら。女子に大事を語せて。命に管ぬ事ならば。たのまるべしとの一言。卑怯とやいはん。臆病とやいはん。それ聞ては何いはんもかひなし。とてもながらへがたき命なりとて。涙を袖にかきはらひ。傍の刀をとりて拔はなし。ほと〳〵自害せんと見えけるを。皎二郎。やれ氣短し。はやまり給ふなといひて。刀もぎとり。今のごとくすげなういひしは。いと深き緣故あり。さばかりおもひつめたる。心底を見るうへは。せんすべなし。つゝまず語りきこゆべしとて。身の薄命の始終を。枝葉も殘さず。こまやかにものがたり。やつがれ父の仇を報んため。三年前に家を出て。諸國をめぐり。百折千磨の辛苦をいとはず。さま〳〵に姿をかへ。ちゝに心をくだきて。敵の行方を尋ぬれども。今においてきれざれば。只これを愁ひて。寢食も安からず。旅寢のうちに。むなしう三年の月日をおくりけるが。宿志を遂げざるうちは。いつまでも。家に歸るまじと心に誓。陸奥のはてまでも尋ねゆかんと。は

るけき旅路をこゝろざして。こゝまではまうで來つ。やつがれ宿志をとげて後は。おん身の父、の敵をも。たづね出して打得させん。おん身を妻とするからは。我爲にも舅の仇なり。いかでかよそに見なさんや。もし又かへり打にもあふならば。拙き運とあきらめて。我なきあとのとひ吊。香花をも手向てたべ。かく互に語りあひて見れば。身の薄命は一ッぞかし。此ゆゑに心にもあらぬ。情なき事は申つれといひて。打ちほるれば。弓兒はこれを聞て驚き。それとはあらず。女のあさき心から。あらぬ事を申せしは。ひとへにゆるさせ給へといひて。助太刀のたのみかなひしこと。且奇緣のむすばれしことを。ひたすらによろこびぬ。皎二郎かさねていはく。前の年木船にて。おん身の忘れおきたる扇をひろひとりて見しに

信濃なるあひ染川のはたにこそ宿世むすびの神はましませ

といふ歌のかきつけありしも。ともにかくさすらへて。萍の水にたゞよひ。此信濃路をたどり來て。あひ染川のよどみに。ながれあふべき宿世にて。かねて月老の紅糸をむすびおき給ひしならん。誠是奇遇なり。なみ〳〵のえにしにあらずといへば。弓兒打聞て。そは妾が筆すさびに歌かきて。腰元等にとらせつる扇なり。郎の目にかゝりしとは。露ばかりもおもはざりき。拙き筆の。はづかしさよといひて。顔をくれなゐにす。扨皎二郎詞を正していはく。夫婦のかたらひは人の大原なり。媒なうして。私にさだむるは。禮において虧る所あり。互に本意を

とげて後。媒人をえらびて。婚姻をとゝのふべし。それまでは。兄弟ともおぼされよといひて。露ばかりも。みだりがはしきことはあらざりけり。皎二郎又いはく。我熊に出あひし時。避のがるべき道なかりしゆゑ。せんすべなくたゝかひたれど。今おもへば危き事なり。もし熊の爲に一命を失はゞ。いづれの命を以てか仇を報べき。身に恙なかりしも。畢竟亡父尊靈の。守護し給ふゆゑならんといひて。行李のうちにたづさへし位牌をとり出して。志ばらく拜しければ。弓兒もともにをがみけり。時に烏の鳴聲をちこちに聞ゆ。皎二郎たちて。傍の窓をひらきて見やれば。いつの間にか雪ふりやみて。月光雲をひらき。雪虫の飛すら。見とむるばかりあきらかなり。見をはりて窓の戸をおしたつる折しも。外のたかにともし火の光りひらめき。欬嗽の聲などし人の足音す。皎二郎窓の戸をほそめにして。ひそかに見るに。年のころは五十をよほど過たらんとおぼしく。頭は斬髪にて白髪生交り。身の丈はひきく。耳のみ長く押たれて。唯狛犬を見るごとく身には紙子に錦の火打入たる。外套めくものを著縹色の衿卷して。われは顔なる老人。奴僕三人に棒をもたせ大把をとらせ。みづから敷石に杖をつきならして四方のくまなくを見めぐり。用心おごそかなるさまなり。皎二郎おもへらく。前に猶戸等がこゝは醫の家なりといひしが。かの老人はあるじなるべし。富る者の心がけは格別なりと感じて。戸を押たつる折しも。遠寺の鐘のひゃくをかぞふれば。はや子の時なれば。すこし氣をやすめんと。つ

いゐるやうにして。柱に身をよせ。膝頭に腮をのせてねふらんとす。弓兒は傍に手枕してふしぬ。兩人は身も心もいたく疲れたれど。夜のふくるにまたがひ。朔風壁のひまより吹とほして。寒氣はげしく。ことに此空家は。馬舍に隣たれば。馬の足ふみならす音。耳にひゞきてねふられず。只いたづらに眼をとぢたるばかりにて。一時ほど過けるが。母屋のかたに。盜人いりたるぞ。であへ〳〵とよばはる聲きこゆ。皎二郎おどろきて身を起し。窓の戸をほそめにひらきて見るに。旅人の姿に扮作たる盜人四五人。母屋のかたにどろ〳〵と押入と見えしが。まばしゐりて。あるじの嚴を中にひつ提出來て。門上につりおきし轎子をおろして。その内におし入。これをかゝげて一同遁去ければ。家僕等大勢。棒鎌鋤鍬のたぐひを打ふりておひかけ出。家内大に騒動して。うへをまたへとまどひけり。弓兒も人聲を聞て驚き。何事ぞとおそれまどふを。聲をたかうまたまひぞ。母屋に盜人のいりたるなり。我等只獨戸の案内にまかせて。家内の者にまかと對面もせず。こゝにやどりたるうへに。盜人等はみな旅人の姿なれば。我輩も旅人にして。ぬす人の手引をせしなんど。うたがはれて。連累にあはんもはかりがたし。敵をねらふ大事の身にて。少しも危きにをるべからず。幸ひ此家のうしろに徑路あるを。さきに程見つけおきぬ。かしこよりのがれゆかば。家内の者の知る事あらじ。いざ〳〵といひて。いそがはしく身づくろひし。うしろの壁を破りてくゞり出。橇を穿弓兒を背に負。月の光りに乘

じて走り行ぬ。扨かの嚴者は別人にあらず。近江の堅田に住し眼科内海鰕菴なり。かれ奇術を得たりといへども。貪欲の心ふかく。貧人の病をすくはざれば。許多の人の恨をうけて。堅田に住がたく。十年ばかり前當國にうつりて。おほく山林田地をもとめ。半は農業をなし。半は嚴業をなして。家ます〳〵富けるとぞ。爰に又大太郎玄海は賊首となり。大蛇太郎と稱して。足柄山に住しが。かしこを逃て下野國にいたり。黒髪山の嵒窟にかくれ住て暴惡やゝつのり。おひ〳〵小賊をあつめて。已に三十餘人山でもりす。かの旅人に扮作たる盜人等も。すべてみな大蛇太郎にまたがふ者どもゝ。鰕菴が熟睡たる所を捉へ。布を以て兩眼をつゝみ。轎子におしいれ。きびしくかこみてかゝげ出し。家僕等大勢。あとをまたひて追來るを。盡く打散して飛がごとくに馳行けるが。鰕菴は魂きえ〴〵になりて。遁出ん力もなく。轎子のうちにうつぶし居たり。かくて盜人ども。晝は山林にかくれてやすみ。鰕菴にも粮などあたへ。夜は夜どほしに走り。やう〳〵三日を過て黒髪山にいたりぬ。鰕菴は轎子のうちにありて。いづくへつれ行るゝやまらず。高きに上り低きに下れば。唯嶮き道を行ぞとおもひ。松吹風梢をならし。谷の水音物凄く聞ゆれば。深山にいたりしならんとおもひつゝ。今も命をとらるゝかと。羊の歩みに異ならず。賊等は嵒窟のうちに轎子をかきすゑ。鰕菴を引出し。眼をつゝみたる布をとり。ひざまづかしめおきて。皆奥の方へ行ぬ。鰕菴は唯惘然として。夢に夢見るおもひを

なし。魂飛膽きえて。人こゝちはなかりしが。やう〳〵頭をあげて四方を顧るに。いづれの所といふ事をしらず。只廣大なる巖窟なり。うちに大なる草屋あり。槍弩弓筒太刀のたぐひを。いくばくともなくかざり。傍に鐵器をすゑて。松をともす。火の光りあきらかにして。槍弩にてりそひ。きら〳〵と光りて。見るにすら身の毛そはだちぬ。奥は深くして。四五軒の小家をたてつらね。これにも火の光り明かなり。こなたを見やれば。人とも獸ともわきがたく。あやしげなる姿の者。たき火のめぐりに居ならぶ。頭の毛は松蘿をかきみだせるごとく。腮の髭は枯草を刈殘せるごとく荒熊のやうなる眼つき。野猪のやうなる鼻つき。狼のやうなる口つきしたる者どもなれば。益〻驚きこれは妖怪の栖にや。天狗のかくれ家にや。さもなくは立山の地獄なるべしとうたがひ。うちわなゝきて居たりしが。しばしありて。色黑き男走り出。唯今寨主これへ出給ふといひて。草屋のはしちかく褥を敷几をすゑて。相待さまなり。ほどなく出來る人を見るに。身の丈は六尺に過。相貌兇惡にして。身には熊の短裘を著。鹿の鞋子をはき。長き太刀をおび。二人の美女に手をひかれて。褥のうへに跏趺居たり。此人は乃是賊主大蛇太郎なりけり。太郎小賊をして。鰕菴を面前に引出さしむ。鰕菴はいかなるめにかあはんとおもへるさまにて。胸をば蛙のごとくにうごかし。目は魚のごとくにきらめかして。かしこみをりしが。太郎いひけるは。鰕菴とやらん汝緣故をしらずしてさぞな驚きつらん。汝をこゝにむ

かへしは別儀にあらず。我頃日烏目の病を愁ひ。晝は物を見れども。黃昏にいたりては全く見るあたはず。涙の出ることおびたゞしく。眼中針を刺がごとくに痛て。たへがたし。我は是賊主なり。凡盜人は晝をいやしめて。夜をたふとむものなるに。烏目を病ては何せんもかひなし。ことに我生れてより以來。涙といふもの只一滴も出したる事なきに。眼病によりて涙の出ること。もつともいまはしきことゝ。汝は眼療に妙をきはめたるよしを聞及びしゆゑ。小賊等をつかはしてむかへたり。我すこしも汝を害する心なければ。氣を安んじて權こゝにとゞまり。我此病を療治せよ。我病だに平愈せば。速かにはなちかへすべし。もし又我命をそむかば。立地に頭をはねべきぞ。返答いかにといひて。もし眼あきらかならば。はたと白眼べき形勢なり。鰕菴身をちゞめていそがはしくいひけるは。命だにたすけたまはらば。療治のことは。やつがれ力を盡してつかふまつるべしとて。やう〳〵心おちつきければ。太郎これを聞てよろこび。近くまゐれといひて床の上にのぼらしめ。病の樣子をうかゞはしめければ。鰕菴おづ〳〵はひよりて。且脈をおしてしばらく考へ。指をくみて膝の上におき。眉をしはめていひ出しけるは。夫人に双眸く〳〵見をはりて退き。指をもつて目皮をひるがへし。眼中の樣子をよあるは天に兩曜あるがごとく。一身の至寶にして。五臟の精華をあつむ。日月に一時の晦とあるは。風雲雷雨のいたす所ゝ。眼の光明を失することあるは。四氣七情の害する所ゝ。目

は肝に通じ。血を得てよく明なり。肝經は木に屬して。五輪のうち風輪とす。風輪の歌に。肝氣の虛傳へて眼中に入ば。昏々として涙を出し。滴窮なしといへり。俗に烏目と稱するものに二症あり。一に高風雀目。二に肝虛雞盲之。雀目は黃昏に物をみず。灯を點ずるに至りては全く物を見ず。是乃肝中に熱を積み。腎水衰へて。肝火を制伏することあたはざるがゆゑ。雞盲は酉時黃昏に至りては少しく物を見ず。灯を點ずる時に至りては全く物を見ず。是乃ち肝の虛なり。今寨主の目疾をうかゞひ見るに。惡血金井瞳仁の水內に滲入こと。洪水の井中に流れ入かたちのごとし。かの二症のたぐひとおなじからず。甚難症之。外寒邪をふれて五輪をそこなひ。內熱毒をあつめて五臟をやぶり。寒熱相たゝかひて。惡血眼中にあつまり此症となる。おそらくは深山に住給ひて。雲霧の濕氣をうけ。獸肉を食し熱酒を飲むこと過度し給ひて。內に毒氣をたくはへ。志かのみならず。常に怒ことおほくして。肝經をやぶり給ひしならん。此症をなづけて。內外併傷水母喪鰕の症といふ。もつとも不治の難症之。もろ〳〵の眼科の書に。いまだ此症のことを說ず。偶放光現瑞經に載たり。ゆゑに雀目雞盲のたぐひと誤つ者おほし。もし此儘にて十日を過なばとく盲人となり給ふべし子夏。左丘明が患。ちかきにあり危し〳〵といふ。太郎これを聞て驚き。汝が說ところ甚だ明なり。我は唯尋常の烏目とおもひて。かろ〳〵しく心得ぬ。望むらくは汝が術を以て。我此患をすくへ。平愈せば

かならずおもく賞すべし。鰕菴いはく。寨主の難症をすくふべき術外になし。只我家に蠻人傳方の秘藥あり。蠻名を。フラアテク。アメノマ。ルウダと稱ず。我家においては。離婁明睛散となづく。此奇方をもちゐば。速かに平愈あるべきが。その藥劑のうち一種。甚だ得がたきものあれば。急に調合志がたしと。頭をかきツゝいへば。太郎打聞て。その得がたきといふは何等のものぞ。凡人間世界にあるべき物ならば。我術を以て得ざるといふことなし。鰕菴いはく。腹籠の子をとり。胎衣とゝもに鍋中に煮て肉醬となし。胞子醢となづけて。藥に和し用ゆ。これ得がたき物なり。太郎呵々と打笑ひ。得がたきといふは。燕の子安貝か。火鼠の裘か。さもなくは閻羅大王の腦醬。阿羅々仙人の生膽にもあらんかと。おもひしに。それはいとも安きことなりとひたすらわらひて。心きゝたる小賊をよび出し。汝明日より七日を限り孕女を尋出して。腹籠の子をとり來れ。かならずおこたるなと。おごそかに命じ。鰕菴には酒食をあたへ。よくやすましめよといひツゝ。又美女に手をひかれて。奥ふかく入ければ。鰕菴は吻とため息をつきて。甦醒たるこゝちしけるとぞ

優曇華物語卷之四上終

優曇華物語卷之四下

江戸　山東軒主人編

第九段　野猪老嫗腹籠の兒をとる事

爰に又。かの來海衛守が弟に。健助といふ者ありけり。諸の武藝に達し。わけて弓ひく業をよくし。力量人にすぐれたる武夫にて。原は兄とゝもに渥美左衛門に仕へぬ。左衛門かれが爲人のなほく。且武士の業に達したるをめで。あまたある家士のうちにも。別に憐みをくはへてめしつかひけるが。偶左衛門が妻の侍女。眞袖といへる者と。みそかごとし。つひに其事あらはれて。家の掟なれば。兩人とも死刑におふべかりしを。左衛門が妻いとびんなくおもひ。かれ等をとらへ。うちいれおきたる一間を。ひそかにひらきて走らしめければ。兩人は涙をおとし。かゝる報はいつの時にかせんと。ふしをがみつゝ。夜にまぎれてのがれ出しが。左衛門も妻が情のはからひならんと推量ければ。追人をもかけず。其儘にすておきぬ。兩人は日蔭にある身となり。たのむ木蔭も雨もりて。身をかくすべき所もなければ。眞袖が所縁の者の。信濃國にあるを力に尋行。善光寺のほとりに住家もとめて。眞袖を妻とし。劍法打拳を人に敎て。かそけき便とし。ほそき烟をたてけるが。業はたゞひなく聞ゆれど。こゝろざし高く。人にくだらざる性なれば。おのづから人もなつかず。こゝにも住うきこと出來て。又下野國にうつり。黑髪山をはなるゝこと。一里ばかりこなたの村に住ぬ。此あたりには。武藝を學ぶ人もなければ。せんすべなく。猟戸の業をなしていとなみとす。又ふたりがなかに男子をまうけ。名を小松とよびて。ことし五歲になり。生れつきかしこく。顏かたちもいときよらなり。扨ものに。健助。去年の冬より長病を愁ひ。百日あまりなりはひをせざれば。益々困窮し。一重の衣やれたる器までも。みな藥にかへ米にかへて。塵ばかりの物も殘さず。病は日に異におもりて。いつ息はつべうも見えざれば。妻はかなしさ限りなく。ひねもすよもすがら。枕方につきそひ。心を盡して看病けれど。そのかひも見えねば。今は神佛の力をたのむより外なしと。ひたすら中禪寺の觀音をいのりけり。爰に又黑髪山の麓。茫々たる曠原のうちに。黃土小屋をいとなみて。ひとり住ぬる老女あり。うちよろぼひたる破敗屋の。壁の骨あらはれて。灯火にかゆる月をもらし。雷にくだかれし古松の。軒にそびえて。蔦葛はおのがまに〳〵はひまとひ。苔は深くむして。老龍の雲にのぼるかと。うたがはる。高楷颯ことして。夜雨樞を敲の外。人跡たえたる住家なり。抑此老女は。前頃。足柄山の麓。竹の下道に。酒店をかまへて。ゆきゝの旅人をうかがひし賊婆なるが。原は穩婆にて。生れつき貪欲の心ふかく。毒惡强氣の者なり。一日足柄の

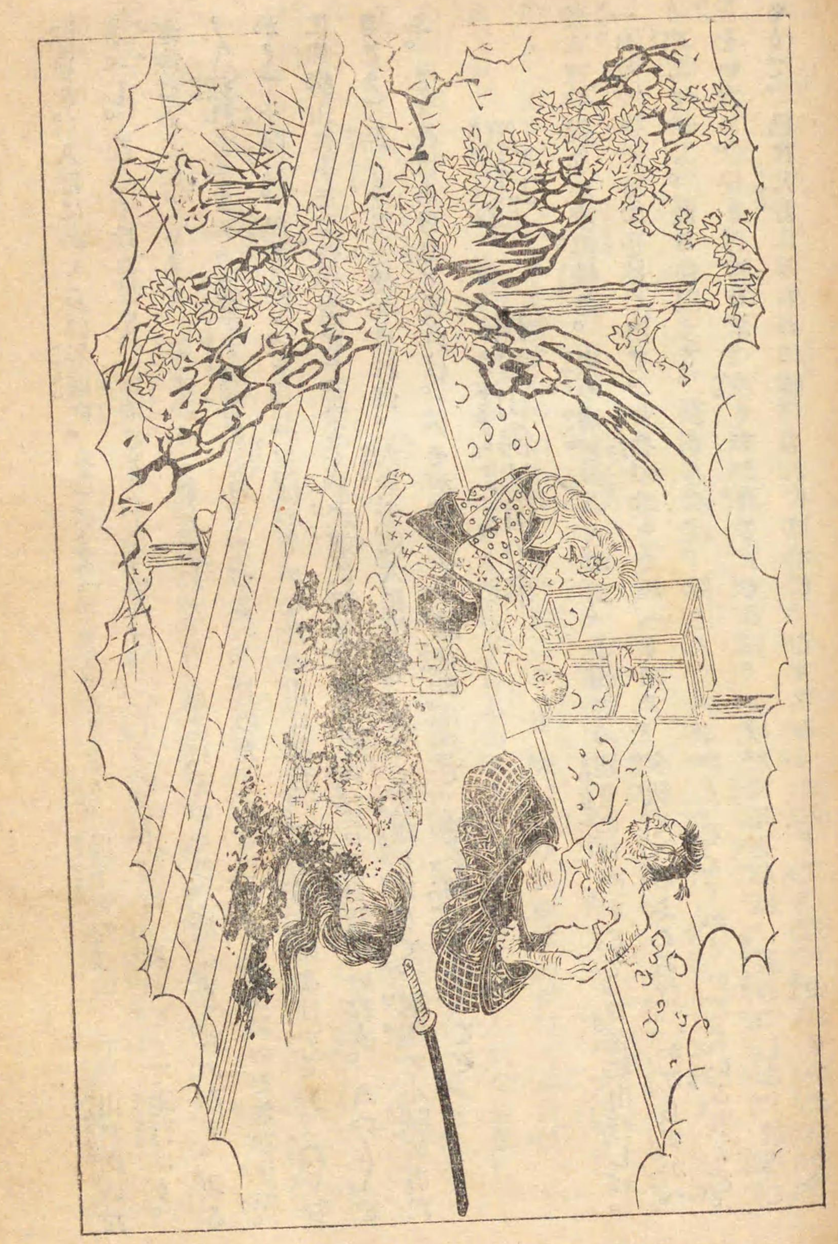
山中にて。手負野猪とたゝかひ。片目を牙にかけられて。睛となりしゆゑに。諢名を野猪老嫗と稱じけり。かれ大蛇太郎にまたがひ。賊の徒中にくはゝりて。さばらく彼地に住しが。ちかごろ太郎とゝもに。當國にいたり。おもては子をとりあぐる事をなりはひとし。或は人の子をまびき。又は人の子を養ひて金をむさぼり。その子をくびりころして。病死といつはり。門ちかき古井のうちに。屍をかくす事。いくたりといふ數をさらず。たぐひまれなる惡婆なり。扨一日。ひぢかさ雨とかふり來て。いとあはたゞしき黄昏。外のかたに人のうめく聲す。老嫗苧を拈さし立出て見れば。年のころほひ廿四五とおぼしき女。身にはとき物の肌薄き衣を着て。いとまづしきさまなるが。なみ〳〵ならぬ女の。さすらへしはてと見えて。人品賤しからず。見めかたちうるはしく。顔のかゝり手脚のつまにいたるまで。いときよらにて。頭髪を梳ず面上をいろどらずといへども。自然の美艶。人の眼を奪ふばかりなるが。柴垣に身をよせて。くるしげにうめき居たり。老嫗近くよりて。婦人はいづくの人かはさらねど。急病に苦み給ふと見うけぬ。いとをしきことにこそすこしもはゞかり給はず。こなたへいりて。保養し給へとて。脊さすりなどし。殲氣のさしこむにや。血の道になやみ給ふにやといひつゝ。懐に手をさしいれて探り見れば。いはた帶をむすびて。よほど月みちたるさまなれば。心中且そゝろに悅び。益々猫撫聲して。婦人はみごもり給ふと見ゆるが。いく月に成給ふぞ。女い

はく。妾みをもちて。八月に成りぬ。けふしも此邊に詣來しが。途中にて俄にこゝちあしうなり。たへがたく侍れば。お家の門近く立よりて。さわがせ申す。ひとへにゆるし給へといへば。老嫗ほゝゑみ。少しも氣づかひ給ふな。幸ひおのれは。子をとりあぐる事をなりはひとして。姙娠の婦人をあつかふことは。年ごろ手なれたる業なれば。よく介抱まあらせん。こゝにありて冷氣をうけ。ひえ給ひてはわろし。こなたへいりて。やすらひ給へといひつゝ。手をとりて裏にともなひ。おづかに腹をなでおろしなどして。介抱ければ。淺からぬ志のほど。まうしつくしがたし。よき門に立よりて。かゝる情にあづかるは。妾が幸ひなりといふを。老嫗打聞て。かならずしも心をつかひ給ふな。おん身の宿におはすごとくにおぼし。心ゆりてよく氣を養ひ給へといへば。女よろこび。うちとけて。さばしやすらひけるが。やう〳〵少しこゝろよくおぼえければ。夜のふけぬうちに。いとまもうしてまかりなんといふを。老嫗とゞめて。此雨にぬれつゝ歸り給はゞ。また途中にてこゝちわしう成り給ふべし。雨もやがてぞやみなん。今さばしはれ間をまちて歸り給へ。幸ひ。此原をへだてゝかしこの村に。産婦の妙藥あり。おのれ屢試しが。いと驗ある藥なり。一走行もとめ來てまゐらせん。まだ宵なれば。今さばしこゝにありて。全くこゝろよくして歸り給へ。産前は大事のものぞ。かならずかろ〳〵しく心得て。身をあやまち給ふな。湯をのみたくおぼさば。かしこによく沸てあるぞ。ひとり淋しく

とも。志ばしの間を待給へといひて。竹の皮笠かふり。松ともして出行ぬ。女はひとりこゝにをるに。松吹風颯々となり。家はゆら〳〵とゆるぎ。雨はら〳〵と軒にかゝりて。壁をもる冷氣。身に志みわたり。心のなしにや。窓の紙風をすゝり。灯火のまたゝきするも物とはなしに。すさまじきこゝちし。うちひそみをりて。老嫗の歸るを待けるが。野寺の鐘のひゞくをきけば。はや二更の頃なるに。いまだ歸り來ず。なゞてかくいとまいることぞ。はやく來よかし。妾もいとま乞して。まかりいでなんものをと。心をいそがし。たちて見居て見。待侘ける折しも。家の棟のあたりに。赤子のなく聲きこゆ。こはあやしとおもひつゝ。壁のやれたるひまより。さしのぞきて見れば。雨やみ雲ちりて。皎月四方をてらし。恰も白日のごとくにて。いと物凄き光景なるに。此家の蔭地にうつるを見れば。家の棟に。あまたの赤子の。匍匐ありく蔭。さやかにうつり見ゆ。又かしこを見れば。古井のうちより。一道の陰火朦朧と焚あがりぬ。女これを一目見るより。おそれをのゝき。膽魂をうしなひ。此家はかならず。妖怪の栖ならん。かの老嫗も。變化のものにや。はやくこゝを遁さるべしと。表のかたへ走り出。樞をひきあけんとするに。外のかたよりきびしくさしかためたるにや。とかくすれどもあかず。裏口より遁出んと。かしこにゆきて見れば。こゝもきびしくさしかためて。いかにともせんすべなく。大にうろたへて。忽ち氣のぼりしめくるめきて。打倒れ。志ばし正氣つかざりけるが。軒もる風の口中におちいりたるが。ひやりとおぼえて。やう〳〵人こゝち出來。垣をやぶりても遁出んとおもひつゝ。裙をかゝげて。表のかたへ走り出る折しも。おもひかけざるうしろより。すきひかみたる聲して。やよ〳〵婦人。物申すべき事あり。志ばし待給へと聲かけられて。又膽を けし。こは〳〵後を顧は。あるじの老嫗。裏口より歸り來て。行燈のかげにすくと立たり。女はじめはこゝちのしきうへに。情ある言に心ゆるして。あるじの姿を見さだめざりしが。今恠に眼をとゞめてよく見れば。頭の毛は。佐野の白芋をみだせるごとく。片目の光りは。小塩の鏡を磨たてたるに異ならず。いとおそろしき老女なり。女うちわなゝきつゝ。おん身はいつの間に歸り給ひしぞ。妾はもはやいとまもうしてまかりなんとて。走り出んとするをまづまち給へと引とゞめ。おん身にわりなき所望あり。うけひき給ふべきや。女いはく。志かのたまふは何等の事ぞ。此身に似合たる事に侍らば。うけがひ申すべし。老嫗いはく。所望といふは別の事にあらず。おん身の身うちに。つきたるものを乞得たし。いかにうけひき給ふべきや。女いはく。見給ふがごとく。貧しき身なれば。身うちにつきたる物とては。此襤褸一重の外塵ばかりの物もなきを。何を目あてに志かはのたまふぞ。老嫗いはく。我望むもの外にあらず。おん身の胎内にある子が望みなり。こゝろよく。あたへたまはんや。女打笑ひ。その望みならば。それとはやうのたまへば。かばかり胸はひやすまじきに。蹄にもあらぬ子を產なば。いか

にも望みにまかすべし。老嫗いはく。産出したる子は用にたゝず。いまだ胎内にある子を。胎子といひて。高價を得る妙藥なり。ゆゑに其腹籠がのぞみぞかし。女驚き。胎内にある子を。いかにしてとるべきや。老嫗打ゑみて。つひ其腹をたちわれば。心安うとらるゝ事ゝ。婦人は何ゆゑ其樣に。わなゝきたまふぞ。此老嫗がいたうなきやうに。つひ一思ひに殺し申さん。よき人ぞこゝへおはせ。はやうおはさずやといひて。隻眼をきらめかすれば。女は身をちゞめ。さすればどうありても。妾を殺さんといふか。くどき言いふ人かな。其藥をもとめたさに。頃日尋し姙婦。世におほきものなれど。尋る時はあやにくに。なきものぞ。これ無益なることいひて。ひまとらしたまはるな。宵からおん身にかゝずらひて。まだ看經もせねば。はやう殺して佛をがみたし。年老ては後生が大事ぞ。嗚呼阿彌陀佛〳〵と。唱る口は耳までさけ。野猪、老嫗となづけしも。げに理にて。葬頭河の奪衣婆が。新到罪人を。呵責する光景も。かうぞあらめとおもはれける。女はあるにもあられぬおもひ。妾を殺して。胎内の子をとらんとのたまふも。原は金ゆゑの。ことにてあらん。さばかり金を。ほしくおぼさば。此身を遊女に。賣てなりとも。金とゝのへてまゐらせん。こひねがはくは。胎内の子を産おとすまで。まちてたべ。よく〳〵深き縁なればこそ。妾が腹に宿り來て。已に八月にみつゑ子に。せめて此世のあかりを見せ。たとひ一日なりとも。親よ子とたがひによびつよばるゝまで。一命をたもちたし。

少しは哀れとおぼされて。志ばし命をのべてたべ。いきとしいけるもの。あはれみのこゝろなからんやと。いひさして。とりつき歎くを。顔そむけて見やりもせず。何やらものいはるゝやうなるが。年老たれば。聾て聞とりがたしいで〳〵。いたうなきやうに。よくはからふべしとて。裙かゝげ襷ひきゆふひまをうかゞひ。女遁出んとするを。老嫗猿臂を伸。衣服の襟ひしとつみて引とゞめ。刄廣なる。菜刀を把てひらめかせば。女は何とせんすべなく。ゆるし給へたすけてたべと。泣聲になりて。わぶるを聞ず。簀子をあらく蹈ならし。息の根とめんとつきかくる。女身を閃し。老嫗が袖の下をくゞりて。刄尖を避れば。又身を轉してつきかくる。つけつ。まはしつおひめぐり。つひに女の肩尖を。二三寸斬こめば。阿と一聲さけびつゝ。足ふみかねてよろめく所を。又つきかくる菜刀の。刄尖をもろ手にまかとにぎり。苦しき息をつきて。いひけるは。かくまでわぶるを聞入ず。とてもかくても妾を殺すか。死ぬる我身は。因果ともあきらむべきが。かなしきは胎内の子。闇よりやみに迷ひ行。さぞ此母を尋ぬべし。いかなるあしき宿世にて。我身には宿りしぞといひて。もだへ歎くぞ理なる。あなかしましき無益の繰言。聞もうるさしとて。菜刀をまごけば。指はら〳〵ときれおちて。鮮血まだゝる掌を合せ。慈悲ぞ情ぞ。志ばしの命をゆるし給ひ。病にふしをる夫の顔。宿に殘せし幼兒の顔。一日見せて殺してたべ。此あたりに人はなきか。妾をすくひ給はれと。聲かぎりにさけべども。素



人家をはなれたる一ッ家なれば。只空吹風の音のみして。誰こたふる人もなし。老嫗はかれが歎を。耳にもいれず。汝が腹の子は。我爲には寶なり。あまりみじろぎして。寶をそこなふてくれな。もはや冥途へやらんとて。黒髪をつかみ引よせて。のけさまにおさへ。氷のごとく冴たてたる。菜刀をとりなほして。むなさかを。さしとほしければ。血しほほどばしりて。紅の泉の涌流るゝがごとく。七轉八倒身をもだへ。手足をふるひ。四苦八苦を。一度にあつむる苦しみにて。目もあてられぬ光景なり。此折しも。黒髪山の小賊はしり來つ。樞をひらきて。裏に入。此躰を見て。もろはだをぬぎ。女の兩手をさかとおさへ。老嫗どの。心さづかに子をとり給へといへば。心得つとて。菜刀をさか手にとり。乳の下を十文字にきりさき。胎内を發て見るに。胎子左りにつきてあれば。男子ならんとおもひ。引出して見るに。果してさかり。憐むべし。八月にみちたる子なれば。五輪すべて具り。左右の手をうごかしぬ。小賊大に悅び。老嫗どのよくでかされし。此事寨主にきこえあげて。辛苦銀はおもくまゐらすべし。さきほど。おん身の知らせにより。はやく來て。手つだひせんと思ひしが。とかくしてひまどりしゆゑ。おん身のるすに。此女もし逃ゆきもせんかと。氣づかひしが。さもなくて重疊なり。老嫗いはく。表裏の樞を。外のかたよりきびしくさしかためたれば。網の魚籠の鳥なりき。おもふに。昨夜燈花の報あり。今朝喜鵲の噪ありしも。此福を得べきさらせなるべし。此屍はおん身かゝ

げゆき。人目にかゝらぬ谷底に。すてたまへ。我はあとより。胎子をたづさへて。山寨にいたるべし。夜のあけぬ間に。はやとく〳〵といへば。心得つとて小賊は。屍をとりて馳行けり。老嫗はあとにとゞまり。寶子のうへにながれたる。血ぢぼをのごひ。酒などうちのみて。ゆる〳〵疲れをやすめ。胎子を麻笥にいれてたづさへ。月の光りに乘じて。黑髮山にいそぎゆきぬ。かくて小賊は。屍をかゝげて。一里ばかりかなたの山に持行。深き谷底になげすてゝ。たゞちに黑髮山にいそぎ行。道にて折よく。老嫗に行合。兩人つれだちて岩窟にいたり。ぢか〳〵ときこえて胎子をさし出しければ。大蛇太郎大に悅び。おもく賞銀をとりて。老嫗と小賊にあたふ。さて夜はあけはてたれば。いそがはしく。鰕菴に命じて。藥を調しめけるとぞ

第十段　黑髮山佛法僧の事

爰に又。健助が妻眞袖は。夫の病をいのりの爲。中禪寺の觀音に日參すとて。日毎に出行しが。一日又。いつものごとく出て。黃昏の頃までかへり來ず。夕飯とゝのふころは。かならずかへり來るものゝ。此日に限りて。かくあれば。健助大にいぶかり。などてかくいとまいる事よと。胸をいため。安き心もせず。戌もすぎ亥もすぐるに。かげだに見えねば。益あやしみ。彼みごもりて。已に八月にみちぬれば。もしにはかに。こゝちあしくなりて。道に倒れもやぢつる。

かへり來べき道は。すべて山路なれば。ことさらに氣づかはしと。心も心ならず。小松は泣聲になりて。母さまは何ゆゑかへり給はぬぞ。母さまのかへり給はぬうちは。物もくはじ。寐もせじといひて。目もあはさず。健助さま〳〵にいひなぐさめ。いろ〳〵にこしらゆれど。とかく泣さけびてやまざれば。もてあましつゝ。もし夜中にもかへりやする。足音やひゝきつると。耳をそばだてゝ待侘れど。山田の蛙聲ぢきるのみ。筧の水のおとさへたえて。おとづれなし。かくて春の夜のみじかく時すみやかにうつり。烏なき雀囀。つひに夜はあけはてぬれば。いよゝ氣づかはしく。胸のみさわがれて。おもひわづらふ心のうち。何にたとへんかたもなし。小松は父にひしとゝりつき。とかくなきさけびて。母をぢたへば。せんすべなく。腰いたみて立がたきを。枕屏風にとりつき。呼とかけ聲して。やう〳〵たちあがり。病床をよろぼひ出。小松が手をとり。杖にすがりて家を出。妻の歸り來べき山路を。こゝろざし。朝霧をわけつゝ。尋行けるが。長き病のうへなれば。息たゆく。足なへぎて。歩みわづらひ。かしこの嵒のはな。こゝの木の根に尻かけて。小松に脊ささせ。みづから胸を打などして。やすらひ。蝸牛のごとく歩みて。やう〳〵半山を過。一ツの谷合にめぐり出けるに。忽ち谷の底さや〳〵となりければ。目をくだして見るに。山菅のかれたるうちに。一ひきの狼。人の足くびをくらひ居たり。又かしこを見れば。二ひきの狼。人の屍をくらひ居たれば。もしは妻の身のうへかと胸とゞろ

き。手ごろの石をひろひとりて。なげうちければ。狼どもはみなおどろきて遁去りぬ。健助小松が手をとり。からうじて谷底におりたち。近くいたりて見れば。かの屍は妻の眞袖なれば。一目見るより。こは夢かうつゝか。よもまことにはあらじと。あきれにあきれて。尻居に撞地倒れ。魂なき人のごとく。心空になりて。涙さへいでず。小松は屍の顏をなで。母さま何ゆゑかくこは〳〵しき姿にはなり給ひしぞ。ものいひ給へ。父さま。母さまは死給ひしか。はやうよびいかしてたべといひつゝ。屍をゆりうごかし。母さま〳〵母子のうとて號哭も。哀ふかし。健助ちばしありて人こゝち出來。妻のあさましき姿をよく〳〵見れば。みどりの黑髮は血にそみて打亂れ。顏は薄縹のいろになり。唇は濃紫にかはり。目口鼻より血を出して。いまはのきはのくるしみも。さぞなと思ひやらる。肩尖より胸のあたりをくひやぶられ。胎内の子もくひ盡せしと見えて。かたちもなし。たゞ鳩尾骨膣骨のみ。ちろくあらはれぬ。肉はすべて。くれなゐに墨をまじへたるいろになり。血臭きこと。鼻をおそひて堪がたし。五臟六腑もくひ盡し。大腸小腸三膰のたぐひのみ。こゝかしこにみだれちりて。蠅蚋蛄これを嗾。上世葬をせざる時に似たり。嗟呼痛哉。玉臉花質盡く變じて。故の容は露ばかりも殘らず。南柯の夢と醒はてぬれば。唯南山大師の無常の賦を讀。東坡居士の九相の圖を見るこゝちして。見る目もあてかねたり。常なき世のさがなれば。蜉蝣の夕をまたぬならひは。のがるべきにあらねど。か

く惡獸にくひ殺され。手足を異にして死するは。又なき例にて。あしき宿世の報とおもへば。いとゞ悲く。屍を抱て哭けるが。妻の襤褸の袂より一ツの布袋のまろび出たるを。とりあげて見れば。米麥粟稗の類に錢をまじへて入おきぬ扨は彼貧苦にせまり。中禪寺に日參するといひなし。我にかくして袖乞をまつるか我彼を妻とせしよりこのかた。困窮にくらし。夏蚊帳をたれず。冬褥を重ず身には襤褸をまとはせ。口には飽食をくはせ。立居苦しく物毎に。心を煩はしめてまばしが程も。安き心をさせざるに。彼少しも愁る色なく。朝夕まめやかに仕へて。よく女の道を守りつるに。などてかく。あさましき死をなしけるぞや。世には貞女を憐む。神佛はおはさぬか。胎内の子も八月にみち。五輪も具りつらんを。世界の風にもあてず。惡獸の餌食となすこと。そもいかなる因果ぞ。又彼が袖乞まつる心の内。さぞなくちをしかりつらんなど。日頃の强氣も。悲歎にせまりてよわりけるにや。丈夫に似ぬ。女々しきくり言までもいひならべて。哭けるが。やう〳〵涙をはらひ。彼狼は。妻の敵子の仇なり。我病なき時ならば。只一箭に射殺して。仇を報んずるものを。かくやせさらぼひて。力もぬけたれば。夫もかなはず。くちをしさよとて。拳をにぎり牙をならしけるがいかほどなげくとも。今はかひなし。せめて。なきからを。とりをさむる。支度せんと。おもひなほして。屍にむかひ。南無幽靈。成等正覺。阿彌陀佛〳〵ととなへ。泣ふしたる小松が手をとりて。よろめきつゝ家にかへりぬ。

彼悪婆に殺されたる女は。乃ち此眞袖なり。健助は唯狼の爲めに殺されしとのみ。おもへるもうべなりけり。かくて健助家にかへり。棺をもとめんにも。一錢の貯なければ。いかにともせんすべなく。衣服はみな代なして。むなしく空となりたる。舊葛籠のあるを取出し。里人をかたらひ負しめて。再かしこにいたり。むなしきからを。葛籠にをさめて歸りけるが。野邊におくらん便もなければ。とやせまじかくやすべきと。おもひをいたましめ。手を叉き首を低てつら〳〵來しかたをおもひ。我若かりし時。主君の掟をやぶり。おもき罪を犯せしを。深き情をたまはりて。危き一命をまぬかれたる洪恩。泰山よりも高く。北海よりも深し。此事心に銘じ骨に鏤て。身をおはるまで忘るまじと。心に誓ひ。時節を待。一ッの功をたて〻罪を賠。露ばかりも報んものと。それのみ念慮にかけて。うき年月をおくりつるに。かくさま〳〵の災にあひ。世に悲きことのみいでくるは。皆是不忠の報なるべし。妻むなしくなりしうへは。我病を看病べき者もなく。一朝の粮さへ貯ぬ身なれば。是より後は一日をも。おくるべき便なし。志かのみならず。我病日に異におもりて。いつおこたりはつべうもあらず。殘れる雪の日蔭まつ間のこゝちして。たのみすくなし。此うへに我身まかるぞならば獨殘れる幼兒を。誰ありて養ふべき。餓死せんは必定なり。とても武運に盡たれば。彼をあとに殘して。うきめを見せんより。寧手にかけて。我も腹きりて死んに志かじと。おもひをさだめ。貧き中にも武夫の魂は

失はず。一腰殘せし刀を把てうしろにかくし。小松を見やれば。小松は唯葛籠にとりつき。母子のう〳〵とて哭叫。健助目もあてられず。涙はふりおちて。きえもいるべきこゝちしけるが。かくてはとてずとおもひなほし。小松が背をなでゝ。汝はかしこき者なれば。我いふことをよく聞べし。母の屍はこゝにあれど。魂魄は極樂とて。はるかに遠き國に行。いかばかり暮とも。再びこゝに歸來ず。さばかり母にあひたくは。汝かの國に行ざるや。さもあらば父もともにゆくべし。かの國には。迦陵頻伽とて。おもしろく囀鳥もあり。鉢特摩華とて。うつくしき花もあるぞとよ。小松打聞て。そはうれしきことよ。はやうそこに連行て。母さまにあはせてたべ。いざ〳〵とて。物わきまへぬ幼兒の。いとうれしげに催せば。健助はいとゞ胸ふたがり。汝かの國にゆかんとならば。西にむかひて眼をとぢ。掌を合せて念佛をとなふべし。かまへて〳〵。目をひらくことなかれと。をしゆれば。小松おとなしやかに。居なほりて。さゝやかなる掌を合せ。ひたすら念佛をとなふるにぞ。健助も西の方をふしをがみ。一念彌陀佛。即滅無量罪。阿彌陀佛〳〵と。息もたゆげにとなへつゝ。永なす刀をぬきて。小松が背後に立まはりけるが。恩愛切なる悲みに。五臟六腑も惱亂して。さけちぎるゝ想をなし。手抖脚軟て。手をくだすべうもあらず。心たゆたひけるが。かくてはとみづから志を勵し。よろめく足をふみ志めて。念佛まうせ〳〵といひつゝ。小松が頂をなであげて。ほと〳〵刀をふりあぐる折しも。外の方

より。やればやまり候な。ちばし〳〵と聲かくる人あり。健助聲かけられて。心たゆみ。手をといめて。外の方を見やれば。若き旅人。妍婦人をともなひ。ゆるし給へとて裏に入る。健助折あしいと。いそがはしく刀を鞘にをさめて。ためらふに。旅人禮をなして。吾主は來海衛守の弟健助といふ人にはあらずやといふ。健助いはく。いかにもやつがれは。その者にて侍り。ちかの給ふは何所の御方ぞとて。いぶかしげなる。かほなるを。かの婦人かたはらより。打見て。いかに健助。汝妾を見忘れしかといふ。健助これを聞て心づき。此婦人をよく見れば。主君の娘弓兒なれば。大に驚き。いそがはしく。簀の上に伏て禮をなし。やつがれ心中さわがしき事あるうへに。かはりたる御姿なれば。見たがへ奉りぬ。無禮の罪をゆるし給へ。こゝはとしちかし。こなたへとて。塵打拂ひ。兩人を上坐にすゑて。慇しくいひけるは。姫君何ゆゑ。かはりたる御姿にて。おもひかけず。やつがれをとはせ給ふや。若き御人は。何等の御方にて候や。弓兒云。いぶかるはうべなり。これなるは望月皎二郎殿と申す御方なり。妾が身のうへのかなしき物語は。一席に盡しがたしといふ。皎二郎その尾につきて。吾主信濃國善光寺のほとりに。住れしよしを聞。我等兩人かしこに尋行。今は當國にうつり住るゝよしを聞。又當國にいたり。からうじてこゝに尋あたり。前程より門外にたゝずみて。樣子を窺しが。幼兒を手にかけんとせられしゆゑ。聲かけてとゞめたり。我等兩人わかき者同士。つれ立來つれば。も

しわだめきたることにて。さすらへしかと。疑ひ給はんが。少しもさることにあらず。仔細はゆる〳〵語るべし。且それは後にし。前に問べきは。吾主何等のせまりたることありて。幼兒を失はんとはせられしぞ。健助涙をはら〳〵とおとし。はづかしき光景を。御目にかけつるかな。かくおもひつめたる。我身のうへの物語る。又一席に盡しがたし。且姫君の御身のうへこそ氣づかはしけれ。はやく語り聞せ給へといふにぞ。弓兒涙さしぐみて。父渥美左衛門。管領持氏公の隱謀にくはゝり。足柄山にて賊の爲めに害せられし事を始めとし。家を沒收せられ。木曾路の雪に苦みて。衛守が身まかりし事。及び皎二郎が厚志により。自害をとゞまりて。夫婦の約をなし。助太刀をたのみし事まで。つぶさに語りければ。健助はこれを始めて聞。且驚き且悲み。心もくらみてひたすら哭けるが。おのれが身のうへをも語り出し。弓兒が母の情に。一命をたすかり。美濃國をのがれ出しより以來の仔細。且おのれ長き病を愁ふる事。妻が非命に死せし事。幼兒を失はんと思ひつめたる心の苦しさまで。とりあつめて。こまやかに語りければ。弓兒は。幼時わかれたる眞袖にあひ。來しかたのかなしきことゞもを語り。せめて心をやらんと。たのしみて來つるなれば。これを聞て甚だ力をおとし。小松が手をとりて。かるよき兒をさへうみしものをとて。悲歎の涙にむせかへりぬ。皎二郎も。父の敵を尋るため。旅寢に年をかさねつる仔細をかたり。いかなればかく。寄も集るも。皆薄命の者なるぞとて。

三人ともに身をくやみて哭ぬ。扨皎二郎かさねて。健助にいひけるは。吾主の物語を聞に。心せまるも理なれど。かならず短慮をいだされな。幸ひ我路費の貯あれば。貧苦の一ッはすくふに安し。病の事も名醫をえらびて藥を乞。心ざしかに保養せば。かならず平愈あるべし。弓兒が力とたのむもの。吾主の外になければ。一命を全して。仇を報る力をそへ給へ。我輩みなこれまでは薄命なれど。心長く時節をまたば。つひには宿志をとげて。再び面を起す時あるべし。豈皇天の憐みなからんやなど。いひなぐさめ。扨葛籠を見やり。さしあたりて。捨おきがたきは。妻女のなきからゝ。はやく用意し給へとて。金子を出してあたへければ。健助涙を流して恩を謝し。里人をかたらひて。棺を索。野邊のおくりをいとなみ。僧を供養してあとねんごろにとむらひ。此うへは病を保養し。姫君をたすけて。主君の讐を復し。聊亘恩に報へしと誓をなしければ。皎二郎弓兒。大に悅びて。さばらく此家にとゞまり三人相互に力を得て。求たのもしうぞおぼえける。夫は扨おき爰に又。大蛇太郎は。胎子を得て。鰕蟇に命じ。藥を調合せしめて。もちゐけるに。靈藥の奇特によりて。不日に平愈し。兩眼全く明になりければ。大に悅び。夜宴を催して。小賊等とゝもに祝酒をくみ。鰕蟇をよび出していひけるは。我此山巢は地獄にひとしく。一度こゝにおつる者。再活て歸りがたしといへども。儞幸ひにして。我難症をすくひたれば。其功を賞じて。前に約せしごとく。今夜家におくり歸すべし。儞は命つよ

き者なりとて。打笑ひ。且一盃を酌べしといひてあたふ。鰕蟇は毒蛇の口。猛虎の牙をまぬかるゝこゝちして喜び。おづ〳〵盃をうけて。酒をなみ〳〵とつがしめ。やがて傾んとしたる折しも。佛法〳〵となく鳥の音。山彦にこたへてちかく聞ゆ。鰕蟇耳を倚。松の尾の峰靜なる曙に。あなめづらしと。ひとりごちて。盃をほしければ。太郎聞とがめていはく。儞かの鳥を知るや。鰕蟇いはく。かの鳥は佛法僧には候はずや。太郎いはく。いかにもさかり。儞此山をいづくとかおもふ。鰕蟇いはく。やつがれ若かりし時。醫道修行の爲。普諸國をめぐりつるが。凡佛法僧の栖山は。高野山。松尾山。醍醐の峯。河内の杵長山。さては上野の迦葉山か。下野の黑髮山に限れり。やつがれ三四夜を過てこゝに來つれば。おそらくは此所。迦葉山か黑髮山なるべしといふ。太郎打うなづき。儞が推量にたがはず。此所は黑髮山なり。我儞に引出物とらせん。ちかくまゐれといふにぞ。鰕蟇は何の意もなく。ゐざり出てちかくすゝむ時。太郎つと立て刀をぬくよと見えしが。忽ち鰕蟇が頭ば。前にまろびおちぬ。太郎血刀をさし出して。小賊に血をのごはせ。此屍酒宴のさまたげなり。はやくとりすてよといひて。床の下に蹋おとしぬ。小賊等いぶかり。寨主かれをゆるして歸らしめ給ふよし。おふせられしに。今又殺し給ふは何ゆゑぞ。太郎いはく。我かれをゆるさんとおもひしが。かれ佛法僧の音を。聞知たるゆゑにゆるしがたし。昔曆應の頃。松ノ尾山の賊主。佛法僧一聲の爲に滅亡したる例あり。か

れも又口あり。いかでかこれをもらさざらんやといへば。小賊等これを聞て。太郎が思慮の深きことを感じけり。鰕蕉日ごろ貪欲の心深く。不義の財をむさぼりし。報によりて。今賊手に身を失ふ。惡の報は善の報より。速かなりといふ。常言も。理あるかな

優曇華物語卷之四下終

優曇華物語卷之五上

江戸　山東軒主人編

第十一段　皎二郎弓兒盂蘭盆の灯籠を見事

さてあるに。皎二郎は。健助が家狹して。住がたきにより。近きあたりに。廣空屋のあるを索め。健助父子をもこゝに移して。都て四人此家に住皎二郎貯の路銀を出して。萬事をまかなひ。名醫を迎て藥を乞。弓兒といふに。健助が枕方を離ず。心を盡して看病けるが。天の惠にやあらん。程なく平愈し常よりもなほ健になりければ。一齊に悅ぶ事限りなし。さかるに健助。おのが病のおこたるにつけても。兄衛守があへなき最期をなげきければ。皎二郎理におもひ。吾主かしこに行。せめて改葬し候へとて。金子を與へ。其所はさか〳〵と。よくいひをしへければ。健助はかさなる洪恩を謝し。たゞちに發足して。信濃國にいたり。その所を尋ぬるに。はや雪も消果て。一塊の土高き所あらはれ見えければ。こゝならめと。土を穿て見るに。果して衛守が屍あり。寒氣凝たる土中なれば。少しも腐爛せず。故の姿のまゝなれど。年ひさしく對面せざれば。死顏ながら。いたく年老たるさまを見て。いとゞ悲く。涙ながらに。

あたりちかき山寺に改葬して歸りぬ。扨健助。一頭の事をとげて少し胸あき。又一頭におもひけるは。かの狼どもは。我妻子の深き仇なり。盡く殺して憤をはらすべしとおもひ。弭いとみじかき弓に。獵箭握りそへて。矛を杖につき。山にいたる。素猶戸の業をなして。山の案内はよく知りつ。狼どものかくれをるべきくまくまを尋ねけるに。常々おほかりし狼どもの。只一隻も見えざれば。山越しに逃去しかといぶかり。日毎に出。遠き山々までも尋侘て。一日黒髪山に登り。とある谷川の巖に尻かけて。やすらひけるが。水上より朱碗一ッ流れ來るを見つけておもふは。人跡絶たる山中にかやうの器の流れ來べき理なし。もし此山奥に人家あるゆゑにやと怪みつゝ此日も又手をむなしうしてぞ歸りける。かくて又一日皎二郎。健助にむかひ。詞をあらためていひけるは。我敵を尋る身なれば。此所にのみとゞまりて。いたづらに月日を費やしがたし。陸奥のはてまでも。尋ねゆかまくおもへば。弓兒は權吾主あづかり候へ。我宿志をとげて後は。ともに力を合。渥美殿の仇をも尋出して打とるべし。我もしかへり打にもあはゝ。主弓兒を扶て。仇を報しめ候へ。もし又我敵より前に。渥美殿の敵を尋出さば。吾主打とり候へ。實父の仇を後にして。舅の仇を前にすべき道なければ。我宿志をとげざるうちは。力をくはへがたし。弓兒と我縁は互に本意をとげて後さだむべしと。心底をこまやかに語りければ。健助大に感じのたまふ所みな理にあたれり。主君の敵はやつがれ身を粉に碎きて

も尋出して打とり日ごろの洪恩にむくゆべし。素是我望所なれば。少しも心をつかひ給はず。只よく宿志をとげ給ひ。恙なき再會を惠み給へといふ。弓兒は傍にありて此事を聞理とはおもひながら。まばしのわかれも氣づかはしと。打ほれてぞ居たりける。皎二郎志か心をさだむるといへどもこのほどの雜費に用ゐて。路銀かろくなりければ。はるけき旅に赴むくに。かくては便なしとて。一ッには路銀をもとめ。二ッには古鄕の音信をとはんため。飛脚を雇て。肥後國につかはしけるが。遠き國なれば。速かに歸來べきにあらずと。心にもあらで。又まばらく此家にとゞまりけりかくて時光速にうつりゆきて。初秋の時にいたりぬ。此國にも年毎の七月十五日より廿四日までは。精靈の棚をかざり。家々にこれを祭る。又いろ〳〵の灯籠をつくりて。或はまつりの棚にともし。あるひは民家の軒寺院の佛殿にもともす。又寺〳〵には施餓鬼を修行し。村々には踊を催す。これなべて此頃の風俗にて。唐土の上元の佳節に似たり。これを見る人道もさりあへず。甚だ賑なり。健助も靈棚をかざりて。兄衛守妻眞袖が新靈をむかへけるが。皎二郎にむかひていはく。此節は所々に灯籠をともして。甚賑なり。今宵は姫君をともなひ。灯籠を遊覽し給ひて。このほどの鬱悶を慰め給はずやとすゝめければ。兩人その言にしたがひ。一ッには兩家の父母の靈をまつり。二ッには衛守眞補等が菩提をとはん爲。布施物などたづさへ。兩人連立て家を出。且村々の灯籠踊を見るに。聞し

にまさる賑ひなり。見物の婦女おほかれど弓兒は都のうちにすら。たぐひまれなる美女なれば。田舍女のひなびたる中に立まじりては。ことに目立て。これを見る人膽魂を失ひ。唯沙底をひらいて。金玉を見るこゝちせり。扨兩人は。眞袖を葬たる山寺にゆき。施餓鬼の法會にあひ。布施物をおくりて。諸精靈をまつり。寺中の光景を見るに。こゝにもあまたの灯籠をかけつらね。もろ〳〵の花鳥のかたちなどを。手を盡してつくりなし。一齊に火を點じたれば。あたりもかゞやきて。恰も白晝の如くなり。參詣の諸人。おしこりてこれを見。箇々細工の妙をほめて。餘念なき折しも。暴に一陣の狂風吹起り。灯籠を盡く吹けして。忽暗夜となる。諸人立噪て。あちおしこちおす紛に。弓兒皎二郎を見失ひ。こゝかしこをたづねまどひて。纔に一灯消殘りたる。灯籠の下をすぐる時。背後の方に人ありて。弓兒が襟をひしとつかみ。我汝等をとらへんとて。大に苦みぬといひつゝ。手巾を口にはませてものいはさず。餓たる鷹の雀を見つけたるごとく。襟首をつかみて引立ゆく。諸人騷動の中なれば。獨りとしてこれを知る人なかりけり。扨かの者弓兒を小脇にかいはさみてはしり。一ッの松林のもとにおろして息をやすめ。弓兒をにらみていひけるは。いかに賊女。汝我を見忘れつるか。我は信濃國の猪戸藤一といふ者なり。前の日爾等兩人。山中に迷ひぬるを憐み。內海鰕菴といふ。目醫者の家をかりて宿せしに。爾等盜人の手引をなして。あるじの鰕菴を捉へしめ。壁をやぶりて逃去り。

鰕菴が生死今において知れがたし。これによりてその罪我輩五人の者におよひ。國の守より嚴命せられ。日を限りて鰕菴が行方を汝等がゆくへをたづね。已に五人の者。四方にわかれ。近國に走りて。普探もとむ。もしたづね得ざる時は。我輩を罪せられんとのことなり。幸ひにして。且汝をひとり見つけたれば。一ッの手がゝりを得たり。何の遺恨ありて。鰕菴を捉へゆきしぞ且旅宿につれゆきて。白狀さすべし。おか心得よと。息ざしあらく詈る。弓兒はおもひかけざる事なれば。大に驚き。賊の手引おたるなどは。露ばかりもおぼえなきよしをいひとかんとすれども。ものいふことあたはざれば。只身をもだへてぞ悲みける。扨廻國の修行者の野宿するにやあらん。那裡の松林のうちに。紙帳をかゝげて。修行者顏をさし出し。こなたをうかゞ弓兒を詈るを聞つけて。鉦を打やめ。紙帳をつり。うちに鉦の聲聞えけるが。藤一がひ居るとも知らず。藤一一すぢのくゝり繩をとり出して手あらく弓兒をくゝりあげ。又小脇にかいはさみて。走りゆかんとするを。修行者つと走り出て。錫杖におこみたる刀をぬき。藤一を只一刀に斬殺して。弓兒を奪とり。鉦をはやめてうちならしければ。林のおくより小賊ども。長櫃めく物をかゝげ出て。弓兒を櫃のうちにおしいれ。これをになひて。みな一齊に馳去ぬ。修行者は貧佛のたぐひの。殘れる物をとりをさめ。藤一が屍を谷川に蹋おとして。おづかに鉦をうちならしつゝ行けり。此修行者に扮作たるは。乃是大蛇太郎なりけり。かくて太

郎は。弓兒を奪とりて。黒髪山にかへり。弓兒を櫃よりいださしめて。くゝり繩をとき。口にはみたる手拭をとらしめ。灯燭をてらしてよく見れば。おのれ年ひさしく戀慕つる女なれば。あまりのうれしさに。心頭突々と跳り。只あきれにあきれて。ものもえいはざりけるが。やゝ心をおづめ。小賊等をおりぞけていひけるは。婦人汝は四年前の某の月某の日。近江の國鳥籠の山において金鈴道人の入定をおがみたることありしやといふ。弓兒はいきたるこゝちもなかりしが。此ことを聞て大に怪み。おん身は何等の人なればそのことをおるや。いかにも妄おぼえあることなりといふ。太郎果せるかなと悅び。婦人我を見知りつるか。其時の金鈴道人は乃ち我なりといふ。弓兒益怪みて。太郎が顏をつれ〳〵と打まもり。おん身何ゆゑさるいつはりをいふや。金鈴道人は活佛におはしまして。童顏鶴髪とやらん。殊勝なる姿なり。おん身のごとくとは〳〵しき惡相の人。いかでか金鈴道人ならんやといふ。太郎打笑ひていはく。おもふもうべなり。金鈴道人の童顏鶴髪なるぞ我謀計の根本なる。ちかごろ世の人。金鈴の道徳をおたふにより。ひそかに文珠白椎寺の僧とはかり。我年若しといへども。白髪の髪を以て髪をつくりなし。道人の姿に打扮て。入定といつはり。あまたの布施物金銀財寶を奪ひとり。かねてぬけ穴をほりおきて。夜中にぬけ出折〳〵別人をいれて鉦をうたしめ。おもふまゝに諸人を欺きて。後には雨鉦の塚といふ名をさへ殘せり。その時汝。紅梅の色ときに。蜻蛉のとび

かふさまを摺箔におたる衣を着。諸人の前にすゝみ出て。我十念をうけたること。心におぼえあるべし。我其時汝が美麗なる姿を見て。深くめでまどひ。おぼえず手爐をとりおとして。ほと〳〵事をやぶらんとしつ。やがて入定の時にのぞみたれば。いかにともせんすべなく。只むなしく心をなやませしのみなり。いづくの誰といふことをだにおらざれば。尋ねもとむべき便もなく。せめて似たる女もがなと。あまたの婦女を盜とりて。山寨に養ふといへども。いかでか汝がごとき絶色にくらぶべき者あらんや。野花のながめにたらず。村酒の醉に赴なきが如し。おかるに此節は。盂蘭盆の時にて。おほく婦女の出る頃なれば。露ばかりも。汝に似たる女あらば。盜みとらんと。身を扮してみづからうかゞひありきけるが。偶かしこにて汝を見つけ。汝とは夢にもおらず。只よく似たる女なりとおもひ。うばひとりしが。はからず再會することと。誠是宿緣なり。我切なる志しを見すべしとて。一間のうちより。錦の手帕に包たる物をとり出て。汝此物におぼえありやとて見す。弓兒おづ〳〵これをとりてひらき見れば。おのれが手なれたる圓鏡なり太郎いはく。その鏡は入定の時汝が布施物におくりたる物なり。唯それを汝が保とおもひ。今にいたるまでひめおきぬ。我戀慕の情の深きこと。此一ッをもつて推量せよ。我今賊主となり。あまたの强賊をおたがへて。此岩窟にかくれ住。金銀財寶は心のまゝなり。汝今より心をかたふけて我妻となり。生涯の樂をきはむべしとて。さすがの强

悪も。愛慕の情に心よわり。ひたすらかきくどきければ。弓兒且おそれ且かなしみて。一言の返答もせず。唯聲をはなちてぞなきける。太郎そのけはひを見やりて。汝速かには胸もきはめがたからん。且今宵はやすむべしとて。とらはれの女どもをよび出し。此婦人をあばらく汝等にあづくるあひだ。心をつけていたはるべしと命じ。やがておのれも。ふしどにいりてやすみぬ。弓兒は女どもにいざなはれて。なく〳〵一間の房にいたり。心におもひけるは。我とても此所をのがれ出ることあたふまじ。彼に身をはづかしめられんより。寧自害してはてんにあかじ。これまで度々死をのがれしが。此度はまことに我命の限りなりと心をさだめ。身邊に刄物のなきをうれひけるが。傍より女どもいひけるは。おん身のかなしささぞなとおもひやらる。我輩もこゝにとらはれ來つる時は。縊ても死んものと。胸をきはめしが。此賊主これまであまたの女をとらへ來つるが。ながくとめおかざるよしをきゝ。命をまつたうして時をまたば。再古郷にかへる時節あらんと。おもひなほして。つらき命をながらへぬ。おん身もかならず〳〵氣みじかきことなど志給ひそ。天の憐みによりて。かれがはなちかへす時をまち給へといひてなぐさむれば。弓兒心のうちに。我においてはいかでかはなちかへさるべきとおもへば。いとゞかなしく。此夜はつひになきあかしぬ。次の日にいたり。太郎又弓兒を寢間によび出して。おどしつすかしつかきくどきけるが。俄に表の方さわがしく。女ども走り來て。小賊等爭

論を引出して。同士打いたし候。はやく志づめ給へと告て志りぞく。太郎折あしゝとおもひつつ。にくき奴原かなとつぶやき〳〵出ゆきぬ。弓兒はかたはらに人なきを幸ひ。此のひまに自害せんと。太郎が枕刀をとりけるに。見おぼえある刀なれば。目をさだめてよく見れば。我家の紋を鏤たるかざりありて。父左衛門鎌倉に下りし時。おびゆきたる刀にまぎれなし。さては父の敵はかの賊主なるか。かよわき力なりとも。女の一念は巖もとほすといへば。志ばしの命をながらへて。かれがやうすをこゝろみ。いよ〳〵敵にきはまらば。たばかりて刺殺すべしと胸をさだめ。日ごろ念じ奉る觀音菩薩。ねがはくは夢になりとも此事を。皎二郎殿健助等に。告させ給へとふしをがむ時に。はや太郎かへり來るとおぼしくて。足音あらくひゞきければ。いそがはしく刀をもとの所にすゑおき。さあらぬ顔して居たりけり

第十二段　眞袖が幽靈夫に告て仇を報しむる事

こゝに又皎二郎は。かの山寺にて弓兒を見失ひ。大にうろたへて。こゝかしこを尋けるが。つひにあはず。もし我より前にかへりもやしつると。いそぎまどはして家に歸。健助にとふに。いまだかへり給はずといふ。扨はいづくへゆきしぞ。道にまよひをるかと胸とゞろかる健助は狼に手ごりしたるうへなれば。大に驚き。長劔をおび。手槍を杖につき。明松をともして。獨

り家を馳出て見るに。星移斗轉じて。夜もやゝ更わたり。村〳〵の灯龍の光りもなく。見物の諸人も散失て。いと寂莫なり。扨かの寺ちかきあたりの山中をはせめぐりて。普執もとむるに。影だに見えざれば。物狂ひのやうに心を狂はしめ。又かの寺にいたりて見るに。高灯籠の火のみかすかに殘り。妻戀鹿の聲。をちこちに聞えてものさみしく。尋ぬる人のまよひをるべくもおぼえねば。ほと〳〵力おち墓所のかたはらなる。骨堂の椽に尻かけて。阿伽桶の水に喉をうるほし。志ばらく息をやすめける折しも。悋哉堂中より。一陣の冷氣を生じて。身うちに冷とほるとおぼえしが。叢にすだく虫の聲かとあやまつばかりのほそやかなる聲して。まうし〳〵とよばふ。こは悋やと背後を顧れば。堂中のほのくらき所に。志ろき衣を身にまとひ。頭の髪はいと黒き女の姿。おぼろげにあらはれて。さめ〴〵と泣居たり。健助はもし姫君にやと悋みつゝ。消かゝりたるみあかしのかげにすかして見れば。妻の眞袖なれば。汝はうつせみの世の人なるに。何ゆゑこゝにはあらはれ出しぞといふ。眞袖ひたすら泣て。志ばしはものもえいはざりけるが。志ろき糸のごとくほそりたる手をあげて。涙をかきはらひ。息もたゆげにいひけるは。妾おん身に告まうし度ことの侍りて。閻王に願ひ奉り。志ばしのいとまを給はりて。こゝまでは詣來つ。これ別の事にあらず。黒髪山の岩窟にかくれ住賊主に。大蛇太郎といふ者あり。かれはすなはち犬太郎玄海とて。皎二郎殿の父母を害し。又足柄山において。主君渥美

殿を殺したる賊なり。姫君も今宵かれが爲に捉れて。岩窟のうちに居給ふ。かの太郎三十餘人の强賊をまたがへて。勢ひ猛き賊なれば。かろく見なし給ふことなかれ。かれが住岩窟のほとりには。佛法僧おほく栖ば。その聲を知るべに尋行。はやく打とり給ひて。姫君をもすくひ出し給へ。又妾が非命に死したるは。狼の仕業にあらず。黒髪山の麓。曠原のうちに一ッ家をつくりて住。野猪嫗といふ者。妾を殺して胎内の子までをとりぬ。願くはかれを殺して我恨みをはらしてたべかれも又。かの太郎が徒中の賊婆なり。かしこにいたり家の棟に。赤子のはひありく家あらば。かれが住家とおもひ給へ。これ凡人の目には見えざることなれども。妾かゝる身になるべき志らせにや。前の日。月かげにうつるを見たり。おん身には妾が靈を通じて見せまうさん。又かれは醜なり。人たがへなし給ひそ。狼どものおん身の目にかゝらざりしも。罪なきものなれば。妾が靈を通じてたすけしゝ又かの太郎。さきつころ目をやみて。ほと〳〵盲目にならんとしつるを。信濃の國なる。内海鰕菴といふ目醫師を捉へて療治せしめ。妾が胎内の子を藥となして。不日に愈たり。鰕菴もつひにかれが爲に殺されぬかれもし盲目とならば。復讐のかひなかるべし。盲人を打て仇を報るは本意にあらず。胎内の子不幸にして。非命に死すといへども。かたきの眼病を癒したるは。主君に對してすこしく忠あり。志かも男子にてありしぞや。人死すれば靈なりといふにたがはず。妾よくこれらのことを知りつるゆゑに。告まう

すなり。今妾が住國のおそろしきこと限りなし。身はきえもやらで。炎のうちにあかしくらすもあり。又出もやらで。雪氷にとぢられておきふすもあり。あるは又牛頭馬頭のおそろしき者どもつどひ來て。身をきだ〳〵にくひさくもあり。又惡鳥に眼を啄るゝもあり。毒蛇に身を纏るゝもあり。又にかゝりて死せしものは。刀山地獄とて。垂氷をそらさまに植並たる如き劍の山をおそろしき者どもの。くろがねの笞をあげておふに。罪人はせんすべなければ。なきさけびつゝ。はせ上りはせ下りして。苦むことなるが。閻王妾が貞節を憐み給ひて。無佛世界能化の導師。悲願金剛地藏菩薩の寶處にをらしめ給へば。さる苦みもなく。只目に見るのみなり。やがてぞ極樂國におくりやらんとの給ひき。さてかく申すうちにも。閻王のまたせ給ふとて。黄泉の使ぢきりに催せば。今はかへりなん。妾冥途にありても。只忘れがたきは小松がことなり。母なき子なれば。別に憐みをくはへ給ひてよとて。又さめ〳〵となきけるが。忽ちかげろひのごとくきえうせて。常香の烟のみぞ立のぼりぬ。健助は夢の醒たるこゝちし。殘りおほげにあとをながめて泣けるが。妻の亡靈委細を告て。事の分明なるうへは。猶豫すべき所にあらず。我前の日かの山にいたり。朱碗を見つけて恠みつるが。賊の住家あらんとはおもはざりき。片時もはやく此事を。皎二郎殿に告まうさんとて。いそがはしく走りて家にかへり。皎二郎にぢか〳〵とかたりければ。皎二郎をどり上りて悅び。たゝちに馳むかはんと飛立を。やれはや

まり給ふなといひて押とゞめ。かれ三十餘人の强賊をぢたがへて。こもるときけば。かろ〳〵しくむかひては。ことをあやまち申すべし。やつがれ且腕さだめに。かの惡婆を殺して。門出の血祭をいはひ。よく胸をおさめてかしこにはむかふべし。ぢばしまたせ給へといひつゝ。身ごしらへして。飛がごとくに馳行ぬ。さてかしこにいたりて見れば。荒々たる曠原の月。朦朧とくらくして。物のあやめもわかず。風騷々と亂草の上を吹わたりて。いと物凄き夜なり。こゝにやとたづねゆき。やう〳〵一ッの小家を見つけ。近くよりて見れば。家の棟に。血に染たる赤子どものなきさけびつゝ。はひありく姿。さやかに見ゆ。又門ちかき古井のうちより。一道の陰火閃々と燃あがりぬ。妻のをしへし心あてはこれならんと。壁のくづれたるひまより。さしのぞきて見れば。白髮の老女高鼾して臥居たり。便宜よしと戸を蹋やぶりてうちにいり。簀子をひし〳〵と蹈ならせば。老女目を醒して起上り。何等の奴なれば夜中狼藉をなすや。我を誰とかおもふ野猪婆とて。强氣の譽高き女なるぞ。おのれ目にもの見せんと詈つゝ。菜刀をさかしまにとりて。立むかふを見れば。畸なり。健助果して此奴なりとおもひ。ものをもいはず忽脚を飛せて。のけさまに蹋倒し。のんどぶえをぢかとおさへ。我は爾が爲めに殺されて。胎內を發かれたる女の夫ぞ。我に告たる者ありて。汝が仕業といふことをよく知れども。汝が口より白狀するを聞ざれば。明白ならず。速かに白狀せよ。もしあらがひていはずんば。

身の皮をさか剝にして。肉をきだ〳〵にきざまんずるぞと。息卷あらく責。膽ふとき老嫗なれば。健助をはねかへさんと。身をあせりけるが。膽氣烈火のごとき勇士の力にひしがれて。苦しさにたへず。つひに眞袖を殺し。胎子をとりて。大蛇太郎が眼病の藥にもちひたる始終を。詳らかに白狀し。すこし手をゆるめ給へと。くるしげにいふ。健助なほつよくひしぎて。又大蛇太郎が仔細をとひければ。老嫗いはく。かれが昔しは知り侍らねど。はじめの名は犬太郎玄海とかいひつるよしを聞ぬ。足柄山にて渥美左衛門とやらんを殺したる事は。我よくこれを志れりとて。又その始終をつばらに告。今宵しも太郎。美女を盜來て。志ばらくこゝにやすらひ。酒などたうべて。山にかへりぬと。とはぬことまでを語りて。唯一命をたすけ給へと詫にけり。健助なほ太郎が隱家の案内を。くはしくとひをはり。皎月のごとき眼をいからし。奔雷のごとき聲をいだしていひけるは。汝聾にあらずはよく聞かし。明なる所には王法あり。暗ところには神靈あり。大罪を犯せる者。いかでか罰をまぬかれんや。我妻子を殺せし報。今おもひ知らせんずるぞと詈りなぶり殺しはいかにして殺さん。爪をはなち髮をぬかんもひまいる業なりと。あたりを見まはし。ありあふ杵を右りにとり。左りに髮の毛をつかみ。ちうにさげて外のかたに出。ひらみたる石のうへに頭をのせ。杵をあげて。餅を搗ごとく。はじめよわく漸々につよく搗ければ。老嫗は苦しさにたへず。手脚をもがきて泣さけぶ。健助かれを飽までにくるし

しめ。つひに力を極ててづよく搗ければ。忽兩眼飛いで。頭微塵にくだけて死てげり。この時うしろの方に。あなこゝちよや。今ぞ恨みははるけつといふ聲す。健助身をひるがへして。見れば。叢のうちより眞袖が姿。まぼろしのやうにあらはれしが見るうちにきえうせぬ。健助おもふまゝに。讐を復し。妻の物語といひ賊婆の白狀といひ。網千渥美兩家の仇は。大蛇太郎にきはまりぬとて悅ぶ折しも。松の梢より。あやしげなるあら男飛下り。やをらぬきあしまて。健助がうしろにまはり。刀をぬきてだまし打にうたんとす。健助地上にうつる人影を見つけて。忽身をひるがへし。手ばやく刀をぬいて。只一刀に斬伏たり。此者はこれ誰ぞなれば。かの老嫗をたすけて。眞袖を殺さしめたる小賊なり。此夜老嫗と酒をくみかはし。いたく醉て。此家の暗き所に臥居たるが。健助が猛き勢ひにおそれて逃出し。遠く走らばかへりてあとを追れんとおもひ。松の梢に上りて始終を見聞し。大蛇太郎をつけねらふ者と知りて。だまし打にせんとし。かへりて健助が爲に殺れぬ。乃ち是惡報の速にめぐり來つるものなり。ときに曉ちかくなるにやあらん。森の烏飛わたりて鳴こゑするに。健助夜あけて人に見とがめられなば。ことむづかしとおもひつゝ。いそがはしく走りて家にかへりぬ。さて賊婆を殺したるはたらき。又かれが白狀の委細を。皎二郎にかたり。志ばらく心氣をやしなひて。心志づかに身上をとゝのへ。もし山中にて飢たる時の爲とて。靈棚に供じたる團子をとり。布の袋にをさめて。健助

が腰につけ。小松をば隣家にあづけおき。兩人龍の雲を生じ。虎の風を起す勢ひをなして。黑髪山に馳行けり。兩人が扮作をいはゞ。品ことにおほからめど。爰にかいつけんはくだ〳〵しかるべし

優曇華物語卷之五上終

優曇華物語卷之五下

江戸　山東軒主人編

第十三段　金鈴道人因緣を說事

かくて皎二郎健助兩人は。ほどなく黑髪山の麓につきぬ。抑此山は希有の高山なり。うば玉の黑髪山を朝越て。木の下露にぬれにけるかなと。ふるき歌にもよめり。根は地角に盤り。頂は天心に接る。遠觀は雲痕を磨斷し近看ば月魄を併呑す。深嶺幽谷のうち。常に雲霧をこめて。輿の限りを去らず。天狗どもおほく栖とて。杣人柴刈のたぐひすらおそれてかよはす。人跡たえたる山なればのぼるべき道だになし。佛法僧。慈悲心鳥などの。棲をもつて。山深きこと推て知るべし。健助は膽ふとき男なれば。これまで折〳〵此山に入りて。獸をとりたることあり。山口の案內はすこしく知るといへども半山より奧にはのぼりたることなし。ゆゑに只妻の敎へし。佛法僧の聲を去るべとし。前頃朱碗のながれ來し。谷川の源をきたひてはせのぼり。林木原いと深く石群といしく立かさなりたる處をすぎ。尾花刈萱ふみわけつゝ。木の下露に袖ひちてゆくに。いまだ初秋なれど。寒氣凝たる深山なれば。山越の風いとさむく吹わたりて。笹のく

まびなりさやぎ。谷の水音はるかにきこゆと。おもへばめぐり下りては。殆げなる岨をつたひ。峯の松風は雲井にと。おもへばめぐり。上りては。岩根はひいでたる所を越。これよりあふげはまかべなす峰あり。磐石を階にふみ。からうじてのぼること凡三百歩。姫子といへる松の延わたりて。祖をつゝみ。霧もる日に映ずれば。衣を緑に染なせり。岩壁高くそびえ。瀑布なのめに飛て。恰もゑがけるごとき。好景なれども。心いそがはしければ目もとゞまらず。ひたすらのぼり。又くだること數百歩にして。大なる谷川のほとりにいでたり。兩人手をとりあひ水中にいでたる。岩のかしらをふみて渡りけるに。皎二郎滑かなる岩をふみあやまりて。のけざまに倒れ。ふかき溪水のうちにおちてけり。健助驚き。救あげんとせしが。急流なればはるかに流れゆきて。ほと〳〵溺死んとす。時にあまたの猿。藤葛にとりつきて谷に下り。且一隻の大猿。皎二郎が手をとりて。岩のきはに引よせければ。その餘の猿ども。襟をとり袖をとりて。つひに皎二郎を。岩の上に引あげたり。此ひまに健助。岩を飛越〳〵して。此所にはせまゐり。皎二郎が身に恙なきを見て。ため息つきて悦びければ。猿どもはみないづくへか去りけり。兩人は嶮き道を過來つれば。息なづみ足なへぎて堪ざるうへに。飢にさへ臨たれば。健助携たる。團子をとりいだすばやと腰をさぐるに。袋のくちとけて物なし。かのいそがはしく走りたる時。おとしつるか。こは何とせん。かく飢ては敵にむかふに力なしと。心をわづらはしめける所に。

いづくともなくあまたの鵠群來て。健助が失ひたる。團子をくはへ。兩人が前にはこびおきて。つひに空高く飛去りぬ。兩人大に喜びこれをうちくひて。飢をまぬがれ。氣力再び盛なり。皎二郎俄然としておもいあたり。健助に語ていはく。我亡父過つる年洪水の時。猿と鵲をたすけたることありしが。今我等が危急をすくひしは。その時の猿鵲にて。友をあつめ。そのかみの恩を報たるならん。やさしくも忘れざるかな。鳥獸すらなほかくのごとくなるに。かの大蛇太郎はおなじ時。溺死とせしを。これも亡父に一命をたすけられたるに。その恩人を殺して讐敵となること。鳥獸にもはるかにおとりたる惡人なりとかたり。兩人ひたすら猿鵲の所爲を感じけるをりしも。前面の霧深きうちに。人の聲あり。四句の偈をとなへて道

天行二洪水一涙滔々　遇レ物相援報亦饒
只有二人來一休二顧問一　夙恩到底敵讐招

と聲たかやかにとなふ。皎二郎これを聞。心におぼえある偈なれば。大に怪み。かく人跡たえたる山中に。かの偈をとなふるは。何等の人にやと。あふぎ見る時。忽霧はれてあきらかなれば。なほよく見るに。前面の岩上に草座をまき。童顔鶴髪の道人。金鈴をとり。端然として座し給ふ。是乃ち過つる洪水のきざみ。水災を告給ひし。聖僧に疑ひなければ。皎二郎いそがはしく。地上にふして禮まひけり。道人見やり給ひ。我此所にありて儞をまちぬ。我そのかみ水

災を告て。汝等一家の者を救たる時。今となへたる四句の偈をさづけたるに。汝が父慈悲深きあまり。偈の意にもどひて。犬太郎をたすけ。果してかれが爲め非命に死す。素是宿世の因果なれば。いかんともすべからず。楊生が犬。楊寶が雀のたぐひ。鳥獸の恩に報たるためしすくなからず。かへりて人は仇を以て。恩に報る者おほし。顧問することなかれといひしは。是なりとの給ふ。皎二郎恭いひけるは。やつがれ曾凡慮に疑ことあり。かしこけれどとひ奉る。やつがれが父母は深く佛を敬ひ。專ら慈悲を好み。おほく陰德を積といへども。露ばかりも善報にあはず。人を救て其人の爲に害せられしは何ぞや。天理もし如此ならば。世に人をすくふ善人はあるべからず。積善の家には餘慶あり。天道は善に福し。淫に禍すなどいへる語は。いつはりにて侍るや。此疑とけず。ねがはくは示し給へといふ。道人莞爾と打ゑみてのたまはく。汝すゝしく儒道の理を曉すといへども。いまだ佛道の無量なる敎を知らず。太史公が伯夷叔齊を憐みて。天は是歟非歟と疑たるに似たり。いかでか天に非理あらんや。夫善惡因果經に。善を行て禍を致あり。惡を作て福利なるあり。受報の不同なるは。皆先世の用心等しからざるによる。是以所受。千差萬別なりといへり。又傳燈錄に闇夜多と云者。鳩摩羅多尊者に遇。我父母素三寶を信ずといへども。常に疾瘵に縈。營作する所皆意の如くならず鄰舍にひさしく旃陀羅をする者あり。彼は身常に勇健にして。所作みな和合す。彼は何の幸ひにして。我

は何の罪ぞと問ければ。尊者曰。何ぞ疑にたらん。且善惡の報に三時あり。凡て人は但。仁は天。暴は壽。逆は吉に。義は凶なるを見ては。すなはち因果なく。罪福むなしといへり。影響相隨て。毫釐もたがふことを靡ことを志らず。縱百千萬刼を經とも。亦磨滅せずと答ければ。闇夜多これを聞て。頓に疑を釋たるよしを志るせり。汝が疑念も又このたぐひなり。三世因果のことわりを曉ざれば。志かおもふもうべなり。抑汝が父母は。前生において大に隱惡を犯せる者なり。前世にて其罪あらわれざるにより。今生にむくい來て。汝が家三代盡く非命に死し。つひに血すぢをたやし。泥犁地獄に墮落して。ながく呵責の苦患をうくべきはづなりといへども。汝が父母今生において。おほく陰德を積ぬる功によりて。其身は非命に死すといへども。今已に天堂に生れて。無限の歡樂をきはむ。志かのみならず。三代におよぼすべき罪を滅したれば。汝より志もつかた子孫にいたるまで。福利滿足意のごとくならん。これまつたく汝が父母。今生積德の功。むなしからざるゆゑなりと示し給へば。皎二郎忽ち日ごろの疑をとき。胸中の雲はれて明月のかゞやき出たるこゝちしてけり。道人かさねてのたまはく。此山の賊大蛇太郎といふは。すなはち犬太郎玄海なり。弓兒も彼にとらはれて窟岩にあり幸ひにして。身をはづかしめず。まつたく貞節の德なり。かの賊我姿を似せて入定といつはり。おほくの寶をむさぼりつれば。我爲にも佛敵なり。かれが罪惡今日にせまり。汝等に打るべき時いたれり。志

かりといへども。かれ三十餘人の強賊をまたがへて。いきほひ猛烈なれ。たとひ汝等。兩頭六臂ありとも。敵することかたからん。彼等今岩窟のうちに酒宴をもよほしてあれば。今一時を過さば盡く醉伏べし。其油斷を襲て打ば。勝利まつたからん。此所より凡三百歩をゆけば。彼等が往來する間道あり。それよりさきは行に安く迷ふべき道にあらずと。こまやかに示し給ふ。時にはるかの峯のあたりに。佛法僧の鳴聲あり。こだまにひゞきてちかく聞ゆ。兩人これを聞て。眞袖がことばにたがはずとおもひけるに。道人あふぎ給ひて。我國はみのりの道のひろければ。鳥もとなふるはとの給ひつゝ。杜杖をとりて空になげ給へば。たちまち一朶の白雲と化し。くだりて岩をつゝむ。道人はすなはち雲中にかくれいり給ひ。只金鈴の音のみひゞきて。雲はやゝ高くのぼり失ぬ。兩人はあとをふしをがみて。感涙をおとし。敬のごとくまばし息て。氣力を養ひ。皎二郎は濡衣をまぼりなどし。時の過るをまちけるに。ほどなく日もくれ果て。夕月夜の光りあきらかなれば。時刻いたれりいざはせむかはんとて。小柴高菅ふみわけつゝ。山深くのぼりければ。果して一條の間道あり。兩人心うれしく。ひたすら走りゆきてつひに岩窟のほとりにつきてけり。向上れば萬仞の青壁劍を削り。直下ば千丈の碧潭藍に染り。岩窟は廣大の自然窟にして。石門をきびしくとざしたれば。打いるべきやうもなし。兩人彼此をめぐりて。便宜をうかゞひけるに。はるかの岩上に少しの空なる所あり。かしこよりまのびいらん

と。蔦葛にとりつき。岩の尖を階にふみ。からうじて門内に飛下り。まづ樞をうちやぶりて。扉をおしひらくに。一箇としてとがむる者なし。折こそよけれと深くすゝみいりて見るに。焚すてたる篝火かすかに消のこり。そこら杯盤をとりちらし。數十人の小賊等。いたく醉たるとみえて。高鼾して伏居たり。兩人床の上にのぼり。簀をひし〳〵とふみならしければ。小賊等睡りを醒し。夜打のいりたるぞ。みな目をさませとよばゝり。弓よ槍よと大にうろたへて。立噪といへども。みないたく醉たるうへなれば。踉々蹌々として物の用にたゝず。皎二郎は壺斬の名劍を打ふり。健助は槍をまはし。みだれたちたる衆賊のうちに馳いりて。こゝに斬伏かしこに突とめ。四面八方をはせめぐり。蜘手十文字にかけちらし。いきほひたけく戰ければ。小賊等敵することあたはず。右袈裟左袈裟に。斬るゝもあり。胸板を突とほさるゝもあり。から竹割に斬れて。兩段にわかるもあり。吭を突れて。のけさまに倒るゝもあり。腰車を斬はなさるゝもあり。頭を立破にわらるゝもあり。暫時に十四五人打れて。死人の山をなし。鮮血の川をなせり。殘れる賊等も。過半手を負たれば。防戰ことあたはず。秋葉の暴風にやぶられ。春花の猛雨に戕るゝがごとく。皆ちり〳〵に逃去りぬ。彼等をいくたり打取とも。益なしとて追ゆかず。皎二郎與の方にむかひ。大蛇太郎はいづくにある。はやく出て勝負を決せよ。かくいふ者は網干兵衛が一子望月皎二郎なるぞと。聲たかやかによばはりければ。やがて大蛇

太郎。惡龍の深淵を出。猛虎の幽洞を出るごとき勢ひをなして。一間のうちよりをどり出。狼藉をなすは何奴かとおもひしに。皎二郎にてあるか。我沈酣熟睡のうちに。小賊等を打せたるぞ安からぬ。いで〳〵つかみ殺して。肝なますにつくらんずるぞといひて。頭の髪は上さまにして。みだれたること蓬のごとし。目大にしていなびかりのごとく光り。鼻をふきいからし。牙をかみ。髪髭をそらしてぞ立たりける。げにこれ盗跖があれたらん勢ひは。かくぞあらめとおもはる。皎二郎小をどりして悦び。めづらしや犬太郎。汝がゆくへをもとめんため。碎身粉骨千辛萬苦たとへいはんに物なし。やうやく時いたりて今あふこと。盲龜の浮木を得。優曇華のひらくを見るが如し。恩人といひ養父母といひ。汝が爲には天地とひとしき者を。殺害した る大罪人。いかでか天罰をまぬかれんや。速かに勝負を決せよとよばはる。健助いはく。汝足柄山にて。渥美左衛門を打たること。おぼえあるべし。我は乃ち渥美が家士來海健助といふ者なり。昨夜汝が爲にとらはれたる婦人は。左衛門が娘なり。又汝が眼病の藥の爲めに殺された る女は。我妻なり。主君の敵妻子の讐。萬段にきざみて恨をはらさん。覺悟せよとぞよばゝりける。太郎雷のやうなる聲をして。かや〳〵と打笑。汝等此岩窟にいたれるは。夏の虫火を撲焔を惹て。みづから身を燒に異ならず。正に是汝等が運命の盡たるなり。いで〳〵反擊にすべきぞ。觀念せよと。ほざきにほざいて。力足を蹈ならし。長劍をぬきて。只一刀ときりかけた

り。皎二郎のぞむ所ぞと。刀をまじへて相鬪。一來一往一去一回。鬪已に三十餘合におよぶといへども。いまだ勝負をわかたず。健助は鬪をあらそはずきりへにありて。もし皎二郎危く見えば。相たすけんと。槍をかまへ眼をはなさず見居たりけり。太郎は身材六尺に過て相貌凶惡なり。皎二郎は女びたる風流士なり。立ならびては。餓たる虎の前の羊羔のごとく。いと殆げに見ゆるといへども。皎二郎が打太刀は盡く法にかなひ。ことに早業の達人にて。身のかろきこと飛鳥の如く。右りに避左にひらく身のはたらき。太郎が眼に見とむることあたはず。太郎は悍力比類なしといへども。劍法は深く熟せざれば。太刀すぢやゝみだれぬ。ときに皎二郎。ひとつの空所を見。呀と一聲さけびて打太刀を。太郎うけ損じて。肩尖を斬こまれ。大木をたふすがごとく。尻居に撞とたふれたり。皎二郎ちか〳〵とふみこみて。をがみ打にうちけるが。太郎居ながら手ばやく。席薦をとりのけて。床の下に飛入ければ。皎二郎が刀は空を斬る。健助太郎をとりにがすまじと。つゞいて床の下に飛入て見るに。こゝに一ッのぬけ穴あり。太郎は已に穴のうちにいりて。ゆくへ志れずなりにけり

第十四段　鍛冶橘内ふたゝび女兒に遇事

かくて兩人つゞいて穴にいらんとせしが。穴のうち暗々として。深淺をはかり知らざれば。容

易にいることあたはず。かくばかり辛苦して。偶敵にめぐりあひ。本意をとげずしてとりにがしつるは。何たる不運ぞ。日月は我輩がためにはてらしたまはぬかといひて。大に歎ける時しも。一朶の白雲空にあらわれ。雲中に金鈴の音ひゝきて東の方にゆく。兩人これを屹と見て。まさしく是はかの道人我輩を。みちびき給ふならんとて。外のかたにはしり出雲のゆくかたにつきてゆきければ。つひに岩窟のうしろにめぐり出たり。此時月の光ります〳〵あきらかにて。恰も白日の如し。さてかの白雲は。はるかむかふの峰の上にとゞまり。ほばしきてきえうせけるが。忽ち大蛇太郎峰の頂にをどり出。こなたを見やりてあざみ笑ふ。皎二郎これを見て。おひゆき打とらんと心をあせれども。深き谷をへだてたれば。翼なくてはいたりがたく。只拳をにぎり。牙をならして。身をもだゆるのみなり。時に健助携たる。二所藤の弓の握太なるに。たかうすへの尾の矢をつがへ。箆かつぎのうへまで引かけて。暫かためて丁と放つ。その矢あやまたず。太郎がむなさかを箆深にぐさと射とほしたり。一箭なりといへども。屈強の矢坪なれば。何かはもつてたまるべき。忽ちさかしまになりて。谷底におちてけり。皎二郎身をおどらせて喜び。誠に希代の弓勢かなと賞嘆し。兩人いそがはしく谷底にはせ下り。火把をふりてらして。彼此をたづぬるに。太郎が屍溪水のうちにあり。引あげて見るに。岩に打れたると見えて。頭くだけ烏珠とびいで。鼻歪腹やぶれて。五臓六腑を出し。手足の骨盡とく折て。恰も

斷線偶戯の如し。兩人これを見て。あなこゝちよき死ざまかなとて。悦びあへることかぎりなし。皎二郎千辛萬苦してつひに仇をむくい。共に天を戴ざるの讐にたがはざるも。まつたく至孝の德なるべし。おもふに犬太郎洪水の時。溺死んとせしをすくはれたる。恩人を殺して讐敵となり。今又死て屍溪水の裏に漂たるは。因果覿面の理。毫釐もたがはざる所なり。天理彰々惡人はおのづから惡報あり。豈怕欽ざらんや。彼が出生の地。筑前福岡の海中に。常に風波のあらき所ありて。屢々渡船をそこなふ。これを玄海ヶ灘となづけ。彼が暴惡のおほく人を戕たるに比して。後世の戒とし。且千歳の後までも人の憎みをうけしむるとなん。さて皎二郎大蛇太郎が首を打おとしてたづさへ。いざこれより弓兒をたづねいださんとて。兩人ふたゝび岩窟にいたりけるが。弓兒はさきつかたより石門の邊に出て。兩人をまちけるに。折よくいであひ。互に恙なき躰を見て心を安んじ。皎二郎太郎を打とりたる。はたらきの始終をかたりて死級を見せければ。弓兒は只喜びに堪ざりけり。扨弓兒小賊等はみな逃去て一人ものこらざれば。心をゆるして疲をやすめ給へといひて。湯をはこびて吭をうるほさしめなどし。昨夜かの山寺にて皎二郎を見失ひ。獦戸藤一に捉られ。太郎奴奪れて此岩窟にいたりたる事。太郎がそら入定の仔細。父左衛門がおびたる刀を見つけて。敵なることを知りたる始終をつぶさにかたり。かの刀を出して見せければ。皎二郎健助はかはる〴〵。眞袖が靈の告るによりて。よろ

づの事を詳に知り。悪婆を殺して仇をむくひ金鈴道人に遇て示しをうけたる事まで。こまやかにかたり。互に恙なき再會を喜びあへり。志かるに皎二郎。父母の法名を志るしたる。位牌を出して岩上にすゑ。太郎が死級に刀をそへて手向。地上にひざまづき禮たゞしうして云。父母尊靈ともにきこしめせ。やつがれ今敵犬太郎を打て死級をさゝげ奉る。又はからず御かたみとなりし。壺斬の刀をそへたれば。靈魂みづから手をくだして。恨をはるけ給へ。南無幽靈頓生菩提。阿彌陀佛〳〵ととなへて。志ばらく伏をがみ。さて死級をとりて健助にあたへ我志は已にとげつ。このうへは弓兒が宿志をもとげ志め候へといふ。健助心得侍りとてこれをうけとり。弓兒とゝもに渥美左衛門が法名をとなへて伏をがみ。死級を地上におき。左衛門がおびたるかの刀をぬき。弓兒にもたしめておのれ手をそへ。死級を梨破に斬破て。志をとげにけり。弓兒喜びにたへず。再び又亡父の法名をとなへていひけるは。健助家の掟をやぶりて。罪を犯せしといへども。かれが忠義のあつきによりて。今仇をむくひぬれば。こひねがはくは彼が功勞を賞し給ひ。前日の罪をゆるして。もとのごとく君臣の誼をむすびかへさせ給へといひて伏をがみ。健助にむかひ。亡父汝が罪をゆるし給ふ志るしに。おび給ひつる此一腰をとらすべし。かたみとも見よとて與へければ。健助欽てこれをうけ。弓兒が深き情を感じて。涙に袖を志ぼりけり。かゝる折しも。とらはれの女ども走り出。我々は太郎が爲めにとらはれたる者ども

なり。何とぞ故縛にかへし給はれとなげく。皎二郎これを聞。心安かれ皆それ〳〵の家におくりかへすべしといへば。女どもはひたすら悦びあへり。かくて皎二郎健助兩人。おくふかくいり。太郎が貯おきたる金銀を扶出し。盡とくわかちて女どもにとらせ。衣服雜器のたぐひはその儘にすておき。大把をとりて家に火をはなちければ。折ふし山越の風はげしく吹て。暫時のうちに灰燼となる。ほどなく志のゝめの空あかくなりゆけば。いざ籠にくだらんとて。健助は弓兒をおひ。皎二郎は女どもをわて。かの間道にかゝりてくだりければ。のぼりたる時の難難にかはり。纔のあひだに麓につき。中禪寺の山にのぼりて觀音を拜し。志ばらくこゝにやすらひぬ

第十五段　橘内が母年賀を祝事

その時むかひのかたより。夫婦とおぼしき旅人。山駕籠のごとくつくりたるものに。老女をのぼし。兩人してこれをかゝげてのぼり來。此三人の者すべて笈弦を着。觀音の詠歌といふものをとなへつゝ來れば。三十三所の觀音。巡禮の者とは見えぬ。かの者ども堂上にのぼり。皎二郎等女まじりにこぞり居るを見て。老女をかたはらにおろしおき。それなる婦人のうちに弓兒といふはなきや。もしあらばたづねたき仔細ありといふ。皎二郎いぶかり。志かいふは何等の

人ぞ。いかにも此うちに弓兒といふ者ありといふかの者どもこれを聞。果してたがはずといひつゝ。兩人ともにはしりより。いづれが弓兒なる。はやく遇たし見たしといひて。婦人のうちをいそがはしく見まはす。健助兩人をつきのけ。汝等は物狂ひにや。何にまれあやしげなり。まづ其人をたづぬる仔細をかたれといひてにらまへければ。かの者どもやゝ心つきたるさまにて。俄に腰をおり。もみ手しつゝいふは。我等心いそがはしきまゝ。仔細をいはざれば。あやしみ給ふもうべなり。抑やつがれは。近江の國滋賀の山里に住。鍛冶の橘内と申す者也。これなるは我妻にて名を小雪と申す。駕籠のうちなるはすなはち我母なり。我四歳になる女子ありしが。十五年以前。鷲にとられて失たれば。悲さやるかたなく。愁にまづみて居たる折しも。童顔鶴髪といふにやあらん。面は童の如く髪髭は雪よりもまろく。凡人とは見えざる旅僧。鈴をならして我門にたゝずみ給ふにより。うちにむかへ奉りて。兒を鷲にとられたる物語し。菩提をとひ給はれと願ひしに。旅僧我等夫婦の相を見給ひ何やらん呪文をとなへ眼をとぢて。まばし念じ給ひ。よし〳〵汝等愁ふることなかれ。其兒は死せずして富人にひろはれぬ。今より十五年を過なば。再びめぐりあふ時あるべしと告て去給ふにより。唯これを露ばかりの力となして年月をおくり。已に十五年を經て。今年にいたりぬれば。よろづに一ッかれにめぐりあふこともあらんか。もし又世になき者ならば。菩提の爲めにもなれかしとおもひ立て。西國三

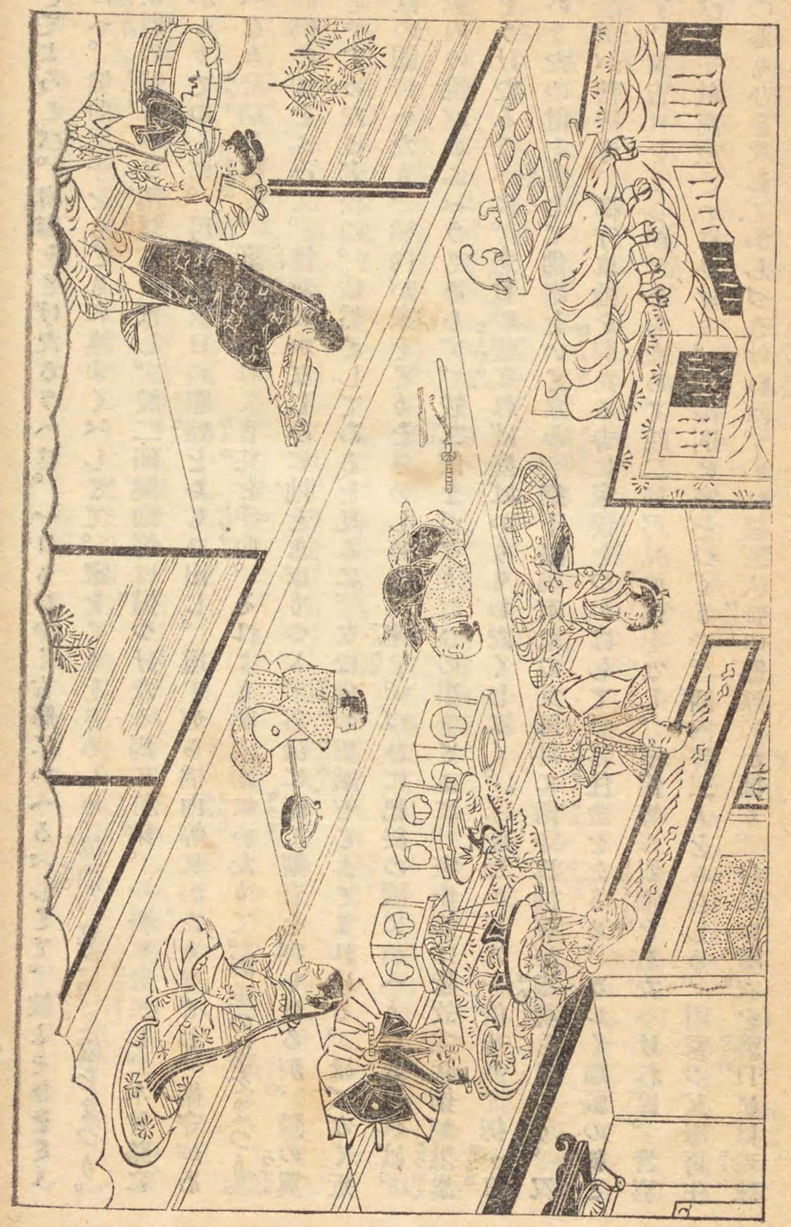
十三所の觀音巡禮にいで。前の日美濃國谷汲の華嚴寺に詣で。通夜しけるその夜の夢に。施無畏の寶處にいたるとおぼえて。觀音菩薩岩上に座し給ふ。韋駄天とおぼしきもおはし。善財童子にやあらん。みづらゆひたる童子もおはしましき。彩雲おゝきみち。異香薫じわたりて。たふとさいふべうもあらず。時に觀音告たまはく。汝等夫婦の孝心を感じ。前年金鈴道人をして告しめたるごとく。鷲にとられたる兒に。再會すべき時いたれり。今年某の月某の日。下野國黑髪山の邊。中禪寺にいたりてまたば。かならずめぐりあふべし。背上に鷲の爪の痕ある女こそ汝が女兒なれば。今は名を弓兒といふぞ。努々疑ことなかれ。金鈴道人といふは。原塡星の化身なり。その精をくだして假に下濁の凡身となし。過去の因果を示し未前の禍福を告しむ。皆是大悲扳苦のためなりと告給ふと見て醒ぬ。母も妻もおなじ靈夢なれば。奇異のおもひをなし。その月日をたがへまじと。いそぎて當國にいたり。今日しも此にまうで來つ。それなる婦人のうちに弓兒あらば。心におぼえあるべし。又鷲にとられし時。かれが身につけたるまもり袋に。觀音の小像をいれおきぬ。是たしかなる證なりと。こまやかにかたる。弓兒はさきつかたより。物語の半を聞てうれしさにたへず。心頭突々と跳てやまざりけるが。かたりをはるをまちかぬ。あわてまどひて走りより。弓兒と申すは妾なり。今のたまひしこと。皆心におぼえあり。さては實の父母にておはすかといひつゝ。ひしととりつきて哭けれは。橘内夫婦つらつ

ら見るに。幼顔におぼえありて。疑べうもあらず。十五年ぶりにて我子にあひ。夢に夢見しこちして。何といふべきことばだにいでず。唯さきだつは涙なり。老母も駕籠のうちよりはひ出て。孫にてあるか我はそちが祖母なるはとて。四人手をとりあひ。うれし涙にむせけるはげに理なり。橘内弓見をつれ〳〵と打まもり。さても〳〵うつくしうおひたちけるな。何人に育られて。かくみやびたる姿にはおひたちけるぞ。我見とはさらにおもはれず。養立給りしは何人ぞ。なみ〳〵の恩にあらず。せめて遇まあらせて。一言の禮をのべたし。とく〳〵かたるべしともよほされて。弓見は養父左衛門が洪恩のほどことに深きをおぼえ。非命に死せしかなしさ。更に又おもひいだされて胸ふたがり。涙あふれおちて返答もせず。時に健助かの女どもにむかひ。汝等はかしこの小堂に到りて待べしと云て退。扨近く進みて云く。先程の無禮は恕せ給へ。姫君は幼時のことは知せ給ふまじ。僕かはりて語はべらん。やつがれは美濃國の鄕士。渥美左衛門高敦と申す者の家士。來海健助と申者にて侍り。前頃主君左衛門。一子なきことを愁ひて。谷汲の觀音にいのり。一日華嚴寺に詣でかへるさに見れば。年舊大鷲。をさな子をつかみて飛來り。老松の梢に翼をやすめ。をさな子をひきさきくはんず氣色に見えしが。ものにおそるゝやうにて。髻をあてかねたり。主君これを見て。あな〳〵危し。誰かあるはやく鷲を射殺して。見をたすけよと命じ給ふ。その時やつがれかたはらにまたがひありしが。やがてだ

づさへたる弓に矢をつがへて。まばし打まぼりてかなぐるに。矢は鳴ひゞきて鷲のむなさかを射とほし。鷲はたちまちひるがへりて地におちたり。をさな子は着物枝にかゝりて。梢にとゞまりければ。やつがれいそぎまどひて木にのぼり。見を懷にしてくだり。主君にたてまつる。主君抱とりて見給ふに。玉のごとき女子なり。身うちを見れば。守り袋のうちに觀音の小像あり。かの鳥髻をあてかねしは。まさしう此尊像の擁護なるべし。これまつたく佛のさづけ給ふにうたがひなし。普門品に。說欲求女便生端正。有相之女。宿植德本。衆人愛敬と說給へば。此女子はかならず宿世に。德本を植たる者ならめ。我養女となしておひたてん。此見危命をたすかりしは。一ッには觀音の冥應。二ッには汝が弓勢のつよきによれば。此見の名を弓見となづけて。後〳〵までも汝が功をあらはすべし。志かりといへども。此子の父母死に失しとおもひて。さぞな歎ん。着たる物を見るに。貧者の子と見ゆれど。佛のさづけ給ひし子なれば。血すぢの穢たる者にもあらじ。汝かれが父母をたづねいだせと。命じ給ふにより。普探しけれどもつひに志れざりき。志賀の山里より。遠くへだちて。谷汲までかの鳥のつかみ來しも不思議なり。みなこれ菩薩の擁護なるべし。其後主君左衛門殿横死せられ。ゆゑありて家亡。姫君かくさすらへ給ひぬと。かたりければ。橘内等三人ます〳〵菩薩の靈驗をたふとみ。且渥美が仁心を感じて。涙に袖をひたしけり。皎二郎は双方の物語を聞て奇異のおもひをなし。金鈴道

人は塡星の化身と聞果して凡人にあらざりけりとひたすら感歎し橘内等にむかひて。初見の禮をのべければ。橘内いはく。さきつかたよりとひ申さんとおもひしが。物語のかさなるによりてひかへぬおん身等異なる裝束して兵具をもち給ひ。身上盡く血にそみたるは何ゆゑぞこゝに來る道にて。里人のかたるをきけば。今朝黑髮山に敵打ありしといひしが。おん身等にて侍るや。皎二郎いはくのたまふごとく我輩は昨夜かの山にて。我父母の敵。弓兒が養父渥美左衛門の仇なる。大蛇太郎といふ賊を打とりぬ。その仔細をいはんは一席に盡ず。ゆる〳〵語り申さん。まづやつがれが寓居にいたり給へとて。皎二郎健助湖中におりたちて。身上の血をあらひおとし。橘内等三人。小堂にまち侘たる女ども。一齊に連立て山を下り。健助が家にかへりぬかくてまづかの女どもの住所をとふに。みな近國の者なれば。人を雇てとと〳〵におくりゆかしめければ。みな恩を謝して出ゆきぬ。扨皎二郎弓兒健助三人かはる〴〵これまでさま〴〵の災にあひて。千辛萬苦したる事を。こまやかに語りけるが。弓兒肌につけたる守り袋より。觀音の小像を出し。妾自害せんとおもひしこと度〳〵なりしが。危き死をまぬかれしもまつたく此尊像の擁護なりとて。感涙袖をうるほせり。橘内等三人も。むかしの艱難をかたり。一同に喜びあへること限りなし。此時しも。肥後の國につかはしたる飛脚の者。網干が家僕を同道してかへり來家僕皎二郎にまみえて家内の無事を告路銀一百兩を出して渡しければ皎二郎折よし

とてよろこび。宿志をとげたるうへは。一日もはやく古鄕にかへるべしとて。旅よそひをとゝのへ。健助父子をもともに連ゆくべしとて。家をとりをさめしめ。眞袖が墓に詣て靈をまつり。足弱の輩はみな駕籠にのぼし。皎二郎健助等は擔つけたる馬に打乘。一齊に發足し。木曾路にかゝりてゆくに。弓兒は前日の艱難をおもひ出し。道すがら橘内等にかたりなどし。衛守がへなき最期を憐み。墓をたづねて香花を手向。それより美濃國にいたりて。渥美の墓をまつり。故鄕の地をふみて。懷舊のかなしみに袖をぬぼりつゝ。谷汲に詣て觀音を拜しけるが。鷲の翼をやすめたる老松の。依然としてあるを見るに。なほ佛の靈驗ぞとふとまれける。ほどなく近江の國にいたり。橘内が家をとりをさめしめて又連立。つひに肥後の國にかへりつきければ。家内の悅びいふべうもあらず。皎二郎まづなりはひの事をとふに。家僕等は皆故主兵衛が洪恩をうけたるうへに。老實の輩なれば塵ばかりもわたくしなく。家產むかしに一倍せり。扨一日あまたの僧を請じて佛事をいとなみ。網干渥美兩家の父母幷に衛守眞袖等が靈魂をまつり。又渥美が菩提寺。衛守眞袖を葬たる寺に家僕をつかはして。常住金ををさめ。ながく追福の料とす。又吉日をえらび。あらためて皎二郎弓兒婚儀をなし。家僕等に祝酒をあたへければ。皆喜びて千秋萬歲といはひけり。其後別に家をつくりて。橘内等三人をおらしめ。兩家の父母再生のおもひをなして。かしづきければ。かれ等三人昔の艱難にかはり。身には暖衣を襲口には珍味



に飫て。世界のたのしみをきはむ。誠に是橘内夫婦至孝の德なり。健助等父子をもともにをらしめ。朝夕を安く過さしけり。さるほどに皎二郎。よろづのことみな心のごとく。一點の不足なしといへども。よき君につかへさせ。先祖の家名をあらはさまゝとおもひし。亡父の宿願をとげすこれのみ一ッの不足なりしがほどなく嘉吉の一亂おこりて義敎公赤松滿祐が爲めに弑せられ給ひ。その子義勝公早世によりて。次男義政公將軍に補せられたまふ時に管領源勝元。皎二郎が文武に達したるうへに。孝義のあつきことを聞て感ぜられ召出して高祿をあたへ家臣とす。これによりて皎二郎亡父の宿願をとげて大に喜び。たゞちに京都にうつりて居住し。忠義をはげみて仕へけるがつひに三男二女をうみ一ッとして心のごとくならざるはなし。さかるに皎二郎主君勝元になげき渥美が家再興のことを義政公に願ひければ。義政公理におぼされ先將軍持氏の陰謀を憤のあまり。渥美等まで家を沒收せられしが。かれさまで罪なきことをさろしめされ。もとのごとく田庄をかへし給はりければ。皎二郎恩を謝し奉り。次男をもつて家をつがし渥美高運と名告し。健助をそへて家事をつかさどらしむ。後に左衛門が血すぢの女子ありしをたづねいだして高運に娶しけり。扨橘内が老母年百歳におよびければ。まれなる長壽なりとて。年賀のむしろをまうけ。百家の一族つどひて大にこれをいはひけり。皎二郎は勝元卒去の後も。その子聰明丸政元に仕へて。ます〳〵忠義をはげみければ。漸々に恩賞を得て家

富榮(とみさかえ)けり。皎二郎等衆人かくのごとく福利を得ること。圓通菩薩の冥應(みやうおう)とはいひながら。まつたく彼等が忠孝義貞のあつきによれり。此事ふるき物語にもかきて侍(はんべ)るとなん。人のほの〳〵かたりしばかりをかきけるなり

優曇華物語卷之五下終大尾

此册子百年前不知何人所撰。簡編已敝爲反故。貼屏障。百年後不圖出爲全本著于世。猶優曇鉢羅之三千年而華也。其所記孝子復仇。淑女執貞。暨鐸仙施敎。惡漢蒙罰之事。精細垂敎戒。相傳鉢華有七德。於此書亦然。一孝子寢苫枕塊。執兵遂志。二至誠通神。神人感格。三淑女惹思。嘉耦自成。四萬福來聚。恩惠播布。五吉德成鄰。國無賊民。六子孫蕃殖。僕從衆多。七身無疾病。齡保長久是此七德久隱而不顯。今得醒々叟以現出于世矣。書舖仙鶴請之鐫梓。彼問所以命其書。乃把筆題外簽曰優曇華。他日叟聞之曰。優曇華之稱。浮屠氏所以喩妙法希有。而非敢所當也。宜删去之云。余之所稱。唯歷久以出。待其人以著。七德一出。是彷彿乎優

臺華之現金輪王哉。非敢僭其德也。叟冷笑而諾。因題蕪辭。禦他人之誹謗耳。

關東　蘭洲東飄撰

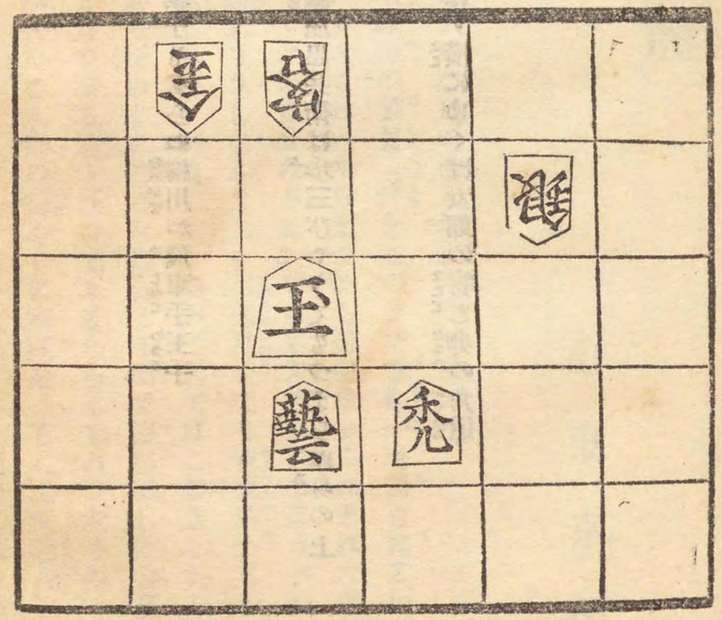
手段逼物娼妓絹籠自序

煙花を將棊の局面に設。娼妓の駒下踏の往來を觀に。茶店に客を待棊子あり。籬で私夫に間棊子あり。大通直して飛車先の如く。素痴曲て角道に似たり。初會の席上に初王手あり。馴染の閨中に入王あり色は金銀に有て思案になし。堅心の石田も崩れ。櫓に圍とも忽破る可恐巧計のために都逼とならんとを。桂馬は誇て歩兵の餌となり。香車の慮なきは謬自或は飛車手王手の義理に纏られ。或は後王手の借金に苦手のなき時は端の歩をつくづく苦にする茶店の借臨期で二歩をつかひ。留主をつかふといへども。借金乞の爲に逃道を失ひ。遂に雪隱逼と成あり。嫖客と將棊を圍は一手先はみへざるべし則娼妓絹籠を作る。予がへぼ象戯の及ざる所は段將棊の助言を乞而已。

于時寛政三年辛亥解凍日題於菊花亭　山東京傳

客はしごを二だん上る女郎てうづのかほにてよこにゆく藝車を一まいうつ女郎二けんめのざしきへにげるひらいて大手をとる又一ッけんにげるあたまから銀とうつ女郎ふそくにおもひとらずにわきへよる又金と打女郎がそこで死ぬ

右　惣傾城



目錄

第一回
義理と情の二タ道には間棊子もならぬ梅川が飛車手王手

第二回
つかひはたして二歩殘る龜屋忠兵衛は歩三ぴやうてもつまらぬ身の上

第三回
金銀をつかふ客にもかまはず横にゆくは女郎の實と卵の角道

手段詰物娼妓絹籠

山東京傳著

○第一回

義理と情の二タ道には間棊子もならぬ梅川が飛車手王手

□砂糖屋の丁兒甘きをきらひ鰻鑼屋の猫兒茲をこのまず李白一斗詩百篇といはれし底ぬけも劍菱で居風呂をたてゝ三日ばかり入ておいたらまつひら御免といふはされた事花の下にて死たひとといふた西行も飛鳥山に居つゞけをさせたらばかならず欠伸をするなるべしされば久米仙人も女湯の番人にさたら素敵に通をもうしなふまじく弓削某とても女護島へながしたらたちまちおいとま申べしどれほどに美麗ても朝夕眼前にぶらついて居てはこのましからす女郎買も命から二番目の大切な金銀を出し其くせゆきところを都合と工面で饅茹にした首尾をもとめ主親の四ツの眼をはじめとして人目をさのびて通へばこそおもしろくもあつたもの一升買の是るをしらず心のまゝに樽酒のたのしみせんと女郎の胯ぐらに家藏をうちこんで贖身をし渾家にしたところが三日もたゝず鼻につくは世間にいくらもあるかたなり雙ケ岡のしれものが花はさかりに

月はくまなきをのみ見るものかはといひしもまことに如在なき法師也こゝをもつて推ば女色の迷ひもはれぬべし嗚呼さうじやとひとり悟顔に口ひろきとはいふものゝ捨がたきはとかく此まよひの一ッにて上は一人よりして下も八萬人講の講頭兎の毛のポットセの髪に天乍で出やうといふ者夫さへもむかしおもへば信田の森のうらの朽家でちよろまかした徒にてかの川柳が選に母の名は親父の腕にしなびて居とは頗る穿なりわつちやこういふかなしいとがおさんすと酸鼻ば酒呑童子と腕をしもまかねまじき丈夫の涅槃像の二王みるやうに己に似あはずうちしほれてともに涙をこぼすをみれば實に女色は斷骨の斧 迷・心の毒にきはまりたり佛祖三經に浮屠子の曰愛欲は色よりはなはだしきはなしと宋の景之元が美色のために命を沒するをもつてみれば忠に死と甚輕しとかたく出かけしも理なり賢を賢として色にかへよとは則此場所ぞかし又媚は比封狐機は深穿虎などゝ明人もいふて置たれば女郎に身を謬と中華の人情もたがふとなく夏の温石と女郎の心はつめたいがちの者なればいづれゆだんはなるべからす其又戀といふ川上をたづぬれば僅方寸にたらざる節穴なれどむかしから此穴へ國を陷城をおとし家をおとし身をおとす者倭漢にかぞへつくしがたく周室を陷したる褒姒が穿も波錢一ぱんおとしたる烏炮川岸の穿もついに塡たうはさをきかず清の曼翁が碧海の迷津じやといふたもうそばなしむかし混沌未分のとき耳か鼻からか子をうませ社稷宗廟をつかせこんな節穴をばあけぬ相談にきはめ

たらこふいふ惑ひもあるまいもの何につけても邪魔な屁口怖の風ぬき穴あやしむべくおそるべきの妖洞なり

○爰にむかし大坂新町の廓ちかき最と閑なる所あり世を捨人のくれ笠地名を箕輪とよびなれしも箕にとなえの通ずれはぬれのちかきにあるゆへならん箕輪の寮とて人もまりあたりに目だちし一トかまへは新町の女郎屋槌屋治右衛門が別業なり抱の女郎梅川といふおいらんぶら〳〵と煩ひければ保養のためにはまづかなる此別莊がまかるへしと番頭新造の梅春も看病のためもろともにまばらくこゝに遷居るころしも秋の露さむく菊はたばこにむしられて尾花は炭の俵につくられ庭の草木もうつろひていとほそく啼すゞ虫の音をきくにさへ苦海の身は夜みせまらする鈴の音かと耳おどろかすも理なり折からそぼふる宵まぐれ遠寺の鐘の音もまめりいとゝあはれの秉燭ごろむめ川はかの福清がいつしにひとしく幽靈の濱かぜにあふたるやうにおとろへて臥具に其身をもたれゐるそばには新ざうむめ春が氣をなぐさめの本よみさし。モシおいらんのとえ心もちはどうでおざんすへ。アイけふはいつそようおざんす。ヲヽそれではモウだん〳〵とよくおなん〳〵すでおさりいしやう風のあたらぬやうになさりんしドレ藥をあたゝめて上申ンまやうと尻輕にとし下なれど姉とよぶおいらん大じの心根は妹女郎のかゝみなり梅川は泪ぐみ。ホンニ何から何まで心づけまんみもをよばぬぬしの介抱死でもわすれはいたしんせんに

へ。なんのマアばからしふおざりいす灸すへの文句のとをり世話になるのをあねといひ憂をかたるを妹と名をよびかはすながれの身はせはになつたり又きたり互のとでおざりんすものそんなとに心づかひをなさりんすなサアくすりをおあがんなんしへと藥ぢやわんをさし出せばむめ川は手にうけて。それにつけても苦勞になるは忠兵衛さんの事でおざんす。ヲヽそれもくらうになさりいすなおまへさんの病氣さへよくなればわたしがどふとも都合してかけもすまして上申内證の手まへもとりつくろひ二階のあくやうにして上ダ申ンす緣といふものはあぢなもの忠兵衛さんの初に來なんしたは去々年の三月さくらの初日でおざんしたね。アイぬしはよくおぼへておいでなんす。アイサわたくしは其時のとわすれはいたしいせんきかも其晩忠兵衛さんの形は羽織も小袖も黑八丈。ヲヽそれ〳〵下着は對いの結城縞。もちものや何やかやもいつそ意氣でおざんした。わたしも其晩まんざらでないと思ひンきたから床へもはやくゆきなんぞいひたいとおもつてもモシへほれた男にやものゝいひにくひものでおざんすねへ。それはたれしもさうでおざんす其夜はきかもわたくしが次の間に寢てゐんしてよく聞ておりんした忠兵衛さんのいひなんすニハ梅さん初から此やうなことといふてもねへが此間中からお前を仕廻によこしても御全盛といふものでついによいばんがなく初名代で來るも何か己ぼれらしいからきれつたく思てゐやしたが今夜かうしてお目にかゝるといふはわつちやア夢かとおもひやすトまづをつな

手を出しなんした。ホンニ忠兵衛さんの癖がいつそぬしは上手だよそれからわたしがかういゝしたわたしらがやうなはかない女郎でもマア虛にもそんなとを。いつておくんなんすはうれしふおざんすとよくいふものでおざりゐすがわたしやマアうれしくおざんせんまんざらでないと思ふ心からひよつとさうおつせへすをほんにしてとやかうおもひしてもこれぎりでお出なんせんときは大たいつみじやおざんせんにへそれよりはやつぱり正直にをれはわきに馴染があるが今夜はそこがわかいゆへきやうとなく夜をあかすまでに來たのだからかならずとやかうおもふてもむだゞほらに思ひきれといつておくんなんすがわたくしはうれしふおざんすトわたしが申ンしたアイサそれから又忠兵衛さんがいひなんすにはフウおめへはむでひとをいふものだ此でろうち茶屋からたび〳〵聞によこした事もてへげへきつてもあるだらうにそれをわきへこかしてそんなとをいふのはフウきこへた思ひきれといふなぞだらうとがれ死をするまでもさういはれては是非がねへと一ッすねなんした。ホンニさうでおざんしたそれからわたしも面白なつて來てヲヤぞれつてへどうきやうのうさう思ひんすくらゐならこんなに氣はもみんせん何をいふのも。フウ初會だといふのかこつちは久しくとやかうとおもつて居た心からは初の裏のと思ひはしねへきたがこつちばかりさう思つてこんないやらしい事いふはつもられる所がはづかしいモウ何もいひやすめへ。トあちらむいて寢なんしたゆへやう〳〵あやまつてこつちをむかせモ

シマア聞ておくんなんしおまへさんも人にきられたお方なれば今までお近付でこそなけれ茶屋でもたび〳〵お見かけ申とうからきつておりんすもの初會の心じやおざんせんおまへさんさへほんに來ておくんなんすならわたしやシツかくごをしてよびとげ申心でおざんす。ハテおれもさうなれば浮氣をのけて眞ゾの事。ソリヤほんにかへ。ム、きれた事とんなうつくしいきやつつらをなんの持ずともいゝとにこんなにをれを迷はせる。ト煙管でたゝくまねをきなんしたはづかしいが其ときは眞にうれしくおもひんしたそれがやつぱり悪縁でおざんしたとほれた男はたを思ひ出し我身にかゝる夜具を出れば梅春はそばから氣をつけ引かくるほどなく四ツの鐘なれば氣くたびれても梅川は其まゝそこにすや〳〵と寢いりつけばむめはるが夜具かいつくろひ屏風ひきよせ見かけてをきし淨瑠璃本一枚あくれば秋のかぜ障子のひまより方燈の火をふつとふきけす折から封壇のあたりと思れて迷子の〳〵の久太郎ヤイ。ト、トンチヤン〳〵廡へをとす雨の音サラ〳〵〳〵〳〵〳〵

第二回

つかひはたして二歩のとる龜屋忠兵衛は歩三ン兵でもつまらぬ身の上

□朝光也涙速の色をせきとめて黄金でかけし木擁はながれの里の浮きづみ贖身あれば桃籠あり日に新にして日々にあらたなる町の夜みせのにぎわひは兩かはにてひきたつチヤンラ〳〵ゴシ〳〵〳〵地すはり「さいもん小ぐり清水のだん いたはしやてるての姫とある所へ立よりて口説ごとこそあはれなりづれレン〳〵〇いめへましい下踏のはなをゝふんぎつたコレ鐵やこれから西川岸をそゝるべえきを付ろまがりつとにみづッたまりがあるぜへまだかはきやァきめへかぶろ「かうしへかほ山本屋ェイ八ウ〳〵こなたには里町「かうしをのぞ見すけんの徒コウ見さつせへァノ如意輪觀音が箔きろのこんりうに出たといふ身でほうづへをして居る女郎は扇風が一度かつて揮られた女郎だ花曉「フウなんたるひつてんらしい女郎だのう茶づけ店のならつけといふすひ櫛に水膠をみるやうな笄をさしてあるぜへふめぬへあたまだコウあけぼのへわきざしも一しよにあづけてくりやァよかつたのうごうせへ去やまになるとた犬尾をふまれて「きやん〳〵 花「おきやァがれとんだ氣のきかぬへ犬だ里「犬をふんだも今道心じやァぬへか 花「わりい〳〵 里「こつちの初だけのさひといふ色の着ものをきてかふさいで居る女郎はにげそくなつて判入の所へさがつたといふつらだ 花「うさァぬへァレあくびをすちァ大キな口だぜ 里「かけ硯にもたれかゝつてゐる女郎は素入繪の濱むら屋だト花曉はハやとなりのかうしをのぞいてゐるともまらこつちらの再興めへの二王の腕といふ色の着すやつはりそばにゐるとおもひむしやうにきやれるものをきてゐるきんは茄子のさしみをこせへるとつて鍋のふたでおつぺしたといふつらだのう

トいへどもあいさつなきゆへ　ふりむいてみれはまちぬ人ホイこいつァ大わらひだトゆきすぐる　□自註ニ曰此里町花曉はいづれも助六かまたうちをくふ長崎丸山にて十年ぶりといふ實はすてをふつてもどるゆへ素手振といふあやまりなるよし往古吉原にてはとりんぼうと云今は素見といふそこで女郎はすかんといふか○扨此むかふより來る二人の客はやかたものと見へ　侍客「見なへどれもうつくしいものでござるの　今一人「なるほどきれいなものじやこう見た所は御年始に奥へ出たやうでござる　客「いかさまァノまん中に柏の定紋を付てをる女郎はよい器量ではござらぬか金田氏の内室に少しにてをる　客「なるほどイヤこちらの黒い衣裳もよくござる　客「モノ是は何屋といふのじや　茶屋男「つきそてのうちからかんばんてうちんをさげてあとの方にゐたるか　ハイこれは此新町で一二をあらそふ槌屋と申のでござりますなんならこゝにおきめなされませさうこういたすうちそろ〳〵よい女郎衆はあがります　客「イヤもそつと他を見物いたさうトこいつハはなはだきがチヤンラ〳〵〳〵多しまたすかくきのおとかくる折しも表のかたそりやけんくわよと立さはぐかのむめ川さふかきなトみの　忠兵衛「むなぐらを取れコリヤァどふするのだトふりはきをひた手をとつてなす　龜屋忠兵衛地まはりにけんくわをまかけられたるなり　忠兵衛「あんまりうぬがつらが大きいから此定さまがむしががつてんしねへはへ　同鐵「うぬがやうな定「へたに齒箱をならしやァがるとこうだぞト大黒のつらへ白墨を入たやうにまんちうのびやうをうつたくろぬりの丸げたをぬいでふりあぐる　忠「其手をまつかさとりて野郎が此土地へへいりこまるからおいらが格子へ立てもすのこんにやくのとやかましい崑崙兒の灸點をみるやうに白ィつらをはりまげてやるべいむねつくそのわるい猿唐人じやァねへかコリヤァわいらァだれにかたのまれたなァ「コロリンシヤン。たそや此夜中にさいたる門をたゝくはたゝくともよもあけじ宵のやくそくなければトむかふの二かいの琴きこゆる○又鐵すきをみて（忠）にぶつてかくる（忠）まづんて勇みひねる（鐵）はづみに

て天水桶へころびかくるすかさず（定）又ぶつてかくる（忠）ひらいてよこにはらふ（定）よろ〳〵としてさふへかたあしふみこむり一度にむなぐらをむづとさる　琴「羅綾のたもとをひかばなどかきれざらん所へ人々出やひ引わくるてうど二かいの琴きいらんむめ川きやく人あつてもはやほん間にさこおさまつてゐる次の間に梅春「ぎれつてへ火だのうなぜおこちれは番頭新ざうむめ春ぎかみ火ばちへどびんをかけわる紙であをいている　忠「ぎれつてへ火だのうなぜおこちれへのうト折から廊下にて新造　浮浪「ほんにかへはりさけすぬト何かいひながらかけて此ざしきへ來り　むめはるさんへ御つぎのものをおあんなんしたか　梅「ウ、おかたじけのちに喰ふと思つてぎまつておいたよきやく人はおめへどうした　浮「わいサ聞ておくんなんしへにくゝつてなりヒせんあれからとう〳〵かけだして參りぎた茶屋からも人をよこしいしたけれどもわたくしやァかまいせんひさしいもんでおさりいさァな　梅「おめへもほんにあれほどほれられたがつているものをモウちつとほれてやればゝ　浮「おめへさんさうおつせへすけれ共わたくしだつてもそれへにやァほれられんせんものを此ざしきの　さよ舟「あの人さんもばからしいよくおかけ出しなんすねへ　浮「ホンニいつでもせわをふりしん　やかせる客人でおざりイすよトいひながら長もちのふちをなでゝゐる　梅「コレ戀路や今いひ付たことをきり〳〵ぎれへか何をして居るのだ　禿「アイ今こゝに　梅「久しいもんだ早くいかねへかいふ折ふし本ン間のびやうお出なんしッサおいらんでサ　浮「アイ今參りイしやうトたつ所へ來るきやく下着のまゝおびをぎだらくにむり口か　柳燕「浮なみさんでへぶそは〳〵するの格子へ地いろでもきたか　浮「よしておくんなんし